R E H K

第 3 号

目　次

《講　演》

アラゴン連合王国ハイメ一世（1208-1276）の『業績録』についての一考察 ……尾崎明夫 (1)

《論　文》

動詞Ir＋seについて（上）〔寄稿〕 ……近藤豊 (11)

幻の『絵本どんきほうて』〔寄稿〕 ……世路蛮太郎 (23)

ベラスケス〈慰め者〉肖像画について
—「シリーズ・座像」にみられる方法としてのリアリズム— ……浅若みどり (39)

Una consideración sobre la elisión y la permutación en la coordinación ……三木一郎 (51)

状況補語における時を表す名詞句と前置詞句—前置詞の役割について— ……武藤節子 (61)

Julia de Burgos en lo político y literario ……志柿禎子 (69)

Pablo Neruda: La imagen mítica de "Alturas de Macchu Picchu" ……梅田美代子 (79)

スペイン語動詞におけるアスペクトの構造に関する一考察
—構造主義的観点より— ……米田富彦 (93)

《翻　訳》

パロマ・ディーアス＝マス「ユダヤ・スペイン語（下）」 ……坂東省次(訳) (103)

フェルナンド・デ・フエンテス他
〈ピト・ペレス、波乱の人生〉(II) ……片倉充造(訳) (119)

オクタビオ・パス／ジャック・ルーボー／チャールズ・トムリンソン／エドワルド・サンギネッティ『レンガ』 ……太田靖子(訳) (141)

《資　料》

スペイン系ユダヤ人に関する日本語文献目録 ……坂東省次 (161)

1995

京都外国語大学イスパニア語学科修士会

アラゴン連合王国ハイメ1世（1208～1276）の『業績録』についての一考察

尾崎明夫*

1）はじめに

今日しばらくお時間を拝借いたしまして、お話し申し上げたく思いましたのは、中世のスペインの一翼を占めましたアラゴン連合王国の王ハイメ1世、征服王と冠され、おそらく同王国の数ある王様の中でも一番人々に親しまれている王様の直筆になると言われる『業績録』という書物についてです。ただ、初めにこの王様の一生を簡単に紹介するのが筋かと思います[1]。

ハイメ1世は、1208年、アラゴン連合王国王でありラス・ナバス・デ・トロサの英雄の一人でもあるペドロ2世と、モンペリエの君主マリアの間に生まれました。この夫婦には愛情がなく、しかもまだわずか5歳の時父王はアルビジョワ十字軍と戦い戦死（1213年、ミュレーの戦）。母君もそれと前後して他界し、ハイメは非常に困難な幼少時代を迎えます。教皇イノセント3世のとりなしで、テンプル騎士団によってモンソンの城で養育され、9歳の時この城を出るや否や合戦に巻き込まれます。以後1227年までのアラゴン・カタルーニャの大貴族の政争の道具として弄ばれますが、この幼少時代の苛酷な経験が彼の性格を錬磨して行きます。1227年アルカラーの和で貴族の乱を最終的に平定すると、衰退の兆候が明らかになったイスラム・スペインに目を向け、先祖代々の宿願であったレコンキスタに着手し、彼の名を永代に残すこととなるのです。

まず、1229年カタルーニャの貴族商人の強い要請を得て、海賊の巣窟であったマヨルカ島に遠征、同年の大晦日にその首都パルマを征服し、3年掛かりでマヨルカとメノルカの2島を征服します。この海上王国の征服は、ハイメに非常な誇りと自信を与えます。

この事業が完了すると、矛先を南のバレンシアに向けます。この地方の征服

※おざき　あきお（元立命館大学助教授）

は100年以上も前からアラゴン諸王の夢でありました。ハイメ自身も、1225年に同地方の北部の要塞ペニスコラを攻めていますが失敗に終わった苦い経験がありました。しかし、ハイメは、年齢においてだけでなく経験においても以前と比べ数段に成長しておりました。この征服戦は、イスラムバレンシアが3つの勢力に分裂していたため、軍事的な困難はさほどではありませんでしたが、障害はアラゴン貴族の非協力的な態度でした。というのは、彼らは、カタルーニャがバレアレス諸島の征服で利益を得たのに対し、バレンシアを自らの領土の拡張の場と考えていたのですが、この王国の征服が王権の拡張に寄与する危険を察知したのです。この征服事業を詳細に綴った『業績録』には、何度となく王に戦場からの撤退、または戦闘の中止を進言する貴族の姿が描かれています。この事業は13年をかけて達成されましたが、これを可能にしたのは王自身の征服に対する強い意志であるといっても過言ではありますまい。ただ、征服は住民の残留を認めた条約によって大半の城を降伏させながら遂行されたので、征服後もバレンシアには非常に多くのムデハル（キリスト教王国に住んだ自由人回教徒）が残り、後長きにわたって問題を揺曳することになります。事実ムデハルの反乱は40年代の末に起こったものを筆頭にして、その後も1276年王の晩年まで4度の蜂起が記録されています。

ハイメ1世の武勲としては、このほかには1265年カスティーリャの領土であったムルシアでムデハルの反乱が起こると、王の婿に当たるカスティーリャ王アルフォンソの要請を聞き入れ、同地を再征服したことも逸することができません。しかしながら、ハイメの晩年は、度重なる遺言の変更がもたらした王子たちの間の対立、それと密接な関係のある貴族の反乱、聖地十字軍の遠征の失敗、そしてバレンシアでのムデハルの反乱と、不幸なそして王の不手際が目立つ事件が目白押しで、同王の専門家フェラン・ソルデビラが、ハイメの一つの失敗は長生きし過ぎたことと言うのもあながち誇張とも言えません。

外交政策としては、ハイメはこのころ地中海への露骨な野心を見せていたフランスとそれを支援する教皇庁との摩擦を極力避ける方針をとりましたが、息子のペドロ王子はこの父王の態度に飽きたらず、即位すると積極策に転じ、14世に華々しい発展を見せるアラゴンの地中海進出の土台を築くことになります。この父子の世代断絶もおもしろいテーマですが、ここでは触れません。

2)『業績録』

ところで、このハイメ1世の名を広く世間に知らしめているものが、その征

服事業を別にして、彼が残したと言われるLlibre dels feyts、直訳するなら『業績録』という書物です[2]。この書物は、ときに『ハイメ1世の年代記』とも呼ばれますが、いわゆる中世の年代記とは趣を異にした書物なのであります。つまり、中世スペインの年代記は、時には天地創造から書き起こし、人類の歴史を俯瞰しながら主題である自国の歴史に筆を移して行くというような、壮大なスケールの書物ですが、ハイメのものは、むしろ自叙伝の形式を取っているのです[3]。つまり王自身が第一人称で話を進めていく形式を取っているのです。これは当時のヨーロッパの文学類型の中では異例のことで、この書物がハイメの手になることを否定した学者たちの最大の論拠はここにありました。もちろん、年代記の様式を呈していないとしても、その内容は13世紀アラゴン・カタルーニャ連合王国の領土的発展を中心にしているのですから、当時の同国の歴史や国際政治を調べる上で一級の史料であることには変わりありません。

もうひとつこの書物の特異な点は、当時としては型破りのカタルーニャ語で書かれていることで、カタルーニャ文学の歴史においても注目される作品です。カタルーニャ語を文学や哲学の道具として完成させたのが、ラモン・リュユと言われていますが、ハイメ1世の『業績録』は、リュユに先立つこと約半世紀、古いカタルーニャ語の面影をまだ十分に残していて、この言葉の歴史研究のためにも逸することができない文献となっています[4]。

このような特徴を備えた書物が人の目に留まらないはずがありません。ただ不思議なことに、どうもオリジナルは、完成してからしばらくの間は王家の図書館に保管され、一般に閲覧できなかったようで、13世紀末に『年代記』を書いたデスクロットさえハイメの自伝を参考にできなかったようです。しかし、世紀が変わると、バルセローナの王家によって多くの写本が作られ、ペドロ4世儀典王はこれをまねて自己の年代記を出筆しています[5]。また、17世紀初頭アラゴンの歴史を編集したヘロニモ・スリータも、バレアレス諸島とバレンシアの征服を綴る際、主に『業績録』の記述に頼っています。近代になると、研究者の関心はこの書物の内容に注がれることになります。かくて、同書の刊行が始まるとともに、その写本の系譜、著者の問題、作成の年代などなどの諸問題が取り上げられ、「カタルーニャ文学史上最も注目を浴びた文献」と言われるまでになりました[6]。そこで、今日は簡単にこれらの諸問題の紹介を通じて、この書物のもつ意味を多少とも明らかにできればと思います。

3) ラテン語版とカタルーニャ語版について

さきほど、『業績録』はカタルーニャ語で書かれてあると申しましたが、実はこの書はラテン語の版もあり、厄介なことに現存する写本だけを取り上げますと、ラテン語のものが1314年、カタルーニャ語が1343年と、最古のものはラテン語版なのであります。前者は、1313年にドミニコ会士のマルシリオが、ときの国王ハイメ2世のために作成した訳の写本で、後者はハイメ2世の孫にあたるペドロ4世の要請でポブレットの修道院で仕上げられた写本です(7)。

この2版を比べますと、まず目につく外見的な違いとして、カタルーニャ語版は王自身が第一人称で物語りを進める形式を取っているのに対し、ラテン語版は王の行動は第三人称で語られ年代記の形式を示しているところです。しかし、内容を見ますと、叙述が微妙に異なる箇所や、一方にあって他方にないくだりなども皆無という訳ではありませんが、大部分は一方が他方を逐語訳したと思われるほど似ています(8)。

この2版の関係は、ハイメ1世のオリジナルに関係する極めて重要な問題を含み、それぞれの版の写本の系譜についての研究と並んで、19世紀の初頭から様々な意見を生みました。ここでは、その論争の子細は省略し結論だけを申し上げますと、ハイメのオリジナルはカタルーニャ語で書かれ、1343年の版はそのかなり忠実な写本であり、1314年のラテン版は、今は失われたオリジナルかそれに近い写本を原本にして、カタルーニャ語から、訳者の判断にしたがって追加訂正を加えられつつ、ラテン語に訳されたものである、と考えられています。それゆえ、『業績録』を、ハイメ1世の人物に迫る資料として見る場合、あるいは同時代人の残した歴史的資料として見る場合、1343年のカタルーニャ語版が研究対象となってくるのです。事実、カタルーニャ語版の公刊はすでに5つを数えますが、ラテン語版のそれは最近の一つの仕事しかありません(9)。

4）カタルーニャ語版の著者の問題

それでは、カタルーニャ語版の著者はだれか。『業績録』には、それがハイメ1世の手になるものであると明言されているのですから、著者の同定は議論の余地のない問題のはずですが、19世紀の初頭からこれに反駁する学者がでてきました。彼らに共通する論拠は、『業績録』には中世のキリスト教君主にふさわしくない箇所があるということでありました。確かに、同書には、王が自分の罪や不安を告白する箇所や、一見政治や外交に何の拘りもないような些事が顔を出します。しかし、これらの議論に対しては、それなら君主が神聖視

されていた中世において、王以外のだれがそのような不謹慎なことを書くことが出来たであろうというソルデビラの反論で十分でしょう[10]。この説は1964年『カタルーニャ文学史』を出した、この道の権威マルティー・デ・リケルによって、定説の地位を獲得したかのように見えました[11]。

しかし、1975年この問題を別の視野から分析し、この定説を覆そうとした論文が出ました。それは、ハイメ・リエラの研究で、彼は『業績録』だけではなく、中世カタルーニャの他の4つの年代記を取り上げ、その中で聖書関係の引用に注目し、その比較検討をしました[12]。その結果彼は、ハイメ1世の回顧録には他の年代記に見られないような多くのかつ正確な聖書の引用が見られる、それは俗人の能力を越えたもので、著者は教養のある高位聖職者のはずである、と結論を下しました。そして、真の作者として、王の庶子であり、後にウエスカの司教となるハイメ・サロカを指名しました。

この議論は、しかしながら、13世紀バレンシア史の権威ロバート・バーンズによって完膚なきまでに反駁されました[13]。バーンズは、『業績録』に現れる聖書関係の知識は、決して神学の素養のある聖職者のそれではなく、むしろ俗人騎士のそれであることを、様々な例を挙げて論証した。そして、もし聖職者が起草出筆したなら、カタルーニャ語ではなくラテン語で書いたはずで、また自伝の形式ではなく年代記の形式を取ったはずと指摘しました。この論文をもって、この書物の著者がハイメ1世であったことは、定説として認められたと考えてよいでしょう。

しかし、それではこの自伝形式という当時のヨーロッパではなじみの薄い形式はどこからヒントを得ているのでしょうか。バーンズはこの難問にも敢えて触れて論を終えています。彼によれば、西洋にも自伝文学が十字軍期から生まれているが、ハイメ1世のそれはそれをイスラムの伝統的歴史学にあるという仮説を提示しています。この論拠は、イスラム世界には君主が自叙伝を書く伝統があったという点と、ハイメ自身が青年時代からイスラム世界との接触があり、イスラムの文化風習にも造詣が深かったという点でありますが、この論は仮説の域を過ぎるものではなく、その正否を今後の研究に託して終わっています[14]。

5)『業績録』の編集

しかし、王がある書物の著者であるということは、王自身が机に向かって紙に筆を進めて行ったということを意味するのではありません。『業績録』にと

きに見られる第一人称の複数と単数の併用、また会話的な文体は、この書が口述筆記されたものであることを示しています。また、多くはありませんが、人物や地名の固有名詞に関する誤りや、あるいは「それについては記憶がない」という述懐、また年代の誤りなども、この書が短い期間に資料を十分に調べることなしに、一気に書き上げられたと考えさせます。また、あるときには、王自身がバルセローナの議会でしていた演説の中に、「以上のことについてはこの書の緒言で汝らにすでに語っているが」という文が挿入されていますが、このような事実は、王が口述中に勘違いしたことを物語っています。この書物の作成年代としては、前半分は1244年頃、後半部は王の晩年の1274年頃に書き上げられたという説がありますが、反論もないわけではないですが、私はこの説に傾きます(15)。

この書物の作成の折りに利用した資料の問題ですが、書かれた記録も参照した筈です。でなければ説明がつかないような正確な記載がありますので。しかし、まずなによりもこの書は王の記憶から生まれたと言って差し支えないでしょう。また王はときに事件の目撃者を侍らせていたようで、このことは「ギリェム・プーヨ、これはこの書が書かれたときに余と一緒にいたギリェム・プーヨの父である」というくだりからも推測されます(16)。この書物全体を見れば、あまり推敲されたようには見えません。おそらくその時間がなかったのでしょう。しかし、この事実はいっそう『業績録』のオリジナリティを際立たせてくれます。なぜなら推敲があればあるだけ、高位聖職者の手が加えられるわけですから。

『業績録』が依拠した資料の問題に関連して、この作品の中に叙事詩を散文化して作られた箇所が少なくないという説を紹介したいと思います。それは今世紀の初頭にマヌエル・デ・モントリウが指摘し、ソルデビラによって更に強調され、リケルが受け入れて定説のような扱いを受けた説ですが、最近これに強く反論する学者が出て来ています(17)。中世カタルーニャには書かれた形で叙事詩が残っておらず、もしこの説が正しいなら、カタルーニャにも隣国のフランスやカスティーリャと同様に、民族の心を反映した叙事詩があったということになるのです。モントリウらは、『業績録』の主に戦闘関連の紙面に類似母音の重複を探し、それをもとに叙事詩の原型を再構築できたと主張しましたが、最近イタリアの学者ステファノ・アスペルティがこの説に敢然と意義を唱えました(18)。彼の言い分は、まずこの類似母音の重複が必ずしもその裏に韻文が存在することを意味しないこと、「復元された」と言われる韻文が、中世の叙事

詩に特徴的な詩的な動感がないこと、内容的にも『業績録』は情報伝達的で、聞くものの感動を誘うような技巧に欠けていること、あるいは登場人物の英雄化が見られるどころか、極めて現実的に描かれていること、などです。この論争は、カタルーニャ中世に叙事詩が存在したかどうか、また中世の叙事詩とはいかに定義されるか、という興味深い問題を含んでいますが、残念ながら私には現在はこれに判断を下す力はないことを認めざるをえません。

6）本書の目的

ハイメは序章において次のように述べています。「余がこの世から去ったとき、主なる神の助けによって余が成し遂げたことが人々に知られるために、また我らの主が余に与え給うた恩恵について知りたいと思う人々のために、そしてこの世の他のすべての人々がこの模範に習って全能の神に信頼をおくことができるために、この書を記念として残す」と[19]。実はこの序章は、この格調高く整然とした文体から、確かに教養ある高位聖職者が書いたものであると考えられているものです。しかし、ここに記した述懐は、たとえ第三者の手になるものではあったとしても、この意志は『業績録』全体にわたって感知できるものです。ハイメは、自己のなした数々の武勲を誇りにすると同時に、それを神の助けのお陰と考え、世間に知らしめようと考えたのです。

この書には、サンチェス・アルボルノスが中世キリスト教世界の一特徴と指摘する、摂理的世界観とでもいうものが全面に現れます[20]。ハイメは、自分がキリスト教世界と教会のために特別の奉仕をするために神に選ばれたということを信じて疑いません。しかし、それは彼の試みがすべて成功するという意味ではありません。聖地十字軍遠征のための航海で、不順な天候で航行に困難を来したとき、「神がこれをお望みになっていない」と考え、企画を断念しています[21]。『業績録』は、自伝の形式を取りながら、神を賛美するというアウグスティヌスの『告白録』にも似た意向が感じられます。

7）おわりに

ここまでのお話で少しは明らかになったかと思いますが、このハイメ1世の『業績録』のもつ意義は、なによりもまずそれが当時のスペインを代表する君主が自己の心を開いて出筆した書物であるということにあります。リケルの言葉を借りるなら、「デスクロットが偉大な年代記者であることは疑いがない。彼はペドロ3世大王の治世の劇的な瞬間を逐一記録した。しかし、同王の心の

扉を開いてその中に入り込むことはできない。その父ハイメ1世には『業績録』に挿入された本人の言葉のおかげで、それが可能になる」のです[22]。

現在までこの作品は、13世紀中庸のアラゴン連合王国の外交内政の研究のための史料としては、頻繁に使用されて来ました。しかし、中世の人間の心を覗くために体系的な検討の対象にはまだなっていません。この視点からなされた唯一の研究は、「ハイメ1世の信仰生活」という題で発表されたバーンズの論文だけです[22]。十字軍精神を具現化したようなこの君主が、対イスラム戦争をいかに考えていたのか、また君主として貴族、聖職者、都市民に対してどのような感情をもっていたのか、私人として家庭内の問題をどう扱ったのか、このほかまだまだ本書に問うべき問題を提起ができると思います。メンタリティーが歴史研究の一分野となった今、『業績録』をこの視野から解析する研究が望まれていると思います。

注

(1) Ferran Soldevila, *Jaume I. Pere el Gran,* Barcelona, 1955.

(2) 『業績録』の紹介としては、1343年のポブレットの写本の写真版*Libre dels feyts del Rey En Jacme; Edición facsímil del manuscrito de Poblet(1343),* Barcelona 1972のMartí de Riquerによる "Introducción" を参照のこと。

(3) Jordi Pujol, *Llibre desl fets,* Barcelona 1991の "Introducción" を参照。

(4) Jordi Burguera, *Llibre dels fets del Rei En Jaume,* Barcelona 1991, vol.1

(5) これらの年代記については、F. Sodevila, *Les quatre grans Cròniques,* Barcelona, 1971.

(6) J. Burguera, *o.c.,* p.6.

(7) ラテン語版の公刊本としては、María de los Desamparados Martínez San Pedro, *La Crónica latina de Jaime I,* Almería 1984.

(8) *Ibid.,* pp.51-62.

(9) J. Burguera, *o.c.,* pp.12-14.

(10) F. Soldevila, pp.36-45.

(11) M. de Riquer, *Historia de la literatura catalana,* Barcelona 1964, pp.398-402.

(12) Jaume Riera i Sans, "La personalidat eclesiàstica del redactor del《Libre dels feyts》", *X Congreso de Historia de la Corona de Aragón,* 1975, pp.575-589.

(13) Robert I. Burns, "The King's autobiography: The Islamic connection", *Muslims, Christians and Jews in the crusader kingdom of Valencia,* Cambridge, 1984. また、"Spiritual life of Jaume the Conqueror King of arago-catalonia", *X Congreso de Historia de*

la Corona de Aragón, 1975, pp.323-358.

(14) バーンズが拠っている研究は、Franz Rosenthal, *A history of Muslim historiography*, 2nd ed. Leiden, 1968.

(15) "per co car al començament del llibre se demostre" (cap.48)。Lluis Nicolau d'Olwer, "La Crònica del Conqueridor i els seus problemes", *Estudis Universitaris Catalans*, XI(1926), pp.79-88.

(16) "pare d'aquest Guillem de Puyo qui era ab nós quant faíem aquest libre"(cap.16).

(17) Manuel de Montoliu, "Sobre l'element epic-popular en les Cròniques catalans", Estudis universitaris Catalans, VI(1912). F. Soldevila, "Catalunya ha tengut èpic-popular?", *Revista de Catalunya*, II(1925/1), pp.240-250. M. de Riquer, *o.c.*, pp.373-394.

(18) Stefano Asperti, "La qüestió de les prosificasions en les cròniques medievals catalans", *Actes del IX Congrés del Colloqui Internacional de Llengua i Literatura Catalanes*, Montserrat, 1993, pp.85-137.

(19) "per tal que · ls hòmens coneguessen e sabessen, can hauríem passada aquesta vida mortal, ço que nós hauríem feyt ajudan-nos lo Seyor poderós, en qui és vera Trinitat, lexam aquest libre per memòria. E aquesls qui volran hoir de les gràcies que nostre Seyor nos ha feytes e per dar exempli a tots los altres hómens del món"(cap.1).

(20) Claudio Sánchez Albornoz, *España, un enigma histórico*, 8 ed. Barcelona, 1983, cap.VI.

(21) "ens semblava que a ell (Nostre Senyor) no plaia"(cap.488).

(22) 注(13)を参照。

〔寄　稿〕

動詞Ir＋seについて（上）

近　藤　　豊*

1. 序論

本稿の目的は自動詞につく再帰代名詞Se、その中でも運動の動詞とりわけ主体移動動詞Irに関する用法を統語的・意味的側面から考え、再帰代名詞Seの用法のメカニズムを探ることにある。以下その手順を記す。

○　閉じた資料体系(注1)から統ての動詞Ir(se)の事例をとり出し、統語的にはSeの有無によって二分し、意味的には下記の如く具体的移動(1・2)と抽象的移動(3・4)の分類を施した。

1. Voy al campo.　私は田舎にゆく。
2. Me voy a casa.　私は家に帰ります。
3. Va bien vestida.　彼女は良い身なりをしている。
4. Se nos va el niño.　私たちは息子に死なれた。

○　動詞Irの基本的意味特徴にもとづき、この構文を場所の移動または場所の変化ととらえる。その述部に固有な意味役割成分のうち、移動主体・起点・到着成分が主役として、そして経路・方向成分が脇役として事象に参加するものと考える。なお本稿は両構文Ir(se)の使用のメカニズムを探ることを主たる目的とするので、上記の主要な成分以外の要素もそれに関わる限り射程内に入れ記述しながら両者の比較対照をおこなう。

2. 具体的分析

2.1　まず上記の規準にもとづく収集文例の分析結果を記す。

表1.　総収集例　約650例

irの総数　516（79％）	irseの総数　134（21％）
具体的移動　202（39％）	具体的移動　115（86％）
抽象的移動　314（61％）	抽象的移動　19（14％）

※こんどう　ゆたか（天理大学助教授）

データの語るところによれば、予想通り両者の使用割合は516対134(79％—21％)となり、Se構文は周辺的要素であると一応みなし得る。さらに個別資料に沿うと、Camilo José Cela、"El Viaje a La Alcarria" に至っては399余例中26例(8％)にも満たず、上記の数字をさらに裏づけている。しかし両構文を具体・抽象的移動レベルで考えると動詞Ir表現では具体的移動表現に対して抽象的移動表現の方が優位を占め、移動動詞のイメージからは予想外の結果を得た。(202対314、39％—61％)[注2]しかしSe構文では逆に具体的移動表現の方が圧倒的に優位を占め、抽象的なものの方がその中では周辺的要素に追いやられていることがうかがわれる(115対19、86％—14％)。

2.2 ここではまず述部の表わす事象に対して主要な働きをする意味役割成分(移動主体・起点・到着点など)以外、すなわち動きに対して側面から修飾を施し、一種雑多な副詞的成分として述部に係ってゆく成分を記す。

〈内容規定〉

(1) ¿Va usted de camino? (3-123)

その他 de retirada, de paso.

(2) Pues hoy es una noche muy buena para irnos de bureo. (1-115)

その他 de copeo、de tourné(地方巡業)、de vacaciones、de viaje,

この表現は動きそのものが如何なる目的・内容を有するか、という規定的側面をとりあげた例であり、各々caminar、viajar、pasar、copear、burearなど一語に置き替えてもさほど意味的に異ならず、動詞Irがその動き(移動)の部分を引き受けた例である。

(3) Un día que vaya usted de bureo, me llama y nos vamos juntos. (1-254)

(2)と(3)の事例によってこの種のSeの使用は任意的であると一応考えておく。[注3]ただし(1)については一応不可とする。

〈手段〉

(4) Pues、no、todavía no, ¡Como voy en bicicleta! (3-159)

(5) ¿Se va usted en el coche de línea? (3-214)

〈相手〉

(6) Van muy juntos, riéndose a carcajadas. (3-127)

(3) Un día que vaya usted de bureo, me llama y nos vamos juntos. (1-254) —再録—

(7) Vamos con estos señores. (1-132)

(8) Un día me fui con un vecino que tiene una camioneta. (3-137)

これまでのところ、両構文の使用条件に関わるような有力な情報は得られず、両者ともこれらの成分と任意な共起関係を結び得るものと思われる。

次に動きの成立にあって、動きそのものが有する諸側面の一つをとりあげ、それが如何なる様子のものであるかを示すことによって、動きの実現のされ方を表わす、すなわちあり方(様態)成分を記す。(注4)

〈移行・起動の段階〉

これは動き開始前の静止状態から動きへの移行の時間的早さを表わすもので、あり方のすぐ隣に位置するものかも知れないが動きの時間的助走として記す。

(9) Pues, ya no voy. (3-143)

(10) ——Bueno, Filo; muchas gracias, me voy ya. (1-19)

(11) ¡Va en seguida! (1-164)

(12) ——Ahora podéis iros. (5-91)

両構文とも共通した要素をとり得る。

〈移動の早さ〉

(13) Iban y venían, unas veces lentamente, otras a saltitos como jugando. (2-29)

(14) Por la carretera pasa un carrito tirado por una mula ligera que va al trote. (3-129)

(15) Pero no vayamos tan en prisa. (2-40)

その他、con estas prisas, de prisa, rápido.

〈移動の容姿〉

(16) El viajero va en silencio, oyendo al viejo. (3-130)

(17) Al jardín puedo ir muy bien solo. (3-121)

〈移動の相対的位置関係・軌跡〉

(18) El burro Gorrión va unos pasos delante, suelto, moviendo las orejas a compás. (3-130)

(19) La sombra de mi cuerpo iba siempre delante. (2-156)

以上の事例からも解るように動きの実現のされ方・あり方(様態)成分は動詞Irとは自由に共起し得るが、収集文例から判断する限りSe構文とは共起し難いか、不可能という結果になった。確かにSe構文と様態成分の共起した例も見い出されるが、その時には本来の具体的移動から抽象的移動、ないしは比ゆ的表現への移行が見られる。

(20) Se fue de bruces con el suelo. (1-162)

(21) El niño no se cayó al suelo, se fue de narices contra la pared. (1-82)

(22) Me plantaba en Madrid y me iba de cabeza al Eslava o al Martín. (3-184)

各々、水平移動運動から下降運動へと変化しながら、そのあり方を示す副詞句 (de bruces, etc.) があらわれている。そして典型的な到着点とは云えないが何らかの接触を示す前置詞contra、conと共に落下・衝突へと比ゆ的表現により近づいている。

2.3 方向・経路の脇役的成分

〈方向〉

(23) ¿Hacia dónde va usted? (1-114)

(24) El hombre va hacia la puerta con Pepe detrás. (1-42)

(25) Sí, señor; allá voy. (1-104)

(26) Le dice: "Sultán, vete", y allá se va Sultán como un caballero muy digno. (1-34)

(27) ¿No van ellos por ahí, enseñando las pantorras y nadie les dice nada? (4-107)

(28) Si no nos vamos por ahí, vas a andar toda la noche dándole vueltas a la cabeza. (1-115)

(29) Fue derecho a su casa. (桑名一博、615)

(30) Se fueron derechos como una bola. (1-132)

(31) ——Bien, yo iré por allí a eso de las nueve. (1-235)

(32) Me voy a Madrid. ¡Qué casualidad! ¡Yo también me voy allí mañana! (Butt and Benjamin, 326)

(33) A Pareja se va todo seguido. (3-183), se＝不定主語

(34) ——¿Usted va muy largo? (3-99)

(35) ¿Va usted muy lejos? (3-93)

(36) Con la panza vacía y cabeza poblada de dorados recuerdos, los dorados recuerdos se van cada vez más lejos. (3-234)

前置詞hacia (23) (24) は別にしても (25) — (33) の両構文に見られるように方向指示語 (ahí, allí, allá) との間にはかなりの自由な共起関係が認められる。(34) — (36) の例では距離 (空間) が同時にある種の方向性を示しており、(36) の例ではさらに移動主体が人間から抽象的なものにかわると共に、比ゆ的な消滅の動詞への移行が感じられる。(注5)

(37) No hay que decir que el viajero fue, naturalmente, por Casasana. (3-194)

(38) Me tropecé con él, que por tomar el aire se había ido de Almendrolejo medio millar de pasos por el monte. (2-49)

前置詞porによる方向性(37)、さらにSe構文の中に起点(de)と方向(場所)の限定成分が共にあらわれていることに注目しておく。(38)以上〈方向〉成分とSe構文との関係を暫定的にまとめると、こうした成分の中からより場所(空間)性が読みとれる場合にはSe構文はかなりの自由をもって共起し得る、と考えられる。

〈経路〉

(39) El viajero, dándole vueltas a la cabeza, va por las tapias del Retiro. (3-78)

(40) Doña Rosa va y viene por entre las mesas del Café, tropezando a los clientes con su tremendo trasero. (1-21)

(41) El Centenario, aun trampeando, iba todavía de acá para allá. (34-71)

(42) El ama y dos criados van y vienen de un lado para otro. (3-211)

Se構文とあり方(様態)成分とは本来共起し難い傾向にあるのに加えて、現在分詞(gerundio)による継続性を示すあり方成分(39)(40)(41)、さらに往復運動(40)(42)、移動領域の画定指示(41)(42)などの統語的環境の中ではSe構文はどうやら出にくいようで、動詞Irと経路(por)の事例が観察される。しかしこの環境においても到着点が表示されると話は別である。(後述)

(43) La mujer se va por la acera, camino de la plaza de Alonso Martínez. (1-86)

(44) La Fotografa y el Astilla se fueron, muy cogiditos del brazo, por la calle del Prado arriba, por la acera de la izquierda. (1-112)

(43)と(44)はSe構文と経路(por)成分の共起した事例であり、とくに(44)では様態の副詞的成分(cogiditos del brazo)が過去分詞の形のもとに一種の形容詞として移動主体に係っていることは注目される。

3. 主役的意味役割成分(起点・到着点・移動主体)

3.1

〈起点〉

動詞Irが到着点と自由に共起することは従来から云われているが、どうやら起点だけをともなった表現は不可能で、必ず起点と到着点とが共起することによってさらに坐りの良い文となる。

(45) Las miradas de aplauso de todos los reunidos iban de un médico al otro. (1-139)

(46) A Sacedón, desde Pareja se va por la misma carretera por donde el viajero llegó el día anterior. (3-192)

ここで先取りして確認すべきことは移動主体が視線(45)、不定主語Se(46)である。さらに(46)に関しては起点—経路—到着点の共起関係が見られる。これに対してSe構文は起点だけでも充分に坐りの良い文らしい。

(47) La criada se va de la habitación. (1-282)

(48) Cuando Gerardo se fue del pueblo todavía no era el Indiano. (5-81)

(49) ——¡Si por lo menos se hubiera ido de Madrid! (1-234)

(50) César y Damián se fueron del valle, renegaron de él y de sus antepasados. (5-83)

(51) La señorita Elvira, seguramente, se fue de su casa porque su familia ya muchos años dedicada a hacerle la vida imposible. (1-107)

(47)—(51)のすべての起点を表わす名詞類には具体的な場所(空間)性を表わす類が立ち、かつ定性を有している。なお調査資料の中からはこの構文に到着点の共起した事例は一つも発見されなかった。恐らくこの構文は不可能であろう。

3.2

〈到着点〉

動詞Irの基本的意味特徴から考えても起点事例8に対し到着点事例140余例は当然と云えばそれまでだが、従来その到着点の中身はあまり考察の対象にならなかった傾向にある。この項ではそれをも射程に入れて考えてゆく。

—前置詞a—

(52) ¿A dónde voy yo con dos pesetas? (1-85)

(53) ¿A dónde va usted de camino a estas horas? (3-183)

(54) ——Le estaba esperando.

——¿Sí?

——Sí, señor, quería despedirme.

——Pues, ¿a dónde se va usted?

——No me voy, me quedo. (3-136)

疑問詞 (a) dónde は両構文とも共起可能である。残り多数の事例は省く。

—hasta—

(55) ¿Hasta dónde va usted? (3-98)

(56) Con ellos me iba muchas mañanas hasta la Charca, a legua y media del pueblo

hacia la raya de Portugal.（2-32）

（57）Con ellos me fui, casi llevado en valandas hasta la taberna de Martinete el Gallo.（2-87）

前置詞hastaと両構文は共起可能であり、かつ（57）に至っては本来共起し難い様態成分（casi llevado…）が到着点と共にあらわれ、しかも過去分詞の型になっていることに注目しておく。（39）—（42）参照。

次はその到着点の意味を考えてゆく。

○ Ir構文

ayuntamiento, agencia, cementerio, cine, corro de bolos（遊び場）, cuarto（寝室）, cocina, colegio, campo（畑）, cantina（軽食スタンド）, café（憩いの場）, capital（都会）, escuela, establo（厩舎）, fuente（水汲み場）, fútbol（会場）, fragua, hospital, jardín（鑑賞用の庭）, lado de la familia（陣営）, misa, oficina, puerta（入り口）, plaza（闘牛場）, panadería, peluquería, quintas, servicio（兵役）, teléfono（電話台）, telégrafos（電報局）, toro, water（便所）.

○ Se構文

aldea, calle, café, cama, ciudad, fonda, lechería, monte, pueblo, rincón, terreno.

両者を比較対照してまず考えつくことは前者が場所としての空間性よりもその機能的側面から対象を切りとり名づけたものであるのに対して、後者はその場所の空間的側面により注目して対象をとらえたものであると一応考えられる。以下その事例を示す。

（58）El bicarbonato es bueno, no hace daño alguno. Lo que pasa es que los médicos no lo pueden recetar porque para que le den bicarbonato nadie va al médico.（1-59）

（59）《Déjate de monsergas. Y si no te gusta, te largas》. Luego se fue derecha a su marido.（4-15）

（60）El sereno fue a donde lo llamaban.（1-186）

（61）——Si a don Pablo le parece que está muy claro, que se vaya con su señora adonde se lo den mejor.（1-36）

医者のもとではなく医院へ（58）、夫の所へ（59）、姿の見えない声の方へ（60）、支払いの良い店（場所）へ、とそれぞれ解釈される。

（62）Hacía ya tiempo que no iba a la taberna de Martinete.（2-173）

（63）El viajero almuerza pronto, a eso de las doce, y después se va a una taberna, a

una de las escasísimas tabernas que hay en Casasana a charlar con algunos hombres. (3-200)

(64) Y él me dijo con su servicial docilidad: 《Voy a la capital. ¿Te se ofrece algo?》 (6-11)

(65) El pensaba que Roque, el Moñigo, y Germán, el Tiñoso, se sentirían muy solos cuando él se fuera a la ciudad a progresar. (5-203)

馴染みの店の常連客であり(62)、特定された数少ない店のうちの一つであり(63)、都会(64)であり、都市・町(65)である。

(66) No hace nada, eso es cierto, pero por no hacer nada, ni come siquiera. Lee novelas, va al Café, se fuma algún que otro tritón y está a lo que caiga. (1-27)

(67) Por las tardes se iba al Café de doña Rosa, se sentaba al pie de la escalera. (1-25)

読書の後の休息の場であり(66)、いつもの特定の店(67)となる。

(68) Dorita, que no se atrevía a ir al lado de la familia del marido. (1-270)

(69) Yo salí en su captura, fui a casa de la Nieves, vi a la Rosario.... (1-270) Cf. Me voy a casa.

(70) Con su novio, que era cartero, no se iba a ninguna parte. (1-81)

夫の側(陣営)であり(68)、売春宿であり(69)、具体的な場所(70)となる。

(71) ¡Lo único que me reconforta es pensar que se ha ido derechito al cielo, que a estas horas estará mucho mejor que nosotros! (1-230)

(72) Si hubiéramos nacido en China, a lo mejor nuestros hijos se iban al limbo sin remisión. (1-137)

(73) Si nosotros no nos privásemos de alguna cosilla, se iban todos al limbo de cabeza. (1-137)

確固たる空間としてかつては天国も築かれていたし(71)、容赦なき地獄も真っ逆さまに(de cabeza)落ちてゆく場所であった(72)。なお(71) — (73)の事例には後でとりあげる比ゆ・抽象的表現への移行が見られる。最後に両構文が都市名・地名を到着点にとる表現を考えるが、当然のことながら動詞Irと地名の共起した事例が圧倒的に多く見られる。しかしこれまでの議論の方向にひきつけて考えると動詞Irは機能的側面に、Se構文はより空間的側面に注目して描く傾向にある。

(74) ¿Va usted a Zaragoza; por un casual, a cumplir una promesa? (3-92)

(75) ——Mochuelo, ¿sabes? Voy a La Cullera a por la leche. (5-223)

(76) Emprendía el viaje a La Coruña que, según me asesoraron, era un sitio de cruce de los vapores que van a las Américas. (2-131)

聖地サラゴーサへ(74)、食料の供給地(75)、アメリカ航路(76)と考え得る。これに対してSe構文は空間の限定化をより鮮明に反映している。

(77) Las cuatro castañas se acabaron pronto y Martín, con el real que le quedaba, se fue hasta Goya. (1-83)

(78) Sin cambiarse de ropa agarró al Gran Duque, lo encerró en la jaula y se fue a La Cullera, una aldea próxima. (5-127)

(79) ——¿Y el Longinos, di? ¿No se marchó el Longinos? ¿Y quién habrá más desgraciado que él en estos contornos? ——ése es otro cantar. El Longinos se fue con su hermana a León. (4-100)

数ある通りのうちの一つ＝ゴヤ通りであり(77)、近郊の村であり(78)、ある地方から別の地方への移住である(79)。このような見解は今回の調査資料から相対的な傾向として云い得ることであって、当然のことながら両構文とも地名と共起可能である。Molina Redando (1974, 49) は両構文の交替可能な中立的解釈として次のような事例をあげている。

——Voy a Barcelona el mes que viene / Me voy a Barcelona el mes que viene.

——Este verano iremos a la playa / Este verano nos iremos a la playa. ——Usos de《SE》, 49——

そもそも人間が言語でもって連続した空間に名称を施すこと自体の中に二つの側面があるのではなかろうか。つまり連続した空間に分類・差異化を企てる機能的側面と、それに名称をつけることによる対象化。こうした観点から上記の事例も前者は数ある都市の中からのBarcelonaの選択であり、山、川でなく海(playa)を選び、後者はそれぞれの空間性としての都市、浜辺が充てられると考え得る。

3.3〈移動主体〉

具体的移動表現の典型的な移動主体は人間であり、動物(3例)・乗物・影(sombra)など可動性を有する主体である。そうした典型からずれることによって比ゆ・抽象的移動表現への移行が見られる。(18) (19) (36) (45) (46) (76) 参照。

4. Ir(se)＋a＋不定詞構文

4.1　この構文は約79例(総例数の12％)が収集されたが、そのうち動詞Ir構文が68例であるのに対して、Se構文はわずか13例となり、この数字が語るように圧倒的に動詞Irが多い。そこで前者は別稿に譲ることにして本稿では後者の13例をもって多少の見解をまとめておく。

(80) Cuando se fue a servir al Rey dejó sus cuartos en la Caja Postal. (1-73)

(81) Se había ido a cenar con el bachiller del plan 3. (1-104)

(82) Lola se fue a ver qué le pasaba. (2-105)

(83) Adiós, pajarito mío, me voy a trabajar. (1-143)

(84) Felipe Sastre se despidió para irse a dormir un rato. (3-210)

(85) El hijo, que es muy bueno, le ayuda a recoger los bártulos y después se van, muy cogiditos del brazo, a dormir.

(86) Gervasio, recién casado (les anunció) que se iba con su mujer a pasar una temporada en París. —Nelson Cartagena (1972), 160— Cf. ¿Cómo lo pasas? ¿Qué tal lo pasó en la fiesta?「パーティーはいかがでした。」(桑名一博、1431)

これらの事例から次の点を指摘しておく。

○　例文のほとんどすべてがCamilo José Cela個人のものであり、そのうえ異なり動詞語数6 (ver 2, dormir 7) と限定されたものであるゆえに、はたしてこの構文はあらゆる不定詞と結合可能な生産的なものかどうか、という疑問が湧いてくる。

○　ともすればIr＋a＋不定詞構文はperífrasisの解釈を受けやすいが、このSe構文は表1 (2.1項) で述べたとおり本来の物理的・具体的移動の意味解釈が明確に読みとれる。

○　それとあいまって対照的な二つの動作に分離(境界)可能である。(80) 日常生活—兵役、(81) 一日の食事のサイクル、(82) 未経験と経験、(83) 静—動、(84)(85) 起—寝、(86) 日常生活と休暇

○　不定詞の部分は文法的に云えば、(82) ver (経験者主体) をはじめとしてより自動詞的に用いられる。(86) 参照。

○　さらに到着点とも(87)、その場所(88)とも共起可能である。

(87) Después se fue a dormir a la cuadra. (2-42)

(88) El viajero, cariacontecido, se fue a dormir a tejar, a orillas del arroyo. (3-190)

(88) に至っては三つの前置詞aが同時にあらわれているが、これに関する見解はただ今のところ持ち合わせていない。(続く)

(注1) 収集資料の原典を示す。なお本文の事例表記番号もこれに準ずる。

Camilo José Cela

1. *La Colmena.* 1985, Noguer.
2. *La familia de Pascual Duarte.* 1975, Destino.
3. *Viaje a la Alcarria.* 1990, Austral.

Miguel Delibes

4. *Las ratas.* 1973, Destino.
5. *El camino.* 1980, Destino.
6. *Viejas historias de Castilla la Vieja.* 1981, Alianza.

(注2) この数量の中には動詞Ir+a+不定詞の構文57例も抽象的用法の中に含めた。なぜなら意味的側面からこの構文を分類するのは非常に困難をともない、明確に具体的移動を表わす11例と離して計算をおこなったことを記しておく。

(注3) 多少簡明に記述すれば次のようになる。

i) ir de { camino / paso / retirada }　　ii) ir (se) de { vacaciones / tourné / bureo / copeo / viaje }

i) が場所から場所への移動自体を問うのに対して、ii)は移動の目的(内容)が問われている。さらにi)はse構文と交換不可であり、ii)は可能である。i)のde camino, de paso, de retiradaが移動の進行途中を表わすことと関係がありそうだ。そしてH・L・コップ教授(関西外国語大学)に対するインフォーマント・チェックも同じ結果を得た。

(注4) この副詞的修飾成の意味・機能的分類は仁田義雄(1983)に負いながら、多少の修正を施した。

(注5) i) ¿Hacia dónde (ø / se) va usted? ii) El hombre (ø / se) va hacia la puerta con Pepe detrás. 方向成分とは不可ではないが、あまり一般的な文ではない、とのコップ教授の説明を得た。

〔寄　稿〕

幻の『絵本どんきほうて』

世　路　蛮太郎*

1、はじめに

筆者が、わが国英文学界の長老寿岳文章にまつわる『絵本どんきほうて』の存在を初めて知ったのは、東京・神田の古書店街を中心に『ドン・キホーテ』の邦訳文献を蒐集しはじめた1980年頃のことだったと記憶する。それは、1965年刊行の『ドン・キホーテ』（世界の文学、第2巻、中央公論社）に付された寿岳文章のエッセイ「『絵本どんきほうて』由来」だったが、当時はまだ「日本近現代文学と『ドン・キホーテ』」というような明確な問題意識を持ち得ていなかったせいか、特別なこだわりもなく読み飛ばしてしまったような気がする。

だが、拙著「『ドン・キホーテ』ノート」の「付論」として「日本近現代文学と『ドン・キホーテ』」を構想しはじめた途端、明治維新以来、シェイクスピアの隆盛とは対照的にセルバンテスの陥没が著しいわが国においては、文学とは直接関係ないとは言え、『絵本どんきほうて』の存在が大きな文化史的意味を持っていることを改めて知らされたのである。その直後から、寿岳文章やカール・ケラー、柳宗悦や芹沢銈介等の芸術世界への筆者の手探りの旅が始まった。そして、その探求の過程で筆者が知り得た貴重な事実は、『絵本どんきほうて』の刊行は、わが国における稀少な「ドン・キホーテ現象」の一つであったというだけではなく、昭和十年代の日米交渉史の記念すべき文化的遺産の一つでもあったという興味深い歴史的意義であった。

以下、その由来を具体的に見てみよう。

2, 寿岳文章と向日庵私版

『絵本どんきほうて』刊行に至る経過をたどるには、何よりもまずそれ以外の貴重本をも含む寿岳文章の「向日庵私版」そのものに触れないわけにはいか

※せいろ　ばんたろう（セルバンテス文庫）

ない。英文学者寿岳文章は、作家でもある妻しづとのつつましい共同作業として取り組んだその私版本シリーズについてあちこちで語っている（「向日庵と私」「向日庵消息」「向日庵本の思い出」など――いずれも『寿岳文章書物論集成』1989年刊所収）が、以下の「向日庵私版発願記」がその消息を最も詳細に語っていると思われるので、そのまま引用する。

「到着はやがて出発である。雑誌『ブレイクとホキットマン』は休刊のやむなきに立ち至ったけれども、胸にあふれる思いを何かの形に盛ろうとする私の欲念にはいささかの退転もなく、少数ではあろうがしかし熱意ある読者の力のみを頼りにして、私はここに私版刊行の事業を発願した。著者にへつらうことなく、読者におもねることなく、射利主義の流れから高く離れ、ただただ良心の声のみに耳を傾け、すぐれた内容に美しく正しい装いをあたえ、思想と工芸との2つの世界を密に結びあわせようとするのが私の願いである。この私版は、太陽の彼岸を求めてやまぬひまわりを歌ったブレイクの詩と、同じくその花を愛した画家ファン・ホッホにちなんで向日庵と名づけられた。そうしてここに掲げた茶の実の紋が、今後向日庵私版本の題扉に、外装に、また新しく紙が漉かれる場合にはその漉入に用いられる標識である。」（『寿岳文章書物論集成』、911ページ）

この「向日庵私版発願記」が京都市左京区南禅寺北門の自宅で書かれた1932年（昭和7年）当時、新進の英文学者寿岳文章（当時32歳）は、10年来の学友だった柳宗悦とともに、月刊誌『ブレイクとホキットマン』全2巻24冊を刊行し終ったばかりであり、ブレイク研究に対するその学問的情熱はますます燃えさかりつつあった。「寿岳文章年譜」によれば、寿岳とブレイクとの出会いは、京都大学文学部で英文学を専攻して以来のことであり、その後、「100年忌記念ブレイク作品文献展」の開催（1927年）や「キルヤム・ブレイク書誌」の編集（1929年）など、18世紀半ば生まれのこのイギリス詩人・画家に対する寿岳の思い入れには一方ならぬものがあった。

以下に「向日庵私版本」全16冊を紹介するが、その中にブレイク関係の著書が数多く含まれているのはそのためである。

キリャム・ブレイク著　『唯理神之書』
　昭和7年4月刊　限定100部
キリャム・ブレイク著　『無染の歌』
　昭和8年2月刊　限定115部
キリャム・ブレイク著　『セルの書』

昭和8年10月刊　限定130部

EXOTERIC WRITINGS OF WILLIAM BLAKE

昭和8年12月刊　限定500部

式場隆三郎訳　『テオ・ファン・ホッホの手紙』

昭和9年8月刊　限定200部

LETTERS FROM SHIMANE AND KYŪSHŪ　by Lafcadio Hearn

昭和9年10月刊　限定100部

キリャム・ブレイク著　『無明の歌』

昭和10年3月刊　限定130部

野田理一著　詩集『願はくば』

昭和10年7月刊　限定120部

寿岳文章訳・著　『書物』

昭和11年3月刊　限定200部

芹沢銈介作『絵本どんきほうて』

昭和11年10月刊　限定75部

キリャム・ブレイク著　『永遠の福音』

昭和13年5月刊　限定80部

寿岳文章著　『和紙景観』

昭和14年7月　限定4部

THE ART OF PAPER MAKING IN JAPAN　by Richard Tracy Stevens

昭和18年2月刊　限定100部

寿岳文章・静子共著『紙漉村旅日記』

昭和18年9月刊　限定150部

A BIBLIOGRAPHY OF RALPH WALDO EMERSON IN JAPAN FROM 1878 To 1935　by Bunshō Jugaku

昭和22年12月刊　限定500部

IN MEMORIAM HAROLD FREDERICK WOODSWORTH D. D.

昭和27年5月刊　限定300部

（以上、『寿岳文章書物論集成』1043～1045ページ）

「向日庵私本」のつぎの特色は、それらが手作りの和紙を用い、彩飾や綴じや木版押しなどの装幀も寿岳夫妻の手でほとんどすべて仕上げたという意味でも徹底した「私本」となっている点である。

「向日庵消息」第9信にも見られるように、わが国伝統の和紙に対する寿岳

の関心は高く、「向日庵私本」の用紙として全国各地の手漉きの和紙を集めたばかりではなく、昭和12年夏には「有栖川宮奨学金」を得て、紀州や大和の手漉紙業の現地調査に妻しづとともにたずさわっているほどである。「向日庵私本」中の「和紙景観」や「紙漉村旅日記」がそのような研究活動の貴重な成果であることは言うまでもない。

さらに、「向日庵私本」の表紙の装幀に、「型染」の技法で著名だった染色画家芹沢銈介の協力を仰いだことは、徹底して「美しい本」を作りたいという寿岳の美意識の何よりの表われだった。「思想と工芸との二つの世界を密に結び合わせようとする」寿岳のその書物観は、『柳宗悦と共に』（昭和55年、集英社刊）の中で自ら述べているように、わが国における手仕事の伝統と日常用具の美の再発見にその生涯をささげた民芸運動の先駆者柳宗悦の思想的感化によるものであったことを書き添えておこう。

「向日庵私本」が刊行されはじめた昭和7年と言えば、前年9月に起った「満州事変」をきっかけに、わが国が中国との侵略的な「15年戦争」にのめりこんでいった「非常時」であり、とくに、英語や英文学に対し「鬼畜米英」の「敵性語」として狂信的な排撃運動が高まりはじめた時期であった。それだけになお、軍部や特高によるファッショ的な言論統制や思想弾圧が荒れ狂ったその暗黒時代に、ウイリアム・ブレイクの作品を中心とする良質の私家本を出版しつづけた寿岳文章夫妻の人間的・学問的勇気がより一層光り輝くのである。寿岳自身もまた、後年、そのねばりづよい出版活動をつぎのように誇らしく回顧している。

「教師をやめて市井の一老人となってからも、職業・肩書はと強いて訊ねる向きには、やむをえず英文学者と答える。生涯の一学究で通してきたのだから、昨春刊行の『寿岳文章書誌』が示すように、英訳書もかなりの数量にのぼる。しかし、内容も外貌も、徹頭徹尾自分自身の発想と操作にもとづき厳密な意味でのいわゆる私版本を造った学究者は、自然・人文・社会の3系列を通じ、日本では私以外に一人も見出せないと思う。しかも私の場合、ウィリヤム・モリス以来の海彼私版家の主流に見るごとく、人間や社会のあり方に対する厳しい批判、つまり文明批評が、本造りの起動力となっているところに、15年戦争下の一良心の作業とも認められる点に、独自の存在価値がある、とあえて私は自負する。」（昭和61年、「向日版本の思い出」『寿岳文章書物論集成』、949ページ）

3、カール・ケラーと『ドン・キホーテ』コレクション

1929年（昭和4年）8月18日、フランスのルアーブルからアメリカ合衆国のボストンへ向かうフランスの客船「ド・グラス号」に一人の日本人が乗船していた。留学先のイギリスで純粋な英語を聞き慣れていた彼には、乗り合わせた大勢のアメリカ人たちが喋る俗っぽい英語がひどく耳障わりだった。ボストンに到着しさえすれば少しはましな英語が聞けるだろうと自らを慰めながら、デッキのアームチェアに腰かけて本を読んでいると、隣に坐わっていた西洋人がブレイクに関する本を読んでいるのに気がついた。ブレイク研究家だった彼はその西洋人とそれをきっかけに会話を始めたが、そのうち相手の西洋人がその本の中にブレイクについて書いた日本人の手紙が引用されていると言い出した。日本人がその部分を読んでみると、なんとそれは10年近くも前に当の本人が書いた手紙の一節ではないか！　改めて明かすまでもなく、その日本人とは、ラングドン・ウォーナーから懇請されてボストンのハーバード大学で1年間の仏教美術の講義をすべく大西洋上を旅行中だった柳宗悦その人である。

「一切諸法悉く因縁より起る」――その年の9月初め、柳宗悦から以上のような旅のエピソードを知らせる手紙を受け取った寿岳文章は、『絵本どんきほうて』出現の、言わば前史をなす柳宗悦との摩訶不思議な因縁をこのように表現している。なぜなら、そんなエピソードを体験した柳がボストンに到着するや否やつぎのような手紙を寿岳に送って寄こしたからである。

「米国人でケラーと言う人がドン・キホーテに関する本を蒐集しているのです。それで是非日本で出たものが欲しいと言うのです。スペインで出た『書誌』に封入のような二つの日本版が載っているそうです。捜してお求め下さいませんか。代金は兼子の方へ御請求下さる方便利と思います。又其の他、全訳でも抄訳でも（子供に読ませる抄訳が中にあると思います）又其の他諸雑誌に載った研究なり紹介なりがあったら、調べて頂けないでしょうか。別に急ぎませんが、見つかり次第漸次に小包で小生宛に送って頂けたら幸です。

とんだことをお願して恐縮です。

どなたかおしり合いにも尋ねて見て下さいませんか。日本で出たものの書誌でも作って知らせたら、尚悦ぶと思います。君の仕事を邪魔しない範囲で御尽力願えたら幸甚です。」（寿岳文章「『絵本どんきほうて』由来」、『工芸』昭和12年6月号、『柳宗悦と共に』昭和55年、集英社刊――現代表記は筆者）

1929年9月9日付けでボストンから寿岳に送られてきた柳の第1信には、アメリカ人の『ドン・キホーテ』蒐集家カール・ケラーとの出会いについてはそ

れ以上の具体的な記述はない。したがって、以下に記すケラーに関する情報は、柳やケラーから寿岳宛に送られてきた手紙にもとづき寿岳自身があちこちで書いているさまざまなエッセイ等から間接的に推量したものである。

寿岳文章・寿岳章子の『父と娘の歳月』（1988年、人文書院刊）によれば、ケラー家はスイス系のアメリカ移民であり、カール・ケラーの父は、1870年代、アメリカ全土に電話を敷設し、50万以上の電話交換局を建てて回わった大実業家だった。ハーバード大学でのちに三井財閥の大番頭となった池田成彬と同級だったカール・ケラーは、その財力を背景に母校の理事やフォッグ・アート・ミュージアムの理事をしていたが、彼と初めて対面した東大の斎藤勇教授の話では、この熱狂的な『ドン・キホーテ』蒐集家は、世俗的な実業家というよりは思索的な哲学者に近い風貌の持ち主だったようである。また、ケラー夫妻の間には子供がなく、その晩年にはうつ病にかかった夫人が自殺するという個人的悲劇をも体験している。『ドン・キホーテ』について言えば、ケラーは当時すでに250—260種もの文献を蒐集していたようであり、それらはいずれ母校ハーバード大学に寄付するつもりだと語っていたとのことである(注1)。

柳からの第1信に応えて、寿岳が島村抱月・片上伸共訳の『ドン・キホーテ』2冊本他数種の邦訳書——柳が知らせてきた二つの日本版とは、佐々木邦訳と松居松葉訳だった——を送ったのち、ケラー自身から同年12月18日付けのつぎのような第1信が直接寿岳のもとに届けられた。

「察するに君も書物蒐集家らしいから、同類の病人が、とても手に入らぬとあきらめていた書物を手に入れた時の狂喜を十分知ってくれるだろう。この国で僕が君のためにしてあげられることがあったら、遠慮なく知らせてくれ。そのかわり、これからさき日本語のドン・キホーテが見つかったらぜひ手に入れてくれ。代はどんなに些細なものでも支払わせてもらわねば困る。愛書家というものは、ただかようにしてのみ幸福に有無相通ずることができるのだ。」（寿岳文章「『絵本どんきほうて』由来」、前掲書——現代表記は筆者）

以後、日本とアメリカが互いに敵対国となった第2次世界大戦をはさんで、寿岳とケラーは互いに数百通の手紙を交換しあうという稀有な国際的な友情を持続させることになる。しかも手紙を介した二人の交流は、単に『ドン・キホーテ』の件だけにとどまらず、家族ぐるみの付き合いにまで発展していった。たとえば、ケラーは寿岳一家がチフスにかかった時などはるばるアメリカから高額な見舞金を送ってきたし、戦後の物資欠乏時代に寿岳が靴を希望したとこ

ろ、ボストン中の靴屋をさがし回わって「中国人向けの靴」を送ってきたりしている。また、京都大学宇宙物理学科を出た寿岳の長男潤が戦後初のフルブライト留学生としてミシガン大学のドクターコースへ入学した時など、少ない給費の埋め合せとして定期的に相当額の金（月額50ドル）をひそかに送りつづけたりもしている。

ただ生粋のハーバードマンだったケラーはまた欧米の日本通にありがちなあの熱狂的な東洋趣味の所有者でもあった。寿岳によれば、その気になりさえすれば日本に来ることなど朝飯前だったにもかかわらず、生前ケラーがただの一度も日本を訪ずれなかったのは、日本があまりに西洋化しすぎていて、日本に対する自分の神聖なイメージが壊れるのがこわいという異常なほどの日本趣味＝エキゾチシズムのためだったと言う。たとえば、寿岳との写真交換に際して、寿岳に和装での撮影を求めてきたというケラーの徹底振りなどが何よりもその一端を物語っている。

我々の主題である『絵本どんきほうて』もまたそういうケラーの「常軌を逸した」日本趣味から生まれた副産物の一つであった。そのきっかけになったのが、翌昭和5年（1930年）2月4日付けのつぎのようなケラーの手紙だった。

「日本訳ドン・キホーテのわるいただひとつの点は、日本の画家が、日本の手法を用いて挿絵すべきなのに、それをいっこうやっていないことだ。それがあるかと、本が届くたび、私はまず第一に眼を光らせるのだが——無い。セルバンテスの心情を、日本人こそ真に同情して、興味深く新鮮に解釈するだろうと思うからの私の失望だ。思うに、あらゆるアジア民族中、日本人こそその立派な伝統により、あの哀れな「老」ドンの心を動かした騎士道の精神——それはしばしば誇張されているが——を了解し感得する最善の国民であろう。」（寿岳文章「『絵本どんきほうて』由来」、前掲書、——現代表記は筆者）

真に日本的な『絵本どんきほうて』を求めるケラーの執念は、寿岳が時折送るさまざまな邦訳『ドン・キホーテ』ではなかなか満たされず、昭和10年（1935年）の春から夏にかけてその不満はついに頂点に達することになる。すなわち、忍耐の限度に達したケラーは、どんなに高い費用がかかっても構わないから日本人画家に依頼してドン・キホーテをテーマとした絵を描いてほしいと寿岳に懇請してきたのである。

「こう言ってきたケラーの心の中には、ボストン美術館とつながりの深い岡倉天心門下の、そうそうたる院展系画家の甲乙丙丁が思い描かれていたの

かもしれない。しかし私は、それらの画家に、単独のドン・キホーテ像を描かせてみても、世界文学の一巨峰であるドン・キホーテ物語と結びつけるとき、無意味であるのに気づいていた。作るとすれば、あくまでも古典『ドン・キホーテ』の挿絵としての意味を失わず、絵本性を主とするなら、短い説明文をそえた『ドン・キホーテ行状記』とすべきであろう。私のこの信念は動揺しなかった。」（寿岳文章「『絵本どんきほうて』のころ――思いだすままに」、『芹沢銈介全集』第1巻、中央公論社、昭和55年刊）

こうして、ケラーの意を体した寿岳が、同年10月、ケラーと因縁浅からぬ柳宗悦や京都在住の親しい陶工河井寛次郎と相談の末、白羽の矢を立てたのが「合羽刷り」という日本独特の染色技術で著名な染色作家芹沢銈介であった。

4, 芹沢銈介と『絵本どんきほうて』

書院造りの広々とした和室の中央で、端座しながら数々の武勇伝を読み耽けるチョンマゲ姿の武士。そして、部屋の片隅に置かれている弓矢や刀剣や緋の鎧など――それらはまぎれもなく戦国時代の日本そのものの光景だ。実物に即して詳細に説明できないのは甚だ残念だが、これが「西国らまんちゃの里のどんきほうて」で始まる芹沢銈介作『絵本どんきほうて』である(注2)。それがいかにアメリカ人カール・ケラーの並はずれた日本趣味を反映した作品であるかは、たとえば『ドン・キホーテ』中の同じ場面を描いた19世紀のフランス人画家ギュスタヴ・ドレの想像力豊かな挿絵（岩波文庫版『ドン・キホーテ』正篇、第1分冊、115ページ）と比較すれば一目瞭然であろう。

前節でも触れたように、カール・ケラーからの度重なる催促にたまりかねて、寿岳が和製『ドン・キホーテ』制作の最適任者として依頼したのが、「向日庵」刊行の当初からその装幀を委任していた染色画家芹沢銈介だった。

金子量重の「芹沢銈介の80年」（『芹沢銈介全集』、第29巻、昭和58年、中央公論社刊、所収）によれば、寿岳が『絵本どんきほうて』を芹沢に依頼した昭和10年（1935年）当時、芹沢は東京・蒲田の女塚に「工芸村」を開き、柳宗悦が提唱した「日本民芸館」（東京・駒場）の設立準備にたずさわっていた。それまでの芹沢は生まれ故郷静岡市にあって、「朝鮮民族美術館」で知りあった柳宗悦が主宰する月刊誌『工芸』の装幀や寿岳の私家版「向日庵本」のいくつかの装幀を担当することで世間の注目を集めつつあった。他方で、東京高等工業学校（現東京工業大学）図案科卒の芹沢は、柳宗悦の『工芸の道』との出会いをきっかけに小絵馬に代表される紅型（びんがた）の世界にのめり込み、

型紙と糊で染色する「型染」の技法で染色家としての頭角を現わしはじめていた。「白樺派」同人柳宗悦を仲立ちにして寿岳と芹沢が旧知の間柄であったことは、『絵本どんきほうて』制作の前史とも言うべき寿岳のつぎの記述でも明らかであろう。

「そこで私は、幾度か河井さんを訪ね、画家に絵をかかせて送るよりは、いっそ丹緑本風の絵本を作った方がよくはないか、それならば少部数に限られるとしても、書物としての客観性も持ち得るし、セルバンテスの作品を媒介として美の一つの姿が出現することにもなるし、と相談したところ、河井さんもそれに大賛成で、丹緑本によい理解があり、遠慮なくものの言える間柄の芹沢君に頼むのが結局一番よかろうということに話が落ちついた。10月3日、私は具体的な案を提示してその旨をケラーに通じ、一方、すでにこの提案の実現に確信があったので、10月18日、日本英文学会の用事で上京した時、芹沢君の内諾を得、水谷さんに頼んで古本屋から邦訳ドン・キホーテを芹沢君のために買って貰ったりした。」(寿岳文章「『絵本どんきほうて』由来」、前掲書――現代表記は筆者)

ところで、いくら懇意な人からのたっての依頼とは言え、正・続両編からなるセルバンテスのその大長編小説――島村抱月・片上伸共訳の『ドン・キホーテ』が選ばれた――を読了することは、活字慣れのしない染色画家には大変な難事業だったようである。芹沢自身、「生まれてからまだあんな長い物語を続けて読んだためしはなく、少し読むと前の箇所を忘れてしまうので、これには何より閉口した」と後年述懐しているほどである。後で紹介するように、『絵本どんきほうて』全31景は、原作の最終章に登場するドン・キホーテの死で終っているので、いずれにしても芹沢は全126章にも及ぶ『ドン・キホーテ』正・続両編を確かに読了したのである。よく指摘されるように、明治以来、シェイクスピアに比べてセルバンテスが著しく陥没しているわが国の偏向的な外来文化受容状況の中で、『ドン・キホーテ』正・続両編を通読した日本人は圧倒的に少ないと言われる。それだけに西欧古典文学の最高峰の一つ『ドン・キホーテ』と格闘した芹沢の芸術家的良心が何よりもまず光るのである。寿岳もそういう芹沢を評して「ドン・キホーテを行状記ふうに描かねばならぬ芹沢銈介自身が、見方をかえれば、一個のドン・キホーテではないか」(寿岳文章「『絵本どんきほうて』のころ」、前掲書)と絶賛しているほどである。

だが、芹沢の苦闘はそれだけでは終わらなかった。『ドン・キホーテ』中の選ぶべき場面は一応決めてあったが、制作上の試行錯誤が芹沢を苦しめつづけ

たので、時には家を離れて旅館や下宿屋に独りでこもったり、他の作品――例えば『和染絵語』など――を制作することで気分転換をはかったりした。柳宗悦の忠告により、木版から型紙版へと版型の変更を余儀なくされたことも芹沢の苦悩の一因であった。しかも、アメリカのケラーからは矢のような催促が、しかも昭和11年4月という期限付きで度々芹沢を襲いつづけたのである。

こうして、合羽刷手彩色の「試し」2枚が寿岳の手元に届けられたのは、約1年後の昭和11年9月上旬のことだった。合羽刷りというのは、普通型染が糊を使って型紙の上から染色するのに対し、「同じ型紙を使いながらも、糊を用いずに、直接顔料や染料を刷り込んで模様を生み出す方法」（金子量重、「芹沢銈介の80年」、『芹沢銈介全集』、第29章、224ページ）であり、まさしく日本独特の染色技術である。まことに残念なことながら、筆者の手元には、『芹沢銈介全集』、第1巻（中央公論社、昭和55年刊）所収の「絵本どんきほうて」と『新版絵本どんきほうて』（吾八、昭和53年刊）しかなく、実物『絵本どんきほうて』にいまだにお目にかかっていないのだが、それら2つの「コピー」を見ただけでも芹沢が創出した合羽刷りの日本的美しさが容易に見て取れる。事実、芹沢のその合羽刷りは、わが国伝統の絵巻物風な造形と丹・緑・黄・黒の4色の巧みな配色によって、何よりもまず寿岳自身を大いに満足させた。さらに、全31景に及ぶ芹沢の『絵本どんきほうて』は、同年10月24日に開館した「日本民芸館」や同年12月10日から京都で開かれた「3人展」などにそのいくつかの見本刷りが出品され、多くの日本人に賞賛されたと言われる。

さて、以上のような紆余曲折を経て昭和11年10月にようやく完成した『絵本どんきほうて』全75部のうち15部が待ち焦がれたアメリカのカール・ケラーの元へ送られたのは、翌昭和12年（1937年）3月28日のことだった。寿岳文章夫妻の「向日庵私版」として75部限定出版された『絵本どんきほうて』は、1番から25番までが非売品、26番から75番までが発売品だった事が知られている。ケラーに送られた15部がそのいずれかに属するものであったか確かめようがないが、どんな些細な文献にも几帳面に代価を支払っていた「愛書家」ケラーのことだから、それらが後者の中から配送されたことは確実だと思われる。なお、その日本趣味が高じて到々実現した日本版『ドン・キホーテ』――『絵本どんきほうて』――を遂に手に入れた時のカール・ケラーの天にも昇るような歓喜については寿岳も具体的には紹介していないが、前年12月に寿岳が送った『絵本どんきほうて』の着彩見本刷りの1部を実物と感違いして激賞していた事実を見ただけでもその一端がしのばれるであろう。

最後に、「向日庵私版」の一つとして刊行されたとは言え、最初から最後まで芹沢銈介の手によって完成された『絵本どんきほうて』――寿岳は自らを演出家、芹沢を演技者に例えている――の内容を紹介しておきたい。

絵本どんきほうて次第――（　）は筆者。

1、西国らまんちゃの国のどんきほうて
（正編、一の巻、第一章）
2、作男さんちょ従へ廻国の門出
（正編、一の巻、第七章）
3、世に名も高き初の手合はせ
（正編、二の巻、第九章）
4、拐し者推参とかご脇へ斬付る
（正編、一の巻、第八章）
5、馬の悪戯で1期の不覚
（正編、三の巻、第十五章）
6、命からがら旅篭へ辿りつく
（正編、三の巻、第十六章）
7、飯もりの戸迷ひが騒ぎの因
（正編、三の巻、第十七章）
8、すは大敵と羊の群に突て入る
（正編、三の巻、第十八章）
9、砧の遠音に戦いて明す一夜
（正編、三の巻、第二十章）
10、牢役人を打すえ囚人を解放つ
（正編、三巻、第二十二章）
11、古の物語に倣ひて山中の行
（正編、三の巻、第二十五章）
12、郷人尋ねて山に入る
（正編、三の巻、第二十七章）
13、娘を姫に仕立て計り事
（正編、四の巻、第二十九章）
14、はかられて山を出る
（正編、四の巻、第三十章）

15、姫の仇討ったりと宿の酒かめ打破る
（正編、四の巻、第三十五章）
16、人々邂逅の宴席の大演説
（正編、四の巻、第三十八章）
17、妖怪を装ひてきほうてを縛める
（正編、四の巻、第四十六章）
18、故郷に帰る牛車
（正編、四の巻、第四十七章）
19、灰となる数々の武勇伝
（正編、一の巻、第六章）
20、再挙の企らみ薬師の思案
（続編、第三章）
21、さんちょの苦計草刈女を姫と強弁
（続編、第十章）
22、恐れを知らぬどんきほうて
（続編、第十七章）
23、洞穴に入りて不思議を見る
（続編、第二十三章）
24、弱きをたすけ悪をこらす
（続編、第二十六章）
25、流れに泛ぶ魔の小舟
（続編、第二十九章）
26、貴人と見へて客となる
（続編、第三十章）
27、主従の物語に興ずる貴人
（続編、第三十二章）
28、貴人怪異をつくりて脅す
（続編、第四十六章）
29、銀月の騎士（実は薬師）に敗れ、帰郷を誓う
（続編、第六十四章）
30、道すがら主従の述懐
（続編、第七十三章）
31、功名手柄の夢覚て静に眠るどんきほうて

（続編、第七十四章）

5、おわりに

寿岳自身も指摘しているように、1990年代の今日でさえ（であるからこそとでも言うべきか）、芹沢銈介作『絵本どんきほうて』の実物を日本国内で見ることはほとんど不可能に近い（寿岳文章、「向日庵本の思い出」『寿岳文章書物論集成』、所収）。国公立私立の著名な図書館ですら所蔵していないし、ましてや古書業界ですら売りに出ることは滅多にない。それは恐らくわが国の愛書家たち——と言うより、淫書家たちと呼んだ方が正確であろう——の書庫の奥深く秘蔵されていて、もはや永遠に陽の目を見ることはないのかも知れない。筆者が小論を「幻の『絵本どんきほうて』」と題した所以である。

ただ一つその可能性が残されているとすれば、それは言うまでもなく、アメリカ合衆国ボストンにあるハーバード大学図書館ならびに同大学の各付属機関であろう。なぜなら、第2次世界大戦前、寿岳がケラーに送った数々の『ドン・キホーテ』邦訳書や『絵本どんきほうて』は、その他の膨大な「『ドン・キホーテ』コレクション」とともに、ケラーの死後その遺志により母校ハーバード大学図書館に寄贈されたからであり、またケラーはその生前まことに気前よく『絵本どんきほうて』を同大学の他の付属機関に寄贈していたと言われているからである。日本製の絵本でありながら、その祖国では滅多に見ることはできないと言うこの文化的逆転現象は、文化を真に愛する篤志家たちの寄付によってフォッグ・ミュージアムやボストン・ミュージアムなどのような超一流の美術館を運営しているアメリカ合衆国とはまことに対照的だと言っていいだろう。

それにしても、日本とアメリカが不幸にも敵対国とならざるを得なかった第2次世界大戦をはさんで、互いに相手国を訪ずれることのなかった二人の日米の知識人によって『絵本どんきほうて』を媒介とする親密な文化交流が何十年も続けられたという歴史的な事実はじつに貴重である。それは、明治以降、シェイクスピアに比べてセルバンテスが不当に陥没しつづけてきたわが国の偏向的な外国文化受容状況の中でとりわけ異彩を放つ出来事であっただけではなく、日米友好の、もっと言えば国際交流一般の最も模範的な実践の一例だったと言っていいだろう。第2次世界大戦後約半世紀、米ソ間の冷戦構造が思いがけない崩壊現象を呈しつつある現代史的状況の中で、それとは対照的に貿易問題をめぐる日米間の対立が再び激化しつつあるが、こういう危機的な時期にこ

そ、寿岳文章とカール・ケラーが実践したような個人レベルでの相互交流が必要とされているのではなかろうか？　ここで我々は、カール・ケラーが愛して止まなかった遍歴の騎士ドン・キホーテの永遠の目標が、この世に平和を打ち立てることであった事実を改めて想起しよう。

最後に、『絵本どんきほうて』をめぐるカール・ケラーとの往復書簡の公開を願う寿岳文章のつぎのような高い志を引用して小論を終えたい。

「彼から私への書簡数百通は私の手もとにある。世界的に有名な彼の「ドン・キホーテ蒐集」は、死後ハーバード大学へ寄贈されたが、中でも異彩を放つと記録されているその日本部のどこかに、彼への私の書簡数百通も保存されているなら、両者の公開によって、真の文化交流は、戦いを越え、戦いを否定してはじめて可能な事実を明確にする、と私は思う」（寿岳文章、「向日庵本の思い出」、前掲書、957ページ）

（注1）

1929年（昭和4年）9月、ハーバード大学に赴任した柳宗悦がカール・ケラーと初めて出会った時、すでに250～260種に達していたその「『ドン・キホーテ』コレクション」は、『絵本どんきほうて』が企画された昭和10年当時には早くも世界第2位になっていたと言われる。それが名実ともに世界第1位の「『ドン・キホーテ』コレクション」となったのは、カール・ケラーの死後、母校ハーバード大学に寄贈された時点でのことである。寿岳によれば、その膨大な世界第1級の「『ドン・キホーテ』コレクション」の中でも、『絵本どんきほうて』の令名はひときわ高く、1947年にセルバンテス生誕400年とケラー・コレクション寄贈を記念して開かれたその秋の特別展観では、ウイリアム・ジャクスンという人がその「解説」の中で、『絵本どんきほうて』を世界で最も魅力ある稀覯本の一つとして紹介しているという（寿岳文章「『絵本どんきほうて』由来」、『世界の文学』付録34、中央公論社、1965年刊）

また、『絵本どんきほうて』を含むケラー・コレクションの「日本部」の評価が高いと言われるのも、寿岳がカール・ケラーとの出会いを機に柳田泉などの協力を得ながら送りつづけた30数種の『ドン・キホーテ』邦訳文献のせいであろう。それらの中には、今日日本国内では滅多に入手できない斎藤良恭訳、『谷間の鶯』共隆社、明治20年刊などわが国最古のセルバンテス文献の一つも含まれているようである。これもまた、明治以降つづいているわが国のセルバンテス不毛現象の悪しき結果の一つなのかも知れない。

（注2）

昭和11年10月に「向日庵私版本」の一つとして限定出版された芹沢銈介作『絵本

どんきほうて』全75部のうち、カール・ケラーに送られた15部を除く残り60部が今日いかなる場所に存在しているかは全く不明である。まことに残念なことながら、筆者自身もまだその実物に接したことはないのだが、愛書家の間では「この本は近代日本における最高の美書である」(坂本一敏、「書物道と平和」、『寿岳文章と書物の世界』、51ページ)と最大級の賛辞がささげられているようである。

ところで、筆者が知り得たかぎり、『絵本どんきほうて』は全く稀にしか古書業界にも顔を出さないようだが、その時価は10年前でも200万円を下らなかったと言われる。それだけに『絵本どんきほうて』の新版を待望する声が高まったらしく、その後昭和51年7月にギャラリー吾八から『新版絵本どんきほうて』(染絵和装大型本、時価60～70万円)185部が限定出版された。だがそれでもなお愛書家たちの需要に応じきれなかったらしく、昭和53年11月には同じ吾八からその縮刷版が刊行されている。ちなみに筆者の手元にあるのは同縮刷版の第64番で函館市の或る古書店から時価数万円で購入したものである。1989年末ニューヨーク・サザビーズで競売されたセルバンテス『ドン・キホーテ』のスペイン語初版本が約3億円で落札されたのに比べれば桁違いに安いのかも知れないが、いずれにしても幻の『絵本どんきほうて』が世界的な稀覯本中の稀覯本の一つとなっていることは間違いないだろう。

(参考文献)

寿岳文章著
「『絵本どんきほうて』由来」
世界の文学　第2巻、セルバンテス
『ドン・キホーテ』付録34　所収
1965年　中央公論社刊
寿岳文章著
「向日庵私版発願記」
「向日庵消息」
「向日庵と私」
「向日庵本の思い出」
『寿岳文章書物論集成』所収
1989年　冲積舎刊
寿岳文章著
「『絵本どんきほうて』由来」
『柳宗悦と共に』所収
1980年　集英社刊
寿岳文章・寿岳章子共著
『父と娘の歳月』

1988年　人文書院刊
寿岳文章著
「『絵本どんきほうて』のころ――思ひだすままに」
『芹沢銈介全集』第1巻　所収
1980年　中央公論社刊
永田寛定訳
『ドン・キホーテ』正・続両編　全6冊
1948年～1977年　岩波文庫
金子量重著
「芹沢銈介の80年」
『芹沢銈介全集』第29巻　所収
1983年　中央公論社刊
坂本一敏著
「書物道と平和」
『寿岳文章と書物の世界』所収
1989年　冲積舎刊
芹沢銈介作
『新版絵本どんきほうて』縮刷版
1978年　吾八刊
月刊『工芸』第76号
1937年　日本民芸協会刊

ベラスケス〈慰め者〉肖像画について
——「シリーズ・座像」にみられる方法としてのリアリズム——

浅　若　みどり*

序

ディエゴ・ベラスケス (1559-1660) は17世紀のスペインでフェリペ4世に仕えた宮廷画家である。早くから画才を認められ、1632年に若干24歳で宮廷画家に抜擢された。元貴族の家系の出身だった彼は、宮廷で王室配室長などの要職を任ぜられ、1959年にはサンティアゴ騎士団入団、事実上貴族の称号を受けるに至る。

ベラスケスは他の画家に較べて作品数が少なく、損失したものを含めても二百を超えることはないという[1]。フェリペ4世はベラスケス以外に自分を直接描くことを許さなかったため[2]、作品には王の肖像画が多いのだが、その外では心身に障害を持つ人物の肖像画がかなりの割合を占める。そこで本論では何故ベラスケスがそうした人々を繰り返し描いたのかについて、「シリーズ・座像 (la serie sedente)」の四作品に焦点を当てて考察してみたいと思う。四人の障害者を座像で描いたこのシリーズは、ベラスケスの全作品中でも逸品とされている。

1.「慰め者」の肖像画について

中世のスペイン宮廷に暮らしていた身体及び知的障害を持つ人々は、一般に「慰め者」(hombre de placer)[3]と呼ばれる。「慰め者」としてはその他に喜劇俳優などの道化師をおくこともあり、初期には黒人も含まれていた。モレノ・ビリャによればそうした人々は16世紀後半からの150年間で実に123人が数えられる。彼らの多くは一般社会で疎外されていたところを駆り出され、その奇行で宮廷人を楽しませたり、遊び相手として子女の身の回りに控えているのが常であった。「慰め者」の数は宮廷社会の腐敗の度合いに比例して増大してい

※あさわか　みどり（京都外国語大学非常勤講師）

った。[4]

ベラスケスは数多く「慰め者」を描いたと前述したが、身分の低い人物が絵画に残ることは稀なので、美術史上モデルとしての彼らの存在は、中世スペインの社会背景がもたらした特殊な現象といえる。更に「慰め者」の肖像画は二重の意味で特異な存在だった。というのは、17世紀のカトリック国スペインでは絵画の主流は教会装飾の宗教画だったからである。肖像画はまだ写真の代わりに過ぎず、美術ジャンルとしては格が低かった。初期のセビーリャ時代にはベラスケスも宗教的題材で絵を描いていたが、宮廷に入ってからの制作は押し並べて肖像画を唯一の目的としたかのようである。更に、所謂美しくないものはまだ美術作品のテーマとして一般的ではなかったという背景がある。そうしたなかでベラスケスは、指定のあった時はその人物を、自由制作では主に「慰め者」の肖像画を描き続けた。何故自由に題材を選べる時にも肖像画を、それも醜いとされる人物を描いたのだろうか。

まずテーマについていえば、ベラスケスの生きた時代が、ルネサンス期を経た初期バロック期に当たることを考慮しなければならない。柔らかく均整のとれたルネサンスの美は、歪んだものに陶酔感を求めるマニエリスムの美学に発展する。エル・グレコはその代表である。そのマニエリスムも衰退にさしかかった頃に、ベラスケスは生まれた。後に彼は王に美術品蒐集を命じられ、イタリアにも二度足を運んで人間賛美のイタリア・ルネサンス美術の宝庫に出会い、美術に対する造詣を深めた。「美」が出尽くして屈折したマニエリスムに至ったのを知った彼は、美しいものを美しく描くことに興味を失ったのではないか。ベラスケスは寡黙だったが、「優美さにおいて二位となるよりも、粗野さにおいて一位になりたいものだ」[5]と言い残している。或いは、これは憶測だが、ゲーテに言を借りて「芸術はそれ自体で高貴なものであるから、醜いものや卑俗なテーマを扱うのを芸術家が恐れることはない」[6]と考えていたのかもしれない。

次にジャンルについていえば、格が低いとはいえ肖像画は宮廷画家に課されるいちばん主な仕事だった。ベラスケスは寡作だったが、その原因をパロミーノ等の美術史家は、宮廷官吏や衣装係といった雑務に忙殺されたためだとし、必然的に肖像画が多くなったのだと解釈している[7]。しかしその様な否定的な言い方をするまでもなく、評価の低い醜いとされるものをテーマに選んだ時と同様、いずれにせよベラスケスは肖像画がポピュラーでないことなど意に介さなかったのではないか、と私は考える。フェリペ4世という、政治家としては

三流である反面芸術に優れた理解を示す王の命の下、イタリアに派遣されてベラスケスは第一線の美術世界に触れることができた。更に、絵を売る必要がないため、一般受けする作品を描かなくてもよかった。こうした境遇にあってベラスケスは、己れの才能を充分に自覚し、超時代的視点を持つに至ったのではないか。即ち、ある作品がその時その場での人気を超えて美術史上に残るのは、宗教画など特定のジャンルの作品だからではなく、それまでにない新しい作品だったからだ。従って真の芸術家の価値は、誰よりも巧く描くこと、誰もなし得なかった仕事をなすことにこそあるのだと考える様になったのではないか。

尤も「慰め者」を描いたのはベラスケスが初めてではない。しかし以前のサンチェス・コエーリョやティツィアーノ、リベーラ等の手になる作品では「慰め者」たちは宮廷人の引き立て役であり、背景の一部に過ぎなかった[8]。一方ベラスケスの作品では、殆どの場合単独で描かれている。こうした「慰め者」の単独肖像画は、制作年代のはっきりしない非公式の作品が多い。正式に注文を受けて宮廷人を描く際には失敗が許されないが、市井の人々よりも身近にいた「慰め者」たちは、画家が自由に自らの好むままに描くことができる実験的作品のモデルとして恰好の題材であったのだろう。また、高貴な人物の内面から自ずとにじみ出る気品を表現すると同様に、前例を見ない優れた作品にするためには、「慰め者」を描く際にもその性格を巧みに表さなければならなかった。ところが彼らは外面の特徴が前面に出がちなため、内面性描写がより一層難しい。画家にとってモデルとしての「慰め者」たちは大変な難題でもあった。その難題の克服こそ、ベラスケスが目指した「粗野さにおいて一位になること」だったのではないか。ならばベラスケスが自由制作で「慰め者」のテーマを選んだことも納得がいく。

オルテガ・イ・ガセットは「ベラスケスは人々の嫉みや誹謗を無視することの天才であった」[9]と記している。その様な画家としてのベラスケスの態度は、言ってみればボードレール等の「芸術至上主義」の価値観と一致する。即ち芸術は何物にも従わないものなので、たとえ社会の認めないテーマであっても何らかの革新性があれば、革新性こそが芸術の価値なのだから、その作品は優れているとする考え方である[10]。そしてベラスケスは革新性、先駆者たることを、人物画における誰もなし得なかったほどの完璧な内面性描写に求めた。だからこそ肖像画に執着したのであり、その修練の過程が「慰め者」の肖像画に具現したのであろう。

2. ベラスケスと「慰め者」たち

ベラスケスはかつて引き立て役に過ぎなかった「慰め者」の姿を一幅の絵画に仕上げた。「慰め者」という、客観的にみて恵まれない人々が一個人として扱われているため、M・ゴンサレスは次のような解釈を呈した。即ち「ベラスケスは彼らに深い人間愛を以て接し、その純粋な表情を好んで描いた。どんな人物にも分け隔てなく人間の尊厳を見いだす、これこそベラスケスの魂である」[11]と讃えたのである。

ところが私は「慰め者」の作品を見ても、特に画家のその様な慈愛に満ちた視線を見いだすことができないのである。やはり彼の関心はあくまで人物の内面性描写にあったのではないか。愛情をもっていても愛情を込めて描くのではなく、客体が作品になるまで無感情にひたすら直視し続けた結果、そのものが持つ尊厳が自然と画布上に生まれたということではないか、と思うのである。この点は次章で「シリーズ・座像」を分析する際にも検討していくが、まず根拠のひとつとして、ベラスケスが王を描く際の姿勢を考えてみたい。

ベラスケスの描く王は、全般的に疲れた気弱な姿をしている。通常なら宮廷画家が王を描く時には、多少なり脚色を加えるものである。王の場合、肖像画は何よりも威信のデモンストレーションでなくてはならないからだ。J・モーフィットは、ベラスケスも例に漏れずフェリペ4世を神格化して描いていると評している[12]。しかし王が才能を認めてベラスケス以外に自分を描くことを許さなかったというのに、その王に対してベラスケスが画家としての態度を曲げたと考えるのは些か不自然なように思われる。媚よりは類い稀な表現力の方を望んだからこそ、王は他の画家を避けてベラスケスに描かせたのではないか。おそらく、擬勢を張ったのはモデルの王の方であって、画家は虚勢があるなら騙されることなく虚勢として描いたということであろう。

私はモーフィットの意見を以上のように解釈し、画家ベラスケスの目は、自分を重用している敬愛すべき王に対しても客観的であった、と考える。彼は誰もができる美しいものへの捏造などせず、誰もなし得なかったほど見事に、モデルの本質、即ち内面を描ききることを目指した。また、ひとつの存在の本質は普遍的である。個人的感情をできるかぎり排除することことにより作品に普遍性が生ずる。つまり、本質の持つ普遍性がモデルに対して画家個人の持つ感情とは無縁であるが故に、ベラスケスは無感動なリアリズムに徹したのである。これが彼の目的であり、制作姿勢だった。この様に考えると、彼が人間愛を抱いていたか否かの問題は、作品制作の本来的な動機でもなく解釈において強調

されるべきものでもないことになる。

またもしベラスケスが普段から「慰め者」たちを好ましく思っていたとしても、別段特殊なことではない。というのは、彼らは当時の宮廷では至極当たり前の存在であり、宮廷人としては自分たちを楽しませてくれる、愛すべき存在だったと考えられるからである。仮にも誇り高い王家の人間が、本当に蔑んでいる人間を同席させたりするだろうか。ベラスケス以前から、たとえ引き立て役にせよ、「慰め者」は宮廷人と同じ画面に描かれてきた。もし本当に彼らが見下された存在だったとしたら、その絵を王宮に飾れば王家を冒涜することになろう。「慰め者」はそもそも笑われるために、身分の卑しさにも拘らず宮廷に招かれたのだから、ベラスケスも彼らを見て笑ったかもしれない。無論我々の感覚からすれば、身体的、知的障害のある人々を宮廷に置いてその奇怪さを笑うなど、人道にもとることである。しかしそれよりも重要なのは、当時の宮廷側が「慰め者」たちを等身大で、ありのまま受け入れていた、ということである。モレノ・ビリャの報告によれば、彼らの役割は主に道化だが、策略と陰謀の横行する宮廷内でスパイとして活躍する者もあったという。王子や王女には害のない良き遊び相手をつとめていた。身近に置かれて信頼され、愛された存在だったと考えてよかろう。

もし「慰め者」の特徴を劣ったものとする前提にたった見方をすれば、彼らを一個人として扱うベラスケスの態度は賞賛されるべきものとなるであろう。しかし私は、ベラスケスが外面的な特徴を強調しないのは、単に描きたかったものが外見ではなかったからではないかと思う。モデルが王であれ「慰め者」であれ同じ方法を貫いたベラスケスの画面には、温かな人間愛よりは寧ろ静かなリアリズムが醸し出すある種の叙情が感じられる。

3. シリーズ・座像

以上の考察を踏まえて、ここで具体的に作品分析をしてみたい。「慰め者」のテーマで描かれた代表作として、「道化フアン・カラバサス、通称カラバシーリャス」、「フランシスコ・レスカーノ」、「ディエゴ・デ・アセード、通称エル・プリモ」、「セバスティアン・デ・モーラ」の4点が挙げられる[13]。4作の内「セバスティアン・デ・モーラ」は別に保管されていたが、同じポーズと同じサイズのキャンバスが使われており、当初は連作として制作されたと推定されるため、「シリーズ・座像」(la serie sedente)と呼ばれている。

カラバシーリャスは国王つきの道化だが、精神面で不幸があったという。レ

スカーノは脳水腫を患ったビスカヤ出身の矮人で、バルタサール・カルロス王子に仕えていた。「バレェーカスの少年」とも呼ばれている。エル・プリモとモーラはともに矮人ながら有能で、王宮で官職に従事していた[14]。

この四作品の特徴はまず、そのポーズにある。特定の個人の肖像画は通常、胸像か立像で描かれていた。非常に高貴な人物、ベラスケスの例では「インノケンティウス10世」の様な例外を除けば(法王の権威は座ることで損なわれる類のものではない[15]とされる)、座像は極めて異例であった。「慰め者」の場合、立像だと顕著にあらわれる身体的特徴が座ると比較的不明瞭になるので、画家が意図的にこのポーズを選んだものと考えられている。四作品はいずれもモデルを座らせることによって、極端に喜劇的性格を表しむることなく、かわりに精神的な奥深さを前面に引き出している。従ってこのシリーズは「慰め者」肖像画の内でも絶品とされているが、座像は単に体型を誤魔化すための姑息な手段というわけではなく、画家の目は依然として冷静である。

何故なら矮人であるモーラ、エル・プリモ、レスカーノを座らせて身丈の足りないことが目立たないように工夫しているとはいえ、カラバシーリャスとレスカーノの焦点の定まらない目付きをはっきりと描いているからである。狂気は内面性であり、それはベラスケスの目的のためには是非とも表現すべき要素だった。レスカーノの歪んだ脚から鑑賞者の目を反らさせるのは、肝要たるその狂気のほうを見せたかったからであろう。レスカーノのズボンはだらしなくずりあがって左脚が見えてしまっているのだが、それはそのまま描かれているのである。

カラバシーリャスは床に座っている。オロスコはこれを「[床に]打ち捨てられた存在の糾弾」[16]と読んだが、私には卑屈から床に蹲っている様にも見えるし、或いは立っていられないほどだらしないかの様にも見える。左手には瓢箪(calabaza)が見られるが、これはモデルを決定する記号としての他に、瓢箪のアレゴリーから「愚か者」という意味にもとれる。また右手には、これも瓢箪か(ふたつで calabazas)もしくは酒壷か、批評家の意見の別れるところなのだが[17]、要するに「飲んだくれ」ともとれる様なものが描かれている。ベラスケスはそのだらしなさをおかしがりもせず哀れみもせず、ただ描いている。

次にエル・プリモは、非常に大きな本を前に開いて座っている。もし体型をぼかしたかったのならば、かくも巨大な書物を広げさせたりしなかっただろう。手にしている本と比べればあまりに小さい身体に否応なしに気付いてしまう。しかし事実普段この本を扱う人物だったので、そのまま描いたのだろう。尤も

エル・プリモはさの如き些事に我関せずといった風の不遜な表情を浮かべており、この冗談めいた不均衡が醸し出すはずの可笑しみは吹き飛ばされてしまう。この傲岸さが逆に滑稽でもある。ベラスケスの意図はこの自信に満ちあふれた様子を表すことにあったのではないか。

モーラのポーズは全身に力が入っていて甚だ不自然である。拳を堅く握り締めて、上目遣いに凄まじい凝視で、みる者を射竦める。かつて常に虐待されてきた者が、何もしないうちから防御を固めて睨みつけるときの警戒の目である。そうして彼が閉じこもっているのはまたしても、その圧縮されたかの如き肉体である。小さくまとまった人形のような不自然な姿勢を何故取らせたのか。ここでモーラはその身体を隠す気はない。それを曝け出して、そのうえでそれを乗り越えて、内からほとばしり出る情熱が結局我々を圧倒する。

四人のうち唯一背をまるめているのはカラバシーリャスのみで、矮人の三人はみな背筋をのばし、身体を隠そうとしない。その奇形は座っても糊塗し切れるものではなく、画家はそれを写実するばかりか寧ろ際立たせるようなこともしている。にも拘らず実際には鑑賞者はまずそれぞれの人物の発散する空恐ろしい狂気や視線の迫力に圧倒されるので、外面の不均衡がひとり印象に残る隙はない。ベラスケスの内面表現力の勝利に、座像のポーズが部分的に貢献した形である。

背景はモデル自身を生かすため簡略化されている。ものが置かれるにしても、カラバシーリャスの瓢箪など人物を特定するための最小限のイコノロジーに留まっている。その他エル・プリモとレスカーノの後ろにはグアダラーマの岩山が見えるが、これはこの辺りで王が好んで狩猟していたので、彼らの同行の可能性をうかがわせるものである[18]。エル・プリモは王が署名する書類封印の役に与っていたので[19]、巨大な文書類と糊の壷もおかれている。モーラの背景には何も描かれていない。我々の注意が画家のおそらく表現したかったもの、即ち人物の視線にのみ集中するように、大胆で潔い構成になっている。

モデルが王であろうと「慰め者」であろうと、ベラスケスはその者が居る場所、着ているもの、表れている表情を、自己の目に映る通りに正確に画布に移す。それ以上でもそれ以下でもない。いみじくもE・ドールスが「世界の上に置かれた一枚のガラス」と譬えたベラスケスの絵は、鑑賞者に解釈のすべてを委託する。「真理の如く生々しく、しかし真理の如く厳粛な」[20]作品を前に、鑑賞者は全く自由な状態にとり残される。モーラやエル・プリモの尊厳を、ベラスケスの人間愛のあらわれに帰依するのもひとつの解釈だが、忘れてはならな

いことは、彼が画家としては決して感情に溺れなかったという事実である。人間ベラスケスの優しさと画家ベラスケスのリアリズムの内、どちらがより作品を決定する要素だったか。この点については論を待たないであろう。

結　び

ベラスケスの「慰め者」の単独肖像画は画家の人間愛の所産だと考えられてきた。しかしベラスケスがヒューマニストとして彼らを愛したという明確な記録は残っていない。一方、この画家は描く時に作品に感情を介入させない。彼の作品では、死すべき存在たる人間・画家を一切排除する冷徹なリアリズムによって、描かれたものがその本質に凝縮されて永遠性をもって生きてくる。この方法を彼は画家としてどんなモデルに対しても一貫して用いたが、そのこと自体は必ずしも彼の人間性としての博愛主義を示すものではない。ただ画家としては、どんな人物も一様にひとつの客体としてとらえていた。このことは敢えて博愛主義から説明しなくても、画家が自らの方法を貫いたと考えることで充分ではなかろうか。

ベラスケスは人間を描く画家だったが、当時肖像画が高い評価を得ていなかったことは前述のとおりである。我々はひとつの世界しか所有していない。芸術の役割は別の幻想世界をつくりあげて併置し、世界を拡大することである。美術ではその最も明快な方法として、神話や宗教を題材に別世界を創造することが好まれてきた。肖像画はボデゴンとともに、現実の単なる模倣に過ぎないため、次元が低かったのである。そうしたなかでベラスケスは、レスカーノやカラバシーリャスを描いて、画布の上で生き続けるひとつの世界を残した。単なる模倣とはいえ、彼のリアリズムは内面性を表した。内面を描くということは即ち、あるものの個別性をつきつめることによって、流動する時間をただその一点に止めてしまい、それをそのものとして永遠化することである。モデルの人間が死ぬことはあっても、キャンバスが朽ちることはあっても、描かれた世界そのものは我々の世界の外部で永遠に生き続ける。

その様なベラスケスの絵を、L・フェラーリは「個の救済」と表現した。ベラスケスが何よりも人間を描いた、また一個の存在として描いた画家だということを見事に要約している。彼の取ったリアリズムという方法は、時に残酷に狂気を露呈するが、それは糾弾でも揶揄でもない。一個人の真実の姿を、存在そのものとして絵になりきらせ、社会から疎んぜられてきた「慰め者」から永遠性と普遍性を有した芸術作品を引き出したという意味で、文字通り救済なの

である。人間という死すべき存在をありのままに描き、そこからベラスケスは芸術作品の形で絶対存在を生み出した。言い換えればリアリズム (現実の写実) という方法で、逆説的に個を現実から救済したのだといえよう。そして彼がこの方法を選んだということは、障害者に対する哀れみから彼らの尊厳を回復させようとする試みとしてではなく、あの「粗野さに於いて一位になりたい」という野望から、独自のテーマ —肖像画、しかも美以外のもの— と独自の手法 —内面性描写— に固執した結果として説明し得る。それはベラスケスの天賦の才能に対する自信と、絵画に対する誠実さをも示すものである。

註

1) 以上の記述は『カンヴァス世界の大画家 15　ベラスケス』(中央公論社、1983年)収録の年譜(大高保二郎作成)、及びJulián Gallegoの *Diego Velázquez* (Editorial Anthropos., Barcelona, 1983) に基づく。
2) 同上。宮廷には数多くの画家が置かれていたが、国王を直接描くことはベラスケスが務めていた首席宮廷画家の特権だった。
3) モレノ・ビリャによる呼称。訳語「慰め者」は大高氏による。
4) José Moreno Villa, *Locos, enanos, negros y niños palaciegos* (Ciudad de México, 1939) 参照。1563年から1700年までのスペイン宮廷の「慰め者」について詳細に記録されている。
5) José Ortega y Gasset, *Introducción a Velázquez* (1947) en *Velázquez* (Aguilar, S.A. de Ediciones. Juan Bravo, Madrid, 1987), p.30.
6) Jacques Derrida, *La vérité en peinture* (Flammarion, París, 1978), p.87 et al..
7) Acisclo Antonio Palomino, *El museo pictórico y escala óptica,* Madrid, 1715-1724. (Edición M.aguilar, Madrid, 1947) I 参照。
8) ベラスケス以降の画家、ファン・カレーニョ・デ・ミランダやヨハン・ファン・デル・ハーメン等は矮人や道化師を単独で描いているが、完全なバロック的嗜好でグロテスクな嘲笑を醸すものだった。
9) Ortega y Gasset, op.cit., p.33.
10) Charles Baudelaire, *Le peintre de la vie moderne en Écrits sur l'art* (Edición Librairie Générale Française, París, 1992) pp.369-410.
11) Juan José Martín González, *Papel social del bufón en Velázquez en Reflexiones sobre Velázquez* (Real Academia de Bellas Artes de San Fernando, Madrid, 1992) 参照。
12) John F. Moffitt, *Velázquez, práctica e idea: Estudios dispersos,* Málaga, 1991, p.125 et al..
13) プラド美術館のカタログで使用されている呼称はそれぞれ以下の通り。日本語題は

『世界の大画家 15　ベラスケス』のもの。

<El bufón Calabacillas, llamado erróneamente el Bobo de Coria>, <Francisco Lezcano, el niño de Vallecas>, <El bufón don Diego de Acedo, el Primo>, <Don Sebastián de Morra>.

14) 1991年のベラスケス展カタログ（プラド美術館）を参照。

15) エミリオ・オロスコ著、吉田彩子訳『ベラスケスとバロックの精神』、筑摩書房、1983年、p.103.

16) 同上。

17) J.ガリェーゴやベルエーテ等、どちらとも断定しない立場を取る批評家が多い。瓢箪のアレゴリーはこの絵に限らない一般的なものだが、例は少ない。

18) ベラスケス展カタログ参照。

19) 同上。

20) Eugenio D'Ors, *Tres horas en el Museo del Prado* (Edición Editorial Tecnos S.A., Madrid, 1989) p.44.

参考文献

I. カタログについて

Museo del Prado, Catálogo de las pinturas, 1985.

————————, VELÁZQUEZ (catálogo de la exposición), 1991.

『カンヴァス世界の大画家 15 ベラスケス』中央公論社、1982年

II. ベラスケスと作品に関する研究書及びエッセイについて

D'Ors, E., *Tres horas en el Museo del Prado,* Edición Editorial Tecnos S.A., Madrid, 1989.

Gallego, J., *Diego Velázquez,* Editorial Anthropos., Barcelona, 1983.

神吉敬三、『プラドで見た夢』、小沢書店、東京、1985年

Martín González, J.J., *Papel social del bufón en Velázquez,* Real Academia de Bellas Artes de San Fernando, Madrid, 1992.

Moffitt, J.F., *Velázquez, práctica e idea: Estudios dipersos,* Málaga, 1991.

エミリオ・オロスコ著、吉田彩子訳『ベラスケスとバロックの精神』筑摩書房、東京、1983年

Ortega y Gasset, J., *Velázquez,* Aguilar, S.A. de Ediciones. Juan Bravo, Madrid, 1987.

Palomino, A.A., *El museo pictórico y escala óptica,* 1715-1724. Edición M.aguilar, Madrid, 1947.

III. その他

Baudelaire, C., *Écrits sur l'art,* Edición Librairie Générale Française, París, 1992.

Bouza, F., *Locos, enanos y hombres de placer,* Ediciones Temas del Hoy S.A., Madrid, 1991.

Brown, J., *Images and Ideas in Seventeenth Century Spanish Paintings,* Prinston University Press, 1978.

Derrida, J., *La vérité en peinture,* Flammarion, París, 1978.

Moreno Villa, J., *Locos, enanos, negros y niños palaciegos,* Ciudad de México, 1939.

Una consideración sobre la elisión y la permutación en la coordinación

Ichiro MIKI*

0. Introducción.

Entendemos que los miembros coordinado y coordinador tiene una distribución obligatoria (condición de la contigüidad obligatoria). Sin embargo, no se ha tenido en cuenta hasta hace poco la importancia de esta condición, que consideramos de notable alcance en el marco de una teoría de la coordinación copulativa. El presente trabajo tiene por objeto llenar esta laguna. Pero el tema de la contigüidad obligatoria nos ha parecido excesivamente amplio para profundizar en todos sus aspecto, por lo tanto nos dedicamos sólo a un estudio de la elisión y la permutación.

1. Elisión de la parte de un miembro coordinado.

La regla de la contigüidad obligatoria es sumamente útil, por no decir necesaria, para circunscribir con precisión la extensión coordinativa; para indicar, por consiguiente, dónde comienzan y dónde terminan los miembros de la coordinación copulativa. En la oración:

(1) He regalado a Antonio una naranja y a María un plátano.

salta a la vista que la coordinación copulativa no se establece entre *una naranja y a María* por ser imposible la coordinación de un complemento directo y un complemento indirecto. Tampoco se enlazan *a Antonio* y *a María* o *una naranja* y *un plátano* puesto que tal suposición sería incompatible con la distribución obligatoria de la coordinación copulativa. Las dos unidades mínimas, funcionalmente equivalentes, situadas en el

※みき　いちろう（京都外国語大学専任講師）

mismo nivel jerárquico y contiguas son *a Juan una naranja* y *a María un plátano*. En cambio, en una oración como:

(2) Antonio canta bien y Fernando mal.

no se encuentran dos secuencias que cumplan todas las condiciones porque el segundo miembro es incompleto. Como hemos visto en otro artículo[1], se impone aquí la suposición de una estructura elíptica, que en su forma restablecida daría una coordinación copulativa de dos oraciones.

2. Elisión de un miembro coordinado entero.

2.1. Al parecer, la condición de la contigüidad obligatoria implica que en la estructura superficial aparezcan siempre por lo menos dos miembros coordinados. También Simon C. Dik parece apuntar en este sentido[2]: "coordination is a construction consisting of two or more members which [...]"

Todavía más explícita es Carmen Bobes Naves[3]. En su opinión, "una diferencia formal muy notable [entre la coordinación copulativa y la coordinación adversativa] es el hecho de que las coordinadas copulativas no pueden prescindir del primer elemento" y "la imposibilidad de suprimir el primer elemento de una copulativa es una consecuencia de la libertad total que ofrece el plano semántico para la coordinación copulativa en la FN." Dejando de lado lo de la libertad total que ofrece el plano semántico, que es más que discutible, se deduce que la autora considera la imposibilidad de suprimir un miembro como axiomática. Pero, ¿es realmente así? Hay buenas razones para negar esta pregunta dado que sí se dan casos - aunque no son demasiado frecuentes - de supresión del primer elemento sin que la gramaticalidad de la expresión disminuya. E incluso parece haber dos tipos de tal construcción:

(a) Con un referente concreto y definido, conocido por el hablante y el oyente, que se suprime:

(3) ¿A qué hora te marchas? Me voy a [ϕ y media].

La hora a partir de la cual se calcula la media hora es la hora en cuyo transcurso se realiza la enunciación de este ejemplo.

(b) Con un referente concreto pero indefinido, que se suprime:

(4) En la Universidad de Navarra las clases empiezan siempre a [ϕ y cuarto] y duran hasta la hora entera.

La hora entera a partir de la cual se cuenta el cuarto de hora puede ser cualquiera de las horas en que se imparten clases durante el día lectivo.

García de Diego es el único autor que hace alusión al tema a través de un ejemplo tomado de la lengua clásica, donde, según él, se sobreentiende el primer miembro coordinado:

(5) Acabas [tú] y tu dura tiranía[4].

El caso inverso, la elisión del segundo miembro, no parece existir, a no ser que el hablante suspenda de repente la oración después del coordinador para callarse algo que no desea pronunciar, para provocar la adivinanza del interlocutor, porque el hablante pierde el hilo de su discurso, porque ya no sabe cómo seguir o, simplemente, porque el interlocutor lo interrumpe en un dialogo:

(6) ... meterlas en una bolsa de plástico y ... Ignoro la continuación, ya que la ley no dice lo que se ha de hacer después... *(La Vangurdia, 16. 5. 1983, p. 40)*

En suma, puede generalizarse que en el plano formal la coordinación copulativa no reclama en todos los casos la aparición de los dos miembros.[5] Desde el punto de vista lógico, en cambio, siempre se necesitan, por definición, por lo menos dos objetos o conceptos para coordinar. Aunque el primer miembro no aparezca de forma explícita en el discurso, mentalmente hay siempre algo previo en el hablante. Empleado al principio de un enunciado, el coordinador establece un nexo con lo anteriormente

expresado o, a falta de un enunciado, con lo anteriormente pensado. No podemos preguntar:

(7) Y las tijeras ¿dónde están?

si previamente no hemos pensado en ellas acaso buscándolas. Werner Beinhauer interpreta sus ejemplos de la misma manera: "Leandro (que ya había chocado con el camarero cuando al poco rato tropieza con Pérez; el reflejo lingüístico de este contraejemplo es): ¡Canasto! ¡Y va de encontrones! La <Y> se explica psicológicamente: Ya he tropezado con uno y ahora me sucede otra vez."[6]
La <Y> aislada se encuentra también en las formas de rematar la enunciación, como por ejemplo en: ¡Y dale! También en este caso Beinhauer supone un precedente: "Yo lo interpreto como la misma partícula que aparece junto al último término de una enumeración."[7]

2.2. María Moliner señala igualmente este hecho[8]: "A veces se pone <Y> al principio de una expresión, de modo que, aparentemente, no enlaza ésta con nada. Se puede suponer que el enlace se realiza mentalmente con algo pensado o dicho antes o por otra persona: [Y no tardes. ¡Y no me habías dicho nada!]" No obstante, añade una salvedad, que requiere casi una investigación psicológica o mentalista, por lo que no voy a insistir en ello. Dice, continuando lo arriba citado: "A veces, no es tan fácil suponer un antecedente tácito y la <Y> debe considerar como una partícula expletiva; como en [¿y todavía no ves la torre del pueblo?] o en [¿Y dejas, pastor santo,..?]" Por lo visto, la eminente lexicógrafa tenía en mente el siguiente párrafo de Andrés Bello[9] : "Pierde el oficio de conjunción y toma el de simple adverbio en interrogaciones y exclamaciones directas. Fr. Luis de León principia así una de sus odas:

(8) ¿Y dejas, Pastor santo,
Tú grey en este valle hondo, oscuro?
(Fray Luis de León, *Poesías,* Barcelona, Planeta, 1980, p.57)

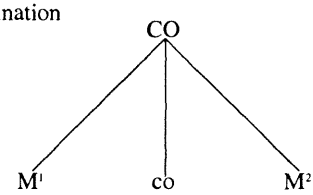
"¡Y que no viese yo todo eso!", exclama el héroe de Cervantes al oír una descripción que le hace su escudero. Fácil es percibir la énfasis de esta conjunción adverbializada

así. Principiando por una palabra que regularmente supone otras anteriores, se hace entrever confusamente un conjunto de ideas, sobre las cuales salta el que habla para fijarse en la más importante."[10]

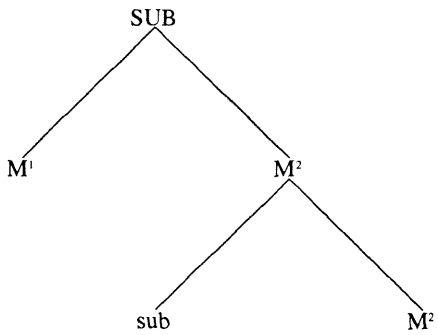
3. Permutación.

3.1. A fin de apreciar con toda plenitud las ventajas de la atención que he prestado a la condición de la contigüidad obligatoria, conviene recordar lo que numerosos autores han dicho sobre las conjunciones propiamente dichas o coordinantes de un lado, y las conjunciones impropias o subordinantes de otro[11]: Aquéllas señalan la relación de dos unidades enlazadas, formando una entidad íntima con ambas, mientras que éstas indican la función de lo que sigue formando una unidad estrecha sólo con lo que les sigue (=la subordinada), pero no con lo que les precede[12]. También Dik hace hincapié en este fenómeno[13]: [...] while coordinators are not bound up more closely with any one of the members[14] they coordinate [...], subordinating conjunction rather constitute one unit with the subordinated part, a unit which as a whole can be coordinated with other units[15]. The difference can be seen from (29) and (30):

(29) Coordination



(30)



Es de esperar que esto tenga una clara repercusión en el orden de palabras. Y en efecto, como veremos, se confirma esta suposición.

3.2. El alemán conoce en el nivel oracional un criterio formal o distribucional para distinguir nítidamente construcciones coordinativas frente a otras que no lo son. En todos los casos de no coordinación el verbo finito, que suele preceder a los complementos, pasa a ocupar el último lugar de la proposición subordinada. Los siguientes ejemplos figuran en la tesis de Enzo Franchini[16].

(9) Heute *ist* Mittwoch. (Hoy *es* miórcoles.)
(9a) Ich glaube, dass heute Mittwoch *ist*. (Creo que hoy *es* miércoles.)

Por lo demás, la partícula negativa *nicht* (no), que aparece habitualmente pospuesta al núcleo verbal, le precede en la subordinación:

(10) Heute *ist* nicht Mittwoch.
(10a) Ich weiss, dass huete nicht Mittwoch ist.

En cambio, la coordinación de oraciones mantiene inalterado el orden de palabras de la oración simple:

(11) Hans *ist nicht* mein Bruder. Peter *ist nicht* mein Freund.
(Juan *no es* mi hermano. Pedro *no es* mi amigo.)
(11a) Hans *ist nicht* mein Bruder und Peter *ist nicht* mein Freund.
(Juan *no es* mi hermano y Pedro *no es* mi amigo.)

Este criterio es aplicable en alemán tanto a la subordinación sustantiva como a la adjetiva y a la adverbial.

El español, que goza de una amplia flexibilidad en el orden de las palabras, carece de este criterio distribucional para separar la coordinación de la subordinación.

3.3. En contra de este juicio consideramos que la condición de contigüidad

obligatoria sí nos ofrece un camino de identificación un tanto parecido al del alemán. Repárece en los paradigmas siguientes:

(12) Antonio se calla y Fernando se ríe.
Antonio se calla pero Fernando se ríe.
Antonio se calla o Fernando se ríe.
Antonio se calla pues Fernando se ríe.

(13) Antonio se calla cuando Fernando se ríe.
Antonio se calla sí Fernando se ríe.
Antonio se calla porque Fernando se ríe.
Antonio se calla aunque Fernando se ríe.

Si a estas estructuras, que podríamos formular como:

O^1 conj. O^2

aplicamos el test de permutación [17]:

O^1 conj. O^2 ⟶ conj. O^2, O^1

vemos en seguida que el primer paradigma, compuesto de coordinaciones, resulta agramatical por infracción a la condición de contigüidad obligatoria:

(12a) * Y Fernando se ríe, Antonio se calla.
* Pero Fernando se ríe, Antonio se calla.
* O Fernando se ríe, Antonio se calla.
* Pues Fernando se ríe, Antonio se calla.

Por otro lado, el paradigma (13) correspondiente a la subordinación conoce naturalmente también la contigüidad de miembros en su configuración O^1 conj. O^2 pero con la gran diferencia de que no es obligatoria pues permite la permutación:

(13a) Cuando Fernando se ríe, Antonio se calla.

Si Fernando se ríe, Antonio se calla.
Porque Fernando se ríe, Antonio se calla.
Aunque Fernando se ríe, Antonio se calla.

Se entiende esto perfectamente cuando se vuelven a contemplar los árboles (29) y (30), y recordando lo que se ha dicho sobre la unidad íntima de la conjunción subordiante con la subordinada. Aluciones a esta permutación posible o imposible se encuentran también en el artículo de José Luis Rivarola[18]. Relacionando con este test está el del desplazamiento del sujeto:

(14) Aunque *Antonio* sabe algo, no dice nada.
(14a) Aunque sabe algo, *Antonio* no dice nada.

Pero:

(15) *Antonio* sabe algo y no dice nada.
(15a) * Sabe algo, y Antonio no dice nada.

4. Final

La conclusión que debe sacarse de estos argumentos es que la contigüidad obligatoria constituye un rasgo privativo y pertinente de la coordinación frente a la subordinación, por lo que es una necesidad imperiosa formularla como restricción gramatical de la coordinación copulativa.

NOTAS

1) I. Miki (1991), pp.65-83.
2) S. Dik (1968), p.25.
3) C.Bobes Naves (1973), p.282.
4) V. García de Diego (1970), p.402.
5) Cabe hablar de un "miembro tácito".
6) W. Beinhauer (1973), p.201.
7) *Ibid.*, p.298.

8) M. Moliner (1977), p.1561.

9) A. Bello (1981) párr. p.1286.

10) Cf. también G. Antoine (1956-62), pp.933-944.

11) Para este término consúltese F. Marcos Marín (1980), pp.326-328.

12) Cf., por ejemplo, G. Mouin (1974), pp.191-209.

13) S. Dik (1968) p.36.

14) Dik (1968) opina que entre los miembros y el coordinador no hay ninguna relación estrecha. En contraste con este parecer creamos que esta relación es particularmente fuerte, con todas las implicaciones distribucionales o posicionales que ello supone.

15) Para el significado de esta última parte de la oración, véase E. Franchini (1986), p.196.

16) *Ibid.*, p.174.

17) I. Bosque (1980), p.120.

18) J.l. Rivarola (1981), pp.21-29.

BIBLIOGRAFIAS

Antoine, Gérald. (1956-1962), *La coordination en français.* 2 vols. Paris, Artrey.

Beinhauer, Werner. (1973), *El español coloquial,* Madrid, Gredos.

Bello, Andrés. (1847), *Gramática de la lengua castellana, destinada al uso de los americanos,* edición crítica de Ramón Trujillo, Santa Cruz de Tenerife, (Instituto Universitario de Lingüística "Andrés Bello" / Cabildo Insular de Tenerife). 1981.

Bobes Naves, María del Carmen. (1973), "La coordinación en la frase nominal castellana (II)", *Revista Española de Lingüística.* 3-2: pp.261-295.

Bosque, Ignacio. (1980), *Problema de Morfosintaxis,* Madrid, Universidad Complutense.

Dik, Simon C. (1968), *Coordination: Its implications for the theory of general linguistics.* Amsterdam, North-Holland.

Franchini, Enzo. (1986), *Las condiciones gramaticales de la coordinación copulativa en español,* Bern, Francke Verlag.

García de Diego, Vicente. (1970), *Gramática Histórica Española,* Madrid, Gredos.

Marcos Marín, Francisco. (1980), *Curso de gramática española,* Madrid, Cincel.

Miki, Ichiro. (1991), "La elipsis en la coordinación copulativa en español", HISPANICA. 35: pp.65-83.

Moliner, María. (1977), *Diccionario de Uso del Español,* 2 vols., Madrid, Gredos.

Mouin, Georges. (1974), "Le problème des critères d'analyse dans la description linguistique fonctionnelle: la coordination", *De la théorie linguistique à l'enseignement de la langue.* sous la direction de Jeanne Martinet, Presses Universitaires de France, pp.191-209.

Rivalora, José Luis. (1981), "Observaciones sobre la hipotaxis y la parataxis en español". *Lexis*. 5-1: pp.21-29.

状況補語における時を表す名詞句と前置詞句
——前置詞の役割について——

武　藤　節　子※

0. はじめに

状況補語とは動詞句の補語の一つであり文の核を成す要素ではない。動詞や動詞句により示される行為や状況が展開されてゆく状況、時、場所、様態を表す文の要素である。その形態は、副詞、副詞句を中心に様々であるが、その表す状況もまた様々な意味を持っていると言える。

本稿では、状況補語の中の時を表す前置詞句と名詞句に注目した。前置詞は状況補語においては重要な存在であり、transpositorという機能を持っている。前置詞を用いることにより、名詞や名詞句が文中で状況補語として機能することができる。しかし、時を表す名詞句に関しては、必ずしもこのtranspositorとして機能する前置詞を必要とするわけではない。

本稿では、名詞句と前置詞句の用例を比較し、前置詞の役割について考察する。資料体は小説および雑誌とした。[1]

1. “transpositor” とは

Alarcos Llorachはその著*Estudios de gramática funcional del español*において、状況補語がとる形態に関して、「状況補語には名詞も用いられるが、状況補語は副詞以上のものではない。それゆえ名詞であるならば、副詞的な機能を果たすためにtranspositorといわれる要素により形態を変えなければならない。」[2]と述べている。また状況補語の機能を果たす要素について示している。例えば、文*Llegó ayer*において/ayer/は最小の記号で状況補語としての機能を果たしている。また、同様な機能を果たす要素により交換することができる。*Llegó temprano. Llegó el sábado.*においてもまた、/temprano/と/el sábado/は、明確な指標を伴わず、状況補語の機能を果たしている。

※むとう　せつこ（京都外国語大学非常勤講師）

次に、形容詞と名詞の場合についてみると、*Llegó anoche. Llegó por la mañana. Llegó a oscuras.*でみられるように、名詞あるいは形容詞が状況補語として文中で機能するためには、/por, a/の前置詞のように機能的指標の存在、即ち transpositorが必要になる。*Llegó en el tren de las doce.* の場合、名詞句/el tren de las doce/が前置詞/en/により、状況補語の機能を果たすようになる。

*Llegó cuando se habían ido todos.*では、もともと/se habían ido todos/という文が、接続詞/cuando/により従属節に変換され、状況補語として文中で機能している。[3] この場合、接続詞/cuando/がtranspositorである。状況補語においてtranspositorとして頻度が高く重要であるものが前置詞である。

2. 状況補語として機能する名詞および名詞句

名詞や名詞句が状況補語になるためには、transpositorとしての前置詞が必要であるが、前置詞なしで状況補語の機能を果たす名詞や名詞句がある。そのような名詞、名詞句とはどのようなものであろうか。

José Antonio Martínezはその論文 "Acerca de la transposición y el aditamento sin preposición" の中で、次のように述べている。「aditamentoすなわち状況補語の機能を果たすいかなる名詞も、それ自身で構成する名詞句の前にある前置詞によりその機能を果たすことができる。しかし、その文の核となる動詞にもよるが、aditamentoとして機能するためのtranspositorを必要としない名詞、名詞句の例もかなり存在している。」[4]

それらの名詞とは、時の概念を表す名詞である（tiempo, momento, rato, vez, segundo, minuto, hora, día, noche, mañana, tarde, semana, mes, siglo など)。その中でも定冠詞を用いるだけでaditamentoの機能を果たすことのできる名詞は、曜日の名詞と víspera の8つの名詞だけである。[5] 例えば、*regresamos el martes, se nos presentó la víspera, los domingos no se trabaja* などである。

その他の名詞がtranspositorである前置詞を必要とせず、aditamentoとして機能するには、所有形容詞を除く限定詞、品質形容詞、前置詞により形容詞化された名詞句などの形容詞あるいは形容詞句としての機能を果たす要素が必要である。ただし、これらの修飾語と時を表す名詞との間には緊密な関係がある。次に例をあげる。

Un día le pregunté a Miguel por su padre. (S-47)

Aquella tarde me detuvo al cruzarse conmigo(...) (S-35)

Cada día salimos(...) (S-49)

— Lo haremos *la noche de las Primeras Elecciones que vengan.* (P-20)

El día que cumplí siete años lo celebramos sólo entre nosotros. (S-14)

これらの例からも明らかなように、定冠詞だけでは名詞が状況補語（aditamento)として機能するには不十分である：**Salimos el día.*しかし、名詞が周知のものである場合には定冠詞と形容詞のみで表されることもある：*La próxima vez te acompaño. La próxima te acompaño.*

時を表す名詞を修飾している形容詞が、年、月、季節、気候あるいは大気現象に言及している場合、名詞句は前置詞を伴うことなく状況補語の機能を果たすことができる：*Los días de sol pasean por el parque. No salimos las noches que llueve.* しかし、**Salimos el día radiante. *Caminamos la noche oscura.*とは言えない。なぜなら、名詞が単数であるからである。*Salimos los días radiantes. Caminamos las noches oscuras.* このように名詞が複数であれば、どのような形容詞あるいは形容詞句、節も伴うことができる：*Solía pasear las noches que tenía insomnio.*

時を表す名詞が定冠詞あるいは形容詞も伴わずに、状況補語として機能している場合がある。同じ語の繰り返しあるいは互いに緊密な意味のつながりのある語が結び付き名詞句を構成している。例えば：*horas y horas, minuto a minuto, día y noche* などである。

dos semanas antes, días más tarde, un año después などの例でみられるように、定冠詞を伴わない時を表す名詞句も状況補語として機能することができる。

Horas más tarde me desperté con los gritos de mamá llamándote. (S-37)

Pocos días después cumplí diez años. (S-13)

以上、曜日と *víspera* 以外の名詞は、定冠詞だけでは状況補語（aditamento)として機能することができない。状況補語としての機能を果たすためには、限定語、形容詞あるいは形容詞句、節などの修飾語が必要である。

3. 時を表す状況補語における前置詞（transpositor)の存在の有無に関する対立について

時を表す状況補語の中で、transpositor として前置詞が存在している場合と前置詞が存在していない場合の対立について考察する。本稿では en / por により導かれる前置詞句の用例をあげ、前置詞の存在の有無の対立を文法的、任意的、意味的側面から考察する。

3.1. 前置詞 en

前置詞enは2つの境界を持つ内部を示し、また内部の境界を越える動きも表している。

3.1.1. 時を表す前置詞句における前置詞enの用法

3.1.1.1. 時を表す名詞の前に用いられ、時の流れにおいて正確な時点、あるいは位置を示す。

—Tanto como el Opus iniciado el plan de Estabilización *en 1947*(...) (P-57)

En vacaciones te dedicabas a no hacer nada de una manera espectacular. (S-28)

3.1.1.2. 時を表す名詞の前に用いられ、時間の継続、期間を表す。

Yo me descargaba todas las verduras de Valencia *en tres horas*(...) (P-82)

Hubo intercambio de besos a veces arrancados por un y a mí y a mí para quedar los siete adosados unos a otros como un vagón de metro *en una hora punta.* (P-36)

3.1.2. 文法的対立 en/ cero

この対立は日付の表示に関して文法的な性格を含んでいる。

前置詞 en は月、年、季節を表す場合に用いられるが、日や曜日の名詞に関しては、前置詞に導かれている用例は極めて少ない。

Mira que hacerse apolítico *en 1967*(...) (P-24)

(...) según analistas electorales de POSE dieron *en enero* <<un repente favorable>>, (...) (Cambio 16 Nº1115 P16)

El sábado 27 de marzo, la Asambrea de Pueblo ratificó su nombramiento (...) (Cambio 16 Nº1115 P10)

しかし、次のような用例がみられた。

"(...) *el verano pasado* erais unas crías." (M-63)

月、年、季節を表す名詞の前には、前置詞enが用いられることが多い。前に述べたように、定冠詞と曜日と víspera を除く単数名詞から成る名詞句の場合、時を表す状況補語として機能できない。しかし、この用例のように時を表す名詞（*verano*)に、明確に「時」を限定するような修飾語（*pasado*)があれば、状況補語の役割を果たすことができる。

3.1.3. 任意的対立 en/ cero

限定詞を伴う時の状況補語では、前置詞enを用いるかどうかは任意であると考えられる。

Mientras, el Grupo Teneo ha abandonado la idea de salir *este año* a bolsa. (Cambio 16 No1116 P.49)

En este año, la mayoría de las personas que visitaron el parque eran franceses. (Cambio 16 N°1116 P.12)

3.1.4. en/ cero

前置詞enを用いることにより、時の状況補語の意味のニュアンスが若干変わる場合がある。

Al fin empecé a oír (...) y la (voz) de Agustia afirmando no haberme visto *en toda la tarde.* (S-30)

(...) no haberme visto *toda la tarde*

これらの文における*toda la tarde*は時を表す慣用句である。todo el día が「一日中」という意味に対し、*toda la tarde*は「夕方中」という意味を持っている。しかし、前置詞enを用いることにより、その時間的な範囲が定まり「夕方の間には」というニュアンスが加えられていると考えられる。

3.2. 前置詞 por

前置詞porはスペイン語で非常に高い頻度で使用され、目的、原因、場所、時などの多様な意味を示している。

3.2.1. 時を表す前置詞句における前置詞 por の用法

3.2.1.1. 時間的広がりのある名詞とともに用い、その広がりの中のどの時点をも示している。

(...) *por la mañana,* muy temprano, fuiste. (S-34)

Por la noche venía hasta mi cama con un vaso de leche (...) (S-31)

3.2.1.2. durante と同じ意味を持ち、ある期間を表す。

por una temporada, por cinco días. (María Moliner 'por')

3.2.1.3. おおよその時間、期間を表す。

—Fue allá *por los años treinta.* (P-52)

3.2.2. 意味的対立 por/ cero

同じ構文において、前置詞porを用いる場合と用いない場合では、大きな意味の隔たりがある。

No me avergonzaba robársela *por una noche.* (S-48)

No me avergonzaba robársela *una noche.*

はじめの文の*por una noche*は「一晩の間」という意味であるのに対し、その次の文では、*una noche*は「ある晩（夜）」という意味を示している。先にあげた文に見られた程の意味の差はないが、前置詞porにより、時を表す名詞に時間的な広がりを与えることができる。その用例をあげる。

Por aquellos días mamá se mostraba conmigo más distante y seca que de costumbre. (S-21)

Aquellos días mamá se mostraba (...)

3.2.3. 任意的対立 por/ cero

ある構文の中で、前置詞porを省略しても意味の変化が起こらない場合がある。

Por primera vez temí que pudieras condenarte de verdad. (S-22)

Primera vez temí (...)

また、語順が変わることもある。

(...), porque tenía que confesar *por vez primera* (...) (S-21)

4. 結論

Alarcos Llorach が述べているように、名詞あるいは名詞句が状況補語として機能するためには、transpositorが必要であるというのが原則である。前置詞は、その役割を果たす重要な要素の一つである。しかし、時を表す名詞、名詞句の中には、前置詞というtranspositorがない場合でも状況補語として機能できるものがある。

本稿では、時を表す状況補語の名詞、名詞句と前置詞句（en, porにより導かれる前置詞句）に関して、文法的、意味的、任意的側面から考察した。その結果、transpositorの前置詞を必要としない名詞句に、任意に前置詞を用いること

ができ、前置詞により意味のニュアンスあるいは差異が生じる場合があることが分かった。時を表す状況補語における前置詞は、名詞、名詞句との関係においてtranspositorの機能を果たすだけではないと考えられるだろう。

注

1) 以下の小説および雑誌を資料体として使用した。例文末尾の略記号と数字は引用した作品と例文のあるページを示す。雑誌は略記号で示していない。
   (M) Delibes, M., *Cinco horas con Mario,* Barcelona, RBA, 1992.
   (P) Vázquez Montalbán, M., *El pianista,* Barcelona, RBA, 1985.
   (S) García Morales, A., *El Sur,* Barcelona, Anagrama, 1985.
   Cambio 16, N°1115, 1116, 1993.
2) E. Alarcos Llorach, (1965). p.220.
   Alarcos Llorachは状況補語にaditamentoという用語をあてた。V. <<Aditamento, adverbio y cuestiones conexas>> *Estudios de gramática funcional del español,* pp.219-253.
3) Ibíd, p.225.
4) J. A. Martínez, (1981-1982) p.505.
5) Ibíd, p.505.

参考文献

Abad Nebot, F., *El artículo sistema y usos,* Madrid, Aravaca, 1977.

Academia Eapañla, *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española,* Madrid, Espasa-Calpe, 1991.

E. Alarcos, A. Llorach, E., *Estudios de gramática funcional del español,* 2a ed., Madrid, Gredos, 1965.

A. Martínez, M. A., *El artículo como entidad funcional en el español actual,* Madrid, Gredos, 1986.

López, M. L., *Problemas y métodos en el análisis de preposiciones,* Madrid, Gredos, 1970.

Luque Durán, J. D., *Las preposiciones I,* Madrid, Sociedad General Española de Librería, 1973.

Martínez, J. A., <<Acerca de la transposición y el aditamento sin preposición>> *Archivum* XXXI-XXXII, Oviedo 1981-1982, pp.493-512.

Moliner, M., *Diccionario de uso del español,* Madrid, Gredos, 1988.

Porto Dapena, J. A., *El complemento circunstancial,* Madrid, Arco Libros, 1993.

Rojo, G., <<En torno a los complementos circunstanciales>> en *Lecciones del I y II curso de lingüística funcional,* Oviedo, 1985, pp.181-191.

Julia de Burgos en lo político y literario

Yoshiko SHIGAKI*

Julia de Burgos es una poeta representativa de Puerto Rico. Sin embargo, su posición política en la sociedad puertorriqueña es un asunto controvertido. ¿Por qué? En este estudio investigaremos sobre este punto.

Julia de Burgos publicó el primer poemario, *Poema en veinte surcos,* en el año 1938. Al año siguiente, publicó *Canción de la verdad sencilla,* con la que fue premiada por el Instituto de Literatura Puertorriqueña. En el año 1945, con su artículo titulado "Ser o no ser es la divisa" publicado en el periódico *Semanario Hispano,* recibió el premio de periodismo de ese año, otorgado por el mismo Instituto. En el año 1954, póstumamente se publicó el poemario, *El mar y tú.* Con sus trabajos, ella mereció ser nombrada como una poeta representantiva de Puerto Rico.

Al evaluarla tenemos que señalar dos aspectos. Uno es que con Julia de Burgos surgió una nueva imagen de la mujer. Otro es que en ella se simboliza la identidad del pueblo puertorriqueño.

I. Una nueva imagen de la mujer

Primero veremos respecto a la nueva imagen de la mujer.

En su obra se destaca la conciencia de sí misma, como una mujer moderna. Referente a eso podemos indicar que se le ha estimado más, desarrollándose su investigación junto con el de la investigación sobre mujer puertorriqueña de los años setenta y ochenta. No sólo se han hecho diversas investigaciones sobre Julia de Burgos; sino también su obra se ha citado en las publicaciones acerca de la mujer puertorriqueña y se nombra a Julia como una precursora de las mujeres. Las obras,

※しがき　よしこ（琉球大学非常勤講師）

que se notan en dicho sentido son "A Julia de Burgos" con que se empieza su primer poemario y "Yo misma fui mi ruta" colocado al final en el mismo poemario. Aunque se evalúa que en el segundo y el tercer poemario tienen más unidad de poemario y perfectibilidad que en el primero, en su primer poemario se destaca nítidamente su forma de vivir o su postura con la vida. Se observa con viveza la imagen de la mujer con la manutención por sí misma como en el siguiente fragmento:

Ya las gentes murmuran que yo soy tu enemiga
porque dicen que en verso doy al mundo tu yo.
Mienten, Julia de Burgos. Mienten, Julia de Burgos.
La que se alza en mis versos no es tu voz; es mi voz;
porque tú eres ropaje y la esencia soy yo;
...
Tú eres sólo la grave señora señorona;
yo no; yo soy la vida, la fuerza, la mujer.
...
Tú eres dama casera, resignada, sumisa,
atada a los prejuicios de los hombres; yo no;
que yo soy Rocinante corriendo desbocado
olfateando horizontes de justicia de Dios.
("A Julia de Burgos", *Poema en 20 surcos*, P. R., 1938, p.I)

Así Julia se daba cuenta del abismo hallado entre lo que se ponía ella misma al actuar conforme a la norma social y lo natural de ella misma. Y ella hace frente a eso como ha declarado en su obra.

Igual que la obra "Yo misma fui mi ruta":

Yo quise ser como los hombres quisieron que yo fuese:
un intento de vida;
un juego al escondite con mi ser.
Pero yo estaba hecha de presentes;
cuando ya los heraldos me anunciaban en el regio desfile
de los troncos viejos,

se me torció el deseo de seguir a los hombres.
y el homenaje se quedó esperándome.
("Yo misma fui mi ruta", *Poema en 20 surcos,* 1938, P.R., p.XX)

Este poemario en que concluye sin ajustarse a la norma social, sino con el seguir a "un sentimiento de liberación íntima[1]", resulta que contiene la calidad considerada de establecer la nueva imagen de la mujer moderna.

El poeta puertorriqueño, Manuel de la Puebla, afirma en el número especial dedicado a Julia de Burgos de la revista *Mairena,* que: "... frente a mito del jíbaro, con Julia de Burgos, surge una concepción moderna del ser y de la vida, particularmente en lo que se refiere a la actitud de inconformidad de la mujer; la mujer asume o quiere asumir en la sociedad actual[2]." Por eso, es natural que las obras de Julia llamaron la atención nuevamente en la circulación feminista y se están revalorizando aún más.

También Juan Bosch, ex-presidente de la República Dominicana, escritor y amigo de Julia, estimó a Julia mucho. La ha comparado con otras literatas latinoamericanas en el Congreso Internacional Julia de Burgos celebrado en el año 1992, en Puerto Rico.

> Las mujeres poetas abundan en los países de América de lengua española. Son varias las que han alcanzado puestos elevados en la historia de la literatura de nuestros pueblos, como la chilena Gabriela Mistral, Premio Nobel de Literatura de 1945; la uruguaya Juana de Ibarbourou y la argentina Alfonsina Storni, todas autoras de poemas significativamn ete femeninos porque en ellos quedaron expuestos sentimientos propios de mujeres de Hispano América, pero la calidad poética a que llegaron los versos de Julia de Burgos no había sido alcanzada por ninguna de las mencionadas ni por otra mujer poeta de nuestra lengua[3].

II. Símbolo de la identidad del pueblo puertorriqueño

A continuación hablaremos sobre el aspecto de Julia que simboliza la identidad del pueblo puertorriqueño.

Julia tenía la conciencia firme de ser puertorriqueña y eso se deja ver muy claro

en sus obras. Esta conciencia se ha cultivado por su sentimiento de la unificación con la naturaleza borinqueña. Lo podemos observar, por ejemplo, en su obra "Río Grande de Loíza", a que aprecian mucho como lo más perfecto en sus obras.

> Río Grande de Loíza!...Mi manantial, mi río,
> desde que alzóme al mundo el pétalo materno;
> contigo se bajaron desde las rudas cuestas
> a buscar nuevos surcos, mis pálidos anhelos;
> ...
> Río hombre, pero hombre con pureza de río,
> porque das tu azul alma cuando das tu azul beso.
> Muy señor río mío. Río hombre. Unico hombre
> que ha besado en mi alma al besar en mi cuerpo.
> Río Grande de Loíza!...Río grande. Llanto grande.
> El más grande de todos nuestros llantos isleños,
> si no fuera más grande el que de mí se sale
> por los ojos del alma para mi esclavo pueblo.
> ("Río Grande de Loíza", *Poema en 20 surcos,* 1938, p.III)

Como lo hemos visto, Julia canta su amor a la isla y su sentimiento de compasión por el dolor isleño creado por la sensación de cohesión con la naturaleza de Puerto Rico; incluida como un acto sensual. Ella misma expresó la emoción isleña como si sintiera tristeza por la isla, que ella amaba tanto. También Julia ha contado ese sentimiento en el artículo Puerto Rico en el alma de un niño del periódico *Pueblos Hispanos*. Es el artículo en donde escribió lo que sintió cuando tenía la oportunidad de hablar sobre Puerto Rico, en Cuba, a los niños.

> Qué hermosa es tu tierra, Julia! -comenta Dalia. Nunca olvidaré aquella carretera central, aquel mar tan azul, casi igual al mío, pero especial por qué sé yo qué cosa.
>
> Esas palabras me trasladaron violentamente a Puerto Rico. Pensé, como pensaba Dalia, en la incomparable belleza de aquel manojo de

olas, de brisas y de estrellas constantes que forman la concha de mi tierra, hecha para la alegría de un mundo feliz. Sentí toda la potencia lírica del suelo que me tiró a cantar para los hombres sus esencias más íntimas. Pero tuvo frontera mi éxtasis momentáneo. Frontera de dolor. El dolor de la tragedia colonial de mi pueblo anegó mis sentidos y ya no tuve lecho para el sueño.

-Sí que es hermosa mi islita, Dalia. Sí sólo fuera libre! (*Pueblos Hispanos,* sábado 23 de septiembre, 1944, p.6)

Así tocando aun el tema político, su narración influye a toda la gente, tanto más cuanto que su emoción salió de su sentir espontáneamente con su sensación lírica. Mientras, que en el "Himno de amor a Rusia[4]" o en el "Himno de sangre a Trujillo[5]" son poemas rebeldes, escritos con indignación. Pero como ya ha cambiado la época, sentimos como una especie de dogmatismo restringido por la época.

José Emilio González, quien fue poeta puertorriqueño y dejó mejores investigaciones sobre Julia de Burgos, indicó que :

> También brilla en aquéllos un afán de justicia social: emancipación de la mujer y de los obreros. Julia se coloca en las filas de la revolución que vendrá. Pero el requisito indispensable de ese orden futuro es que el hombre se liberte de su propia desidia, del cómodo estar burgués. Julia no escapa a la ley de la época. La joven que trae de los campos de Carolina un fermento creador acoge rápidamente esas ideas de vanguardia. Pero su poesía no gana mucho con ello. Las doctrinas sociales y estéticas que se baten en los círculos minoritarios exaltan en la adolescente su propensión innovadora; son aprendidas, no innatas. Resultado: se puede llegar a la predicación, a la invectiva. Lo poético se resiente de una subordinación a lo extraño[6].

Sin embargo, esa limitación era algo de la época y podemos decir que la sociedad lo determina. Esto hizo que Julia tenga la conciencia de ser puertorriqueña con vigor al mismo tiempo.

Junto con esta conciencia firme de ser puertorriqueña, no podemos dejar de lado el elemento de la simpatía del pueblo puertorriqueño hacia la vida de Julia. Manuel de la Puebla, cuyas palabras he citado antes, dice:

> Posiblemente, el alejamiento de la isla, la enfermedad y los sufrimientos que tuvo que soportar, y la misma muerte en circunstancias lamentables, en una calle de Nueva York, todo eso ha contribuido al afianzamiento del mito, levantando prontamente en torno a su figura. Aparte de la admiración y el respeto alcanzados por su poesía, ya en vida, en su condición de mujer solitaria, abandonada, sufriente, luchadora y solidaria, se ha mirado la condición de millares y millares de puertorriqueños alejados de la isla[7].

Julia nació en Puerto Rico, como una hija de una familia campesina, en el año 1914. En el año 1934 contrajo matrimonio. Después de trabajar en la Puerto Rico Economical Rehabilitation Agency ejerció el magisterio en la escuela. Al tercer año de casada, se divorció. Luego conoció a un dominicano y pasaron a Cuba, pero se separaron a causa de la oposición de los padres de su amante, eran de la clase alta. Buscando una vida nueva, Julia se mudó a Nueva York en el año 1942. Se casó nuevamente con otro puertorriqueño pero después vivió separada. Ella no sólo trabajó como periodista, sino también ha ejercido varios trabajos; pero nunca ha podido salir de la pobreza. Después del año 1949 Julia se había enfermado. Tenía alcoholismo y sufría del hígado. Por ello, ella entraba y salía del hospital constantemente.

Un amigo, que visitó a Julia antes de un mes de su muerte, comentó:

> No se parecía a ella. Estaba hecha una "bona". Dormía sobre papeles de periódico, figúrate. Aquella hembra que había sido! Yo la visité un mes antes de ella morir. Localicé el "basement". Lo que había era periódicos y una cocinita de esas de gas. Fui a verla por la noche. Me pregunté: Pero cómo esta criatura vive aquí? En otro apartamento vivía una italiana gorda, sucia y borracha que me dijo en muy mal español que Julita no estaba, que hacía tres días que no aparecía. En un pedazo de papel de estraza le dejé una notita. Le decía

que volvería la noche siguiente. Estuvo allí. Se había ido. En el mismo papel me dejó un poema bellísimo. Decía algo así como que presentía su muerte, que ya no era ella[8].

Como lo que ha contado, Julia murió en un hospital de Harlem en el año 1953. Ella fue encontrada inconsciente en la calle de Spanish Harlem sin ninguna identificación y fue trasladada al hospital, donde al poco rato murió. Se le enterró en una fosa común de Nueva York. Después de poco más de un mes su cadáver fue reconocido por su familia y fue trasladado a su provincia natal, Carolina.

En la época que Julia vivió, la sociedad puertorriqueña estaba por presenciar el proceso de liquidación. Ella nació al poco tiempo del comienzo de la dominación estadounidense en la isla y fue una época de cambios drásticos. Su economía pasaba a formar parte de los Estados Unidos. En consecuencia el estilo de vida de la isla poco a poco se fue transformando al estilo de vida norteamericano. Después de los 1930, la industria de azúcar decaía y muchos puertorriqueños emigraban a Norteamérica buscando trabajo para sustentarse. Así se formó el barrio de los pobres en las grandes ciudades, como Nueva York y crearon un grupo racial en el Norte. Bajo estas circunstancias se cuestionaba la búsqueda de la identidad puertorriqueña. Julia apareció en esta época escribiendo su sentir como una humana en sus poemas, con la confianza y la conciencia de ser puertorriqueña, quien vivía con sufrimientos al igual que otros tantos puertorriqueños.

III. Lo político y el literario de Julia de Burgos

Clemente Soto, el poeta borinqueño quien conoce a Julia como compañera del movimiento, contó a la autora en la entrevista del día 6 de Junio de 1992, que Julia siempre ha sido "líder del movimiento libertador de Puerto Rico", y también que asistía al movimiento en Nueva York. Clemente estuvo preso en la cárcel por sus ideas liberales en los Estados Unidos. En el año 1942, cuando salió de la cárcel, él empezó a organizar a los puertorriqueños en Nueva York. :Allí se había encontrado con Julia quien regresó de Cuba.

Su conciencia de ser puertorriqueña conectó con su interés al asunto social inevitablemente. Julia dejó en sus obras reflejadas su interés, mientras se ponía en el

movimiento liberal activamente, como lo que Clemente me ha señalado. Después de mudarse a Nueva York, Julia escribía los artículos que tenían tonos políticos, como periodista en *Pueblos Hispanos;* cuyo propósito era el de "mejorar las relaciones entre las Américas mediante la difusión de las culturas hispánicas[9]." En el Congreso Internacional Julia de Burgos, se ha comentado sobre el tono político de Julia de Burgos, como algo controvertible.

Si tomamos en consideración sus poemas, es cierto que se nota claramente su interés al asunto social en el primer poemario. Por ejemplo, en sus poemas podemos ver que elige como temas la mujer, la raza y la guerra civil española. Pero en su segundo poemario desaparecen casi totalmente estos temas. En este poemario ella habla del amor hermoso. Julia ha contado que pudo escribirlo gracias a lo vivido con su amante dominicano. En el tercer poemario podemos ver su angustia con el destino de sus amores. Expresó aquí su interior, cargada de gran tristeza, y con esto mostró su madurez como poeta.

Julia recibió un premio con el segundo poemario, *Canción de la verdad sencilla,* y lo que se evalúa como el mejor fue *El mar y tú.* Y en los dos últimos poemarios ella no presenta directamente su querella sobre el problema social. Julia era muy activa en el asunto político, teniendo a la vez el dolor íntimo de su vida personal, y el de su ruptura con su amante. Ella ha escrito una carta a su hermana que decía:

> "Trataré de ahogarme en el instante doloroso del mundo para no sentir tan en los huesos mi profunda soledad[10]"

Con esto nos surge una pregunta sencilla; ¿qué importancia ocupaba el asunto político en ella? Sin embargo tenemos que diferenciar esta pregunta con otra que sería: ¿qué influencia tenía realmente Julia en el pueblo, su figura como poeta y sus obras?

No hay duda que el problema social influye inevitablemente en los escritores donde se hallan. Por ello tenemos que evaluar a un escritor relacionándolo con su interés en lo político y en lo social. En el caso de Julia también, no se puede entender su figura entera con solo analizarla como una poeta de amor.

En los últimos años se han hecho unas investigaciones sobre la época en que Julia vivía en Nueva York. Y se han publicado sus artículos y poemas políticos. La familia

de Julia afirmó que iba a hacer públicas sus cartas, que hasta el momento solamente algunos lo podían ver. Imagino que se avanzará más profundamente la investigación sobre Julia. Por eso, en este proceso debemos poner atención en que la cuestión política de la época de Julia, sigue siendo la cuestión en este momento todavía. En otras palabras, tenemos que cuidar de no desfigurar su estimación por la intención política de la actualidad.

En Puerto Rico, aun siendo la minoría, está arraigada tenazmente al movimiento independentista como fuerza política. Bajo esta situación actual, es natural que surja una tendencia que dé énfasis a Julia, en su pensamiento político. Pues ella es símbolo de la identidad del pueblo puertorriqueño. Sobre todo tenemos que considerar ese punto. Porque si se pone demasiada importancia en eso, germina la evaluación según su dedicación al movimiento político; o existe la posibilidad de que Julia sea considerada como activista y desfigure su estimación. Su verdadero valor consiste en que ella expresó su sentimiento sincero nacido de la vida actual con su sensibilidad abundante, aun haciendo obras que mencionen la política. No estamos valorando su actividad política sino su forma de expresar su sentimiento sobre la política.

Julia misma cuenta en su obra "Poema para mi muerte":

> Como habré de llamarme cunado sólo me quede
> recordarme, en la roca de una isla desierta?
> Un clavel interpuesto entre el viento y mi sombra,
> hijo mío y de la muerte, me llamarán poeta.
> (*El mar y tú,* San Juan de Puerto Rico, Puerto Rico Printing and Publishing Company, 1954, p.112)

Fernando Alegría dice en su obra *Literatura y revolución:*

> La revolución se beneficia más con la grandeza de sus obras que con todas las declaraciones, manifiestos y proclamas de los funcionarios de la propaganda[11].

Es cierto que las obras literarias que penetran en nuestro corazón tienen más vigor.

Mientras que uno se ocupe en las actividades políticas con fervor en realidad no siempre tiende a un sentido político. Al mismo tiempo podemos decir lo contrario. Sin pensarlo uno actúa teniendo un papel político. Esto nos enseña la importancia del papel político en la sociedad y puede estar separada con la intención política de uno.

Para no desfigurar la significación de Julia por la intención política de ahora, debemos evaluar su obra también en la sociedad puertorriqueña con el criterio de su posición social de Puerto Rico como literata. Ella tuvo un papel importante porque demostró el sentimiento y la existencia del pueblo puertorriqueño, expresando su emoción tomada de la vida real con su sensibilidad.

Para terminar podemos decir que lo que nos atrae de Julia lo enuncia Fernando Alegría al decir : "hace su revolución y la hace en su obra y con su obra, vale decir, con su vida[12]".

NOTAS

1) Julia de Burgos, "Yo misma fui mi ruta", *Poema en 20 surcos,* Puerto Rico, 1938, p.XX.
2) Manuel de la Puebla, "Julia de Burgos como mito", *Mairena,* "Homenaje a Julia de Burgos", VII, Núm. 20, 1985, Puerto Rico, p.85.
3) Juan Bosch, "Julia de Burgos, estrella refulgente en la poesia de América", Ponencia presentada por Juan Bosch, Ateneo Puertorriqueño, Puerto Rico, 1992, p.1.
4) *Julia de Burgos: Periodista en Nueva York,* Puerto Rico, Ateneo Puertorriqueño, 1992, (Recopilación y estudio preliminar de Juan Antonio Rodríguez Pagán), p.34.
5) *Ibid.,* pp.27-28
6) José Emilio González, *Obra poética,* Puerto Rico, Instituto de Cultura Puertorriquña, 1961, p.13.
7) Manuel de la Puebla, p.85.
8) Juan Antonio Rodríguez Pagán, *Julia de Burgos. Tres rostros de Nueva York y un largo silencio de piedra,* Humacao, Puerto Rico, Edit. Oriente, 1987, pp.75-76.
9) Juan Antonio Rodríguez Pagán, *Julia de Burgos...periodista en Nueva York,* Puerto Rico, Ateneo Puertorriqueño, 1992, p.3.
10) Yvette Jiménez de Báez, *Julia de Burgos, vida y poesía,* San Juan de Puerto Rico, Editorial Coquí, 1966, pp.57-58.
11) Fernando Alegría, *Literatura y revolución,* México, Fondo de Cultura Económica, 1971, p.26.
12) *Ibid.,* p.29.

Pablo Neruda: La Imagen Mítica de "Alturas de Macchu Picchu"

Miyoko UMEDA*

O. Introducción

En la actual perspectiva socio-política de América Latina, pareciera que finalmente el sueño Bolivariano de la Unidad Latinoamericana se acerca a esta etapa, a pesar de la heterogeneidad de sus raíces histórico-sociales.

Muchos hombres de este continente, cada uno en su área, han divagado fantasiosas ideas de unidad americanista, desde el mismo momento en que se iniciaron los vientos libertarios, a fines del siglo XVIII. El gran obstáculo para esta digna aspiración de amor humano, fue y sigue siendo, la divergencia cultural, provocada por las notorias diferencias histórico-sociales, lo cual ha conducido a nefastas revoluciones político-sociales, que en muchos casos, han destruido hasta sus raíces las aspiraciones de unidad y progreso, en estos aún jóvenes países latinoamericanos.

Lo anterior se ha reflejado en la actividad literaria, denotando la carencia de una real identidad latinoamericana.

Uno de los principales representantes de este afán, ha sido el chileno Pablo Neruda, poeta que luego de manifestar una clara tendencia surrealista en sus comienzos, experimenta posteriormente una profunda conversión poética y personal, como consecuencia de su directa participatcón en una de las más sangrientas revoluciones del mundo hispanoamericano de este siglo: La Guerra Civil Española.

Aquí observamos una profunda metamorfosis desde el hombre individual al hombre colectivo, basado en una dualidad del concepto de la muerte.

En este presente trabajo intentaremos demostrar la importancia de la imagen mítica del hombre histórico y colectivo, en la prosecución de la vida eterna, más allá de los límites de la muerte material, basada en un poema inspirado precisamente en la búsqueda de la identidad del homble colectivo latinoamericano: ALTURAS DE

※うめだ　みよこ（京都外国語大学非常勤講師）

MACCHU PICCHU

1. Canto General

En 1950 Neruda publicó el *Canto General*, el más extenso y discutido de sus libros de versos, y engloba la mayor parte de la obra poética de Neruda por espacio de once años, los que van de 1938 a 1949, los más agitados y cruciales en su larga vida de poeta.

Una obra trasciende la visión política y se transforma en el gran emblema con que cuentan los pueblos latinoamericanos y de todo el mundo, sometidos a la humillación y al sometimiento, privándoles del tan vital derecho a expresar su idiosincrasia y su identidad con la tierra de sus orígenes.

En algún sentido, *Canto General*, logra también una concepción de unidad latinoamericana, siguiendo el sueño del General Bolívar (a pesar de que prácticamente no hace mención de él en toda la obra, quizás por un afán de darle más fuerza a la búsqueda de la Identidad Colectiva evidenciada en "Alturas de Macchu Picchu", donde privilegia la imagen anónima de tantos Juanes, más que la imagen individualista, excluyente), logrando así; la creación de una idiosincrasia unificadora del hombre colectivo latinoamericano, conformando al final, una sola gran nación. Concepto ineludible ante cualquier intento por realizar un análisis de la identidad de cualquier pueblo latinoamericano en particular. Se engrandece así, el poder de la colectividad anónima, por sobre las individualidades.

De esta manera, esa multitud indígena, y posteriormente masa obrera, que había vivido constantemente al margen de la historia; en *Canto General* aparece fuerte, orgullosa, y a veces incluso heroica, construyendo piedra a pidra la verdadera nacionalidad latinoamericana.

Su reconocimiento al compromiso de "hermano", con todo su "pueblo innumerable", más allá de los límites de una América dividida geográficamente; lo asume en plenitud, entregándole su respuesta, una respuesta que transpasa las fronteras de la muerte física, reencontrándose en "El Fugitivo" (1894), con la muerte verdadera y fecunda de "Alturas de Macchu Picchu", es la invitación a renacer juntos, en la vida eterna. Y lo expresa así.

Soy pueblo, pueblo innumerable

Tengo en mi voz la fuerza pura
para atravesar el silencio
y germinar en las tinieblas.
muerte, martirio, sombra hielo,
cubren de pronto la semilla.
y parece enterrado el pueblo
Pero el maíz vuelve a la tierra.
Desde la muerte renacemos[1].

Desde nuestro punto de vista, consideramos que la visión mitificadora e histórica, se debe observar en *Canto General*, como dos elementos complementarios y no enfocarlos bajo un análisis irreconciliable, lo cual se contrapone a lo señalado por Yurkievich[2]. Pues, a pesar de que la posición de ambas poéticas se ubica en las dos puntas del espectro, Neruda se encarga de hacernos ver el proceso mítico que regresa al útero de los orígenes, no sólo como una visión nostálgica al pasado, sino que la redefine con un mitema[3] basado en el contexto histórico-social de un trozo de la historia latinoamericana. Transformando la realidad chilena y latinoamericana desde la luminosidad del mito, mezclándose ambos en las entrañas de la cosmogonía latinoamericana.

De tal manera, apoyando el concepto de Juan Villegas[4], quien reconoce la importancia del mito, aunque sin desconocer el rol del contexto histórico-social, consideramos que luego de analizar *Canto General*, el ascenso final a la muerte celestial verdadera, es precisamente una consecuencia de la "fusión Mito-Historia", siendo ambas visiones no solo inseparables una de la otra, sino que además son interdependientes entre sí, permitiendo la perpetuación de este mitema latinoamericano, más allá del tiempo, de la muerte, y de una realidad en particular, adquiriendo además el profético carácter de anunciar la soñada unidad latinoamericana, situación que ya parece ser una hermosa realidad.

2. "Alturas de Macchu Picchu"

2.1 Análisis Estructural del Primer y Segundo Descenso-Ascenso

El tema central del segundo canto de *Canto General*: "Alturas de Macchu Picchu"[5], es el de la muerte: se trata, primero, de una larga meditación generadora de

angustia, con una carencia absoluta del sentido de la vida humana, demostrando un ánimo de indiferencia y extravío existencial, adoptando una actitud regresiva, hacia los tiempos pretéritos, todo lo cual deforma la estructura poética de esta primera parte que concluye en el verso del poema V[6].

De ahí la dificultad que opone a su asimiento, por el espíritu, la estrofa inicial del poema:

> Del aire al aire, como una red vacía...

A la evocación de esta primera caída, se pondrá el movimiento de ascenso, que comienza con el principio del poema VI:

> Entonces, en la escala de la tierra he subido
> entre la atroz maraña de las selvas perdidas
> hasta ti, Macchu Picchu...

Posteriormente, vienen seis poemas (del VII al XII), los que tienen relación directa con Macchu Picchu, el lugar desde donde el poeta establece la conexión entre el pasado, presente y futuro de Latinoamérica, avanzando desde un "Pretérito", en el cual se expresan los procesos referidos a los olvidados habitantes de Macchu Picchu, a un "Presente", en el que se expresa el acaecer del "Yo" lírico, y, por último, mediante el uso de "Imperativos", al "Futuro inmediato", donde confluyen los humildes de Macchu Picchu, conducidos por la palabra "Luminosa" y "Plena de Confianza" del poeta "Formal", otorgándole "Sentido y Permanencia" a la vida humana[7].

Basado en el concepto de Hernán Loyala[8], quien ha profundizado más en el análisis estructural de este doble Descenso-Ascenso, el poema se divide en dos sistemas de autorepresentación:

1) El hablante en pasado, narrando sus propias memorias (poemas I-V).
2) El hablante en presente, narrando su experiencia actual (poemas VI-XII).

Ambos espacios se entrecruzan simultáneamente, ya sea: a) rompiendo o b) unificando, la presencia del autor.

La ruptura (a), se produce al comienzo de (1), cuando el hablante se nos presenta confuso y extraviado, y cuando nuevamente asciende a una muerte falsa; y también en

(2), cuando se prepara a descender al encuentro verdadero con la muerte fecunda.

La unificación (b), se produce cuando el hablante asciende luego de haber descendido a buscar a sus hermanos desde el pasado, para incorporarlos a un presente de colectivo renacimiento.

A) Del aire al aire como una red vacía
iba yo entre las calles y la atmósfera llegando y despidiendo,
en el advenimiento del otoño la moneda extendida
de las hojas, y entre la primavera y las espigas
lo que el más grande amor, como dentro de un guante
que cae, nos entrega como una larga luna. (poema I)

Correspondería al "Extravío inicial" y al estado de ruptura al comienzo (la).

B) Hundí la mano turbulenta y dulce
en lo más genital de lo terrestre.

Puse la frente entre las olas profundas
descendí como gota entre la paz sulfúrica
y, como un ciego, regresé al jazmín
de la gastada primavera". (poema I)

Corresponde al primer despertar de la conciencia que adopta una la forma de revelación poética al Yo en pasado en su primer descenso a las profundidades de un pasado que no le devolverá su ansiando encuentro con su Pueblo, y su ascenso posterior al mundo externo derrotado (la).

C) No tuve sitio donde descansar la mano
y que corriente como agua de manantial encadenado,
o firme como grumo de antracita o cristal,
hubiera devuelto el calor o el frío de mi mano extendida
Qué era el hombre?... (poema II)
EL SER como el maíz se desgranaba en el inacabable

granero de los hechos perdidos, de los acontecimientos
miserables, del uno al siete, al ocho,
y no una muerte, sino muchas muertes llegaban a cada uno:
cada día una muerte pequeña, polvo, gusano lámpara
que se apaga en el lodo del suburbio, una pequeña muerte de alas gruesas...
todos desfallecieron esperando su muerte, su corta muerte diaria... (poema III)

Aparece por primera vez el concepto de muerte pequeña, muerte de suburbios, muerte de hombres pequeños, la que termina junto al final de la vida terrenal, o en los fracasos y desilusiones de la rutina diaria. Es la abrumante respuesta que el hablante recibe, luego de haber descendido a las profundidades de la historia del hombre, sin haber logrado su anhelada respuesta. Correspondería al concepto de ruptura de Yo en pasado (la).

Según el concepto de Loyala, el desarrollo del primer descenso implica: A) Un extravío originario; B) Un viaje a la profundidad de la vida-muerte en la naturaleza; C) Un retorno desde las profundidades. En la etapa del descenso, el secreto que en definitiva el hablante refiere haber descifrado es que en la naturaleza la muerte no existe: la "muerte" allí forma parte de la dialéctica de la vida dominante, es sólo factor y condición de la Vida.

Impostando una analogía fundada sobre el peculiar léxico del poema mismo, sería posible hablar aquí de verdadera muerte en la naturaleza (la fórmula será usada en el poema VII del texto, como equivalente a la "verdadera muerte en la historia") para oponerla a las formas visibles de la falsa muerte en el ámbito de la sociedad humana.

LA PODEROSA muerte me invitó muchas veces:
era como la sal invisible en las olas,
y lo que su invisible sabor diseminaba
era como mitades de hundimientos y altura
o vastas construcciones de vientos y ventisquero. (poema IV)

La poderosa muerte se opone a la pequeña muerte dentro del concepto general de la falsa muerte, representando el fin de la vida material: es decir, la muerte física; a diferencia de la pequeña muerte, representada por los pequeños fracasos o sueños no

realizados de la rutina diaria. A través de esta oposición: Poderosa muerte-Pequeña muerte, se introduce el problema de la Muerte, como una experiencia tendencialmente comunitaria que la sociedad moderna resiste, y trata de vivirla en soledad, marginándola a un problema individual de cada ser humano. Esta situación es posible identificarla durante toda la visión rupturista del Yo en pasado (la-B).

Este rescate del pasado del Yo y de su continuidad explica la presencia misma, en el conjunto del poema, de una zona I que es como la prehistoria de la experiencia central vinculada a las ruinas de Macchu Picchu. La zona I se justifica así como contrapunto dialéctico frente a una zona II que acentúa en cambio la dimensión de ruptura, la conquista de nuevo ser. Aquí, la posibilidad de superar este nuevo extravío determinado por el dominio de la Poderosa-Pequeña muerte será posible mediante un nuevo viaje a las alturas-profundidades de la Verdadera Muerte. Esta parte comienza en el poema VI, donde el ascenso a Macchu Picchu adquiere una dimensión salvadora hacia conocimiento del ser humano en la nueva realidad pretérita de Neruda (1b-C).

> Entonces en la escala de la tierra he subido
> entre la atroz maraña de las selvas perdidas
> hasta ti, Macchu Picchu.
> Alta ciudad de piedras escalares,
> por fin morada del que lo terrestre
> no escondió en las dormidas vestiduras...
> Madre de piedra, espuma de los cóndores.
> Alto arrecife de la aurora humana... (poema VI)

A medida que el hablante asciende la tierra hacia esta alta ciudad de piedras escalares, va reflexionando sobre el pasado inexistente y por aquellos muertos que construyeron piedra por piedra su morada (2a-B) :

> Cuando la mano de color de arcilla
> se convirtió en arcilla, y cuando los pequeños párpados se cerraron
> llenos de ásperos muros, poblados de castillos,
> y cuando todo el hombre se enredó en su agujero,
> quedó la exactitud enarbolada:

el alto sitio de la aurora humana:
la más alta vasija que contuvo el silencio:
una vida de piedra después de tantas vidas. (poema VII)

En este ascenso mítico que Neruda va realizando hacia el encuentro real con su Pueblo olvidado en las penumbras de la historia, una agitada emoción se apodera de su espíritu al vislumbrar la anhelada posibilidad de verles cara a cara. La Muerte Fecunda le ha abierto finalmente las puertas para que se transforme en el guía del ascenso colectivo de sus hermanos sin voz, a la vida eterna (2b-C) :

Sube conmigo hermano americano... (poema VIII)

Esta invitación a ascender, se propone a través de los secretos de la geografía latinoamericana, para llegar finalmente al amanecer de un presente compartido (2b-C) :

Ven a mi propio ser, al alba miá... (poema VIII)

El acto de presentizar a su Pueblo pretérito, se realiza ante la inescrutable visión de un pasado sin tiempo ni espacio (2a-A) :

Piedra en la piedra, el hombre dónde estuvo?... (poema X)

Esta interrogante enfrenta la posibilidad de una asimilación entre las miserias existenciales del hombre actual y del hombre de Macchu Picchu (2a-B) :

Fuiste también el pedacito roto
de hombre inconcluso, de águila vacía
que por las calles de hoy, que por las huellas,
que por las hojas del otoño muerto
va machacando el alma hasta la tumba?... (poema X)

EL rescate de su Pueblo olvidado, constituido por hombres históricos, concretos, no se realiza solo con sus armas y su nobleza; sino que también con su hambre y sus

humillaciones (2b-C) :

> Déjame olvidar, ancha piedra, la proporción poderosa
> la trascendente medida, las piedras del panal,
> y de la escuadra déjame hoy resbalar
> la mano sobre la hipotenusa de áspera sangre y cilicio... (poema XI)

Finalmente, de la misma manera como el paso predominante de la primera parte (la) fue el de la Naturaleza hacia la Historia; en la segunda parte (2b) es el pasaje del Mito a la Historia.

Este punto crítico del paso del Mito a la Historia, determina que Neruda pueda ver y nombrar a su hermano dormido (la-AB y 2b-C) :

> veo el antiguo ser, servidor, el dormido
> en los campos, veo un cuerpo, mil cuerpos, un hombre, mil mujeres,
> bajo la racha negra, negros de lluvia y noche,
> con la piedra pesada de la estatua;
> Juan Cortapiedras, hijo de Wiracocha,
> Juan Comefrío, hijo de estrella verde,
> Juan Piesdescalzos, nieto de la turquesa, (poema XI)

Llegamos así al momento culminante del Poema, por cuanto el poeta ahora ya lejano desde aquellos fríos días de confusa soledad en su amado Temuco, rodeado de aquellas milenarias araucarias que vieron alguna vez fulgurar al orgulloso pueblo de la tierra araucana, para después verle callar en un silencio, repuso sus ilusiones al cobijar en su savia la distante figura del niño-poeta que prometía devolverle algún día, la anhelada voz a esos callados hombres pretéritos que solo podían gemir junto al viento, su triste lamento de raza oprimida. Así, el poeta les presta solidariamente su voz profética (2b-C) :

> Sube a nacer conmigo, hermano
> Dame la mano desde la profunda
> zona de tu dolor diseminado.

No volverás del fondo de las rocas.
No volverás del tiempo subterráneo...
Mírame desde el fondo de la tierra,
labrador, tejedor, pastor callado:
contadme todo, cadena a cadena,
eslabón a eslabón, y paso a paso...
Acudid a mis venas y a mi boca
Hablad por mis palabras y mi sangre. (poema XII)

Así, se logra finalmente el ascenso definitivo, logrando la creación de una conciencia de historia latinoamericanista, que reclama su derecho a la creación de una Latinoamérica diferente. La interpretación poética de la historia de su Pueblo, basado en el trasfondo biográfico del poeta, quien logra amanecer en un presente fecundo y verdadero.

De acuerdo a lo ya expuesto, y con el objeto de resumir y entregar de una manera más didáctica y comprensible, la oposición entre ambas partes de "Alturas de Macchu Picchu" a que nos hemos referido, puede resumirse en el siguiente esquema:

	ZONA 1 (poemas I-V)	ZONA 2 (poemas VI-XII)
Forma Poética	Deformalización	Formalización
Contenido de la Vida Humana	Falta de Sentido	Tiene Sentido y Permanencia
Tiempo "Yo"	Pasado	Presente
Tiempo "Otros"	Presente	Pasado
Carácter "Yo" Inicio: Final	Extraviado: Extraviado	Extraviado: Reencontrado
Temple de Animo	Indiferencia-Angustia	Luminosa Confianza
Carácter "Otros" Inicio: Final	Muertos: Muertos	Muertos: Vivos
Estructura de las 3 Etapas	Extravío-Muerte-Extravío (A) - (B1) - (A)	Extravío-Muerte-Vida (A) - (B2) - (C)
Relación de Fecundo, (B1) : (B2)	(B1) es el Descenso Infecundo, que lleva a la Muerte Falsa	(B2) es el Desceso que lleva a la Muerte Verdadera

2.2 La Fusión Mito-Hombre Colectivo

De acuerdo al análisis estructural observado previamente, hemos evidenciado la subdivisión en dos partes de este poema. En el proceso de extravío de la primera parte, como una continuación del extravío vivido en las primeras *Residencia en la Tierra*[9] (1925-1935), aunque menos confusa, en el sentido que a diferencia del período residenciario, aquí Neruda busca la superación de su soledad personal externa que le provoca desesperada angustia interna, a través de un fenómeno Mitificador del Hombre Histórico individual. Este proceso de Mitificación[10], está dentro del esquema de intentar buscar el origen del hombre histórico, en el pasado de la América Precolombina, regresando incluso al inicio de todos los tiempos. Pero, esta búsqueda inicial en las profundidades, no logra rescatar a sus hermanos de la muerte histórica.

Nuestra interpretación sobre este fallido descenso, el cual ocupa prácticamente toda la primera parte de este poema, lo explico por dos motivos:

a) El intentar descender a las profundidades cosmogónicas basado en el Hombre individual carece de la trascendental universalidad del Hombre Colectivo, por cuanto, el proceso de Mitificación del Hombre Individual no logra el objetivo mayor de Fusión Mito-Hombre Histórico Individual. Este proceso de Fusión, sólo es posible lograrlo con el Hombre Histórico Colectivo, elemento clave para evitar la confusión: Soledad-Angustia Existencial-Hombre Histórico Individual, triada que tiende fatalmente a constituirse, cuando se encuentran estos tres elementos por separados. La formación de esta triada llevaría irreparablemente a la Muerte Falsa, ya sea en el contexto rutinario de la Muerte Pequeña, o en la Muerte Grande del ser material.

De acuerdo al concepto anterior, Mito y Hombre Histórico Individual solo podrían existir separadamente sin poder fusionarse en el Mitema salvador de la Vida Eterna.

b) Esto impediría que el Mito salvara las barreras del pasado imaginario en el que originalmente se encuentra, alejándose irremediablemente del presente histórico, a su vez, el hombre Histórico Individual, carecería de la posibilidad cosmogónica de traspasar la barrera de la Muerte Falsa, para conectar su pasado histórico con el presente concreto, y con el profético futuro.

Se concluye por tanto, la tendencia existente en los primeros 5 poemas, a que el Extravío (provocado por la Soledad Externa y la consecuente Angustia Interna), sumado a la incapacidad para emerger desde el Ser Individual al Ser Colectivo,

conduzcan irremediablemente a la Muerte Falsa Horizontal, sin poder lograr el ansiado ascenso hacia la Salvadora Muerte Verdadera.

En oposición a lo planteado en el punto anterior, en la segunda parte de este poema, la ansiada fusión se logra finalmente, porque a diferencia de la primera parte, Neruda comprende la necesidad de dejar el "Yo" Personal disociador, egocéntrico, y centrípeto, reemplazándolo por un ser colectivo, unitario y centrífugo, lo que le permite fusionarlo con el proceso Mitificador Andino[11].

Esta fusión impedirá por lo tanto, la formación de la triada: Soledad-Angustia-Ser Individual, salvando la barrera de la Muerte Falsa, y proyectando al Hombre Histórico Colectivo en un Ascenso Vertical, desde las profundidades del pasado muerto, hasta el eterno presente de las Cumbres del Urubamba, en las Alturas de Macchu Picchu.

3. Conclusión

La importancia de la idea mitificante, nos ha proporcionado los elementos necesarios para descifrar la importancia del proceso humanista en el hombre colectivo. Pero, esta teoría unificadora de la Fusión Mito-Hombre Colectivo, tiene, según mi parecer, otro elemento fundamental para poder explicar su rol en la génesis de la identidad del hombre latinoamericano.

La idea del Mito Andino nos proporciona el fundamento para plantear la importancia de Neruda para elegir aquellos símbolos míticos, que identifican en propiedad a aquellos que representan la mitología regional de este continente.

Ahora bien, si este logro de Neruda, fue o no intencional, o tan sólo una afortunada casualidad, como lo afirma Larrea en su dura crítica[11] al poeta chileno, es una duda que pretendemos dejar abierta para un próximo trabajo al respecto. Por lo pronto, destacamos esta situación, para señalar que esta comunión Mito Andino-Hombre Colectivo Latinoamericano, es la que permite justamente la eterna petrificación de la rosa Indígena de este continente, inundando con su original aroma lo más recóndito de esta América morena.

Es precisamente este logro de Neruda, el que nos permite indicarlo como el Primer Gran Canto Poético, genuinamente latinoamericano, permitiéndole permanecer más allá de los tiempos y de un determinado espacio, como un faro que ilumina cada vez con mayor intensidad, la anhelada unidad.

Notas

1. Pablo Neruda, *Canto General*, "El Fugitivio", p. 343.
2. Saúl Yurkiévich, "Mito e Historia: Dos Generadores del Canto General", p. 201.
3. El término "mitema" es para nombrar la unidad básica de una estructura mítica, según Villegas. ("Héroes y Antiéroes en el Canto General", pp. 139-151.)
4. Juan Villegas, "La Mitificación del Prolerariado en Canto General", pp. 83-93. : "Nuruda, dentro de su concepción marxista no puede dejar de considerar a integrantes del proletariado en una galería de héroes y recurre a procedimientos de mitificación heroica para conseguir su propósito fundamental. En síntesis, les concede una categoría de héroes míticos, mítico-heroica, a través de la magnificación de los mismos y asignándoles relaciones con mitemas característicos del mundo mítico".
5. E. M. Santí, *The poetics of Prophecy,* pp. 162-164. :Nuruda ignora la ortografía tradicional y escribe el nombre del lugar con cuatro "c" en vez de tres. La letra extra de la primera palabra (Macyu) proporciona una tipografía simétrica y el nombre alterado refleja el equilibrio cósmico.
6. Gastón Carrillo, "La Lengua de Pablo Neruda : Análisis de Alturas de Macchu Picchu", p. 301.
7. *Ibid,*. pp. 297-310.
8. Hernán Loyala, "Alturas de Macchu Picchu" pp. 159-170. Loyala ha desarrollado en varios trabajos su lectura de la obra nerudiana como modo de autorreferencia del ser, noción a través de la cual se puede identificar un conjunto de autorretratos, autorrepresentaciones del propio autor, a lo largo de la poética.
9. El análisis minucioso de Amado Alonso *(Poesía y Estilo de Pablo Neruda)* demostró las constantes estilísticas del libro, definiendo su núcleo significativo en la angustia que la poeta le produce un mundo que se destruye, una naturaleza, no en transformación perpetua, sino en degradación y destrucción perpetua.
10. Neruda afirma "el poeta debe ser una superstición, un ser místico", en la carta a su amigo Héctor Eandi (Noviembre 21. 1928), citado por "Vox Dei", Alexander Colemen, p. 80.
11. El poemario contiene abundantes referencias a sujetos relacionados al mundo mítico andino, y el sistema metafórico y simbólico ha sido discutido con detalles en nuestra tesina. Ver Miyoko Umeda, "La Muerte Mítica de Pablo Neruda y la Identidad Latinoamericana", pp. 52-70.
12. Juan Larrea, "Piedra de Toque". en *Del Surrealismo a Macchupicchu,* pp. 133-223. Larrea critica a Neruda por su descuido de la vida indígena contemporánea y el uso de la herencia y la imagen españolas mientras también lamenta la Conquista.

Bibliografía

Alonso, Amado: *Poesía y Estilo de Pablo Neruda,* 4a. ed., Buenos Aires, Editorial Sudamericana, 1968.

Antezana, Jorge García: "Intertextualidad Mítica en Alturas de Macchu Picchu", *Revista de Crítica Literaria Latinoamericana,* Lima, Latinoamericana Edit., 1er, y 2do. Semestre de 1985.

Carillo, Gastón: "La Lengua Poética de Pablo Neruda: Análisis de Alturas de Macchu Picchu", *Boletín de Filología,* Tomo XXI, Ed. de la Univ. de Chile, 1970, pp. 293-332.

Coleman, Alexander: "Neruda: Vox Dei", *Modern Critical Views,* New York, Chelsea House, 1988, pp. 75-81.

Cros, Edmond: "Análisis del Poema IX del Canto II del Canto General", *Anales de la U. de Chile* (157-160), 1971, pp. 167-175.

Felstiner, John: *Translating Neruda: The Way to Macchu Picchu,* California, Stanford, 1980.

Goic, Cedomil: "Alturas, de Macchu Picchu: la torre y el abismo", *Anales de la U. de Chile* (157-160), 1971, pp. 153-165.

Larrera, Juan: *Del Surrealismo a Machupicchu,* México, Joaquín Mortiz, 1967.

Loyala, Hernán: "Alturas de Macchu Pichuu", *Nuevas Aproximaciones a Pablo Neruda,* México, Fondo de Cultura Económica, 1987, pp. 159-170.

Montes, Hugo: "Acerca de Alturas de Macchu Pichhu", *Mapocho,* Tomo II, Santiago, Ed. Universitaria, 1964, pp. 202-209.

Montes, Hugo: *"Macchu Pichhu en la Poesía de Pablo Neruda,* Santiago de Chile, Zig-Zag, 1985.

Neruda, Pablo: *Obras Completas,* 3a. ed., Buenos Aires, Losada, (I) 1967, (II) 1968.

Pring-Mill, Robert: *Preface Neruda,* The Heights of Macchu Pichhu, New York, Farrar, Straus & Giroux, 1967.

Rodríguez Fernández, Mario: "El Tema de la Muerte en Alturas de Macchu Picchu", *Anales de la U. de Chile* (131), 1964, pp. 23-50.

Santí, Enrico Mario: *The Poetic of Prophecy,* Itaca, Cornell University Press, 1982.

Villegas, Juan: "Héroes y Antihéroes en el Canto General", *Anales de la U. de Chile* (157-160), 1971, pp. 139-151.

Villegas, Juan: "La Mitificación del Proletariado en el Canto General", *Mester,* vol. IV, Los Angeles, U.A., The University of California, abril de 1974, pp. 89-93.

Yurkiévich, Saúl: "Mito e Historia: Dos Generadores del Canto General", *Pablo Neruda,* Madrid, Taurus, 1986.

スペイン語動詞におけるアスペクトの構造に関する一考察
—構造主義的観点より—

米田富彦※

0. はじめに

動詞は動作や行為を表すと同時に「時」をも表している。動詞が物事の動作や行為を叙述するのに、現代諸言語では、「過去・現在・未来」と客観的に時間軸の上で動作や行為についての点分あるいは区分を指呼して表現されている。これが自然時間—TIMEの概念に対する言語時間「時制」—TENSEの概念である。ここで我々が注意しなければならないことは、各々の言語研究における文法用語の概念の基本的な把握があげられる。言語には言語の特徴がある。その特徴をよく把握することが必要である。そこで、時制の発達とその助動詞の用法に特徴を持つ。分類上特徴的な座標に位置する英語の文法（孤立語的、助動詞の発達等による迂言的な時制・法の表現方法）を基礎的に以てして各言語の文法をとらえがちな我々は、やや硬直した態度を以てこのアスペクトの概念について臨んでいる場合が多い。義務教育で、英文法を学んだ我々は、日本語やその他の外国語においてさえ、「英語の文法概念」を以て何らその対象の言語の持つ独自性について彼我の相違点を比較考察することなく、単純に英文法での用語とその概念を当てはめて処理してしまっている場合が普通である。しかし、元来、英語も属するインド・ヨーロッパ諸言語（以下、「印欧諸語」）においては、話者にとって、客観的に時間を見る時制の概念よりもむしろ主観的に動作・行為自体の「完了か未完了か」を問う「アスペクト」の概念の方が本来、優越的であった。(1)

アスペクトは日本語では、「相」と訳され、用語の使用上、少しややこしいところがある。それは、一般的な意味では、動詞に表現されている行為自体に着目し、その行為自体が完了したのか、未だ完了していないのかという話者の認識の二元的な弁別を問題とするような純粋な「主観的な相」と使用する動詞

※よねだ　とみひこ（学校法人聖パウロ学園光泉中学・高等学校）

における語彙論的な観点より「完了／未完了」を基本としたそれぞれの動詞自体のもつ意味上の性格、例えば、継続的、進行的、起動的、反復的等の各弁別的な概念で以てアスペクトを分類する「客観的な相」の二つに分類できる。日本語を基本にしてこのアスペクトの概念を概略して説明すれば、動詞の意味において「時間」に関する表現は、単純に時間軸（タイム）にとらえて過去・現在・未来として客観的にとらえていると思いがちであるが、これは「時」（ジ）のみを問うものであり、「間」（カン）のことは忘れられてしまっている。日本語には「時間」という表現があるのではないだろうか。この「間」のことについて問うところにアスペクトがあるのである。

ここでは、純粋に「主観的な相」は“Aspect”（アスペクト：「相」）、「客観的な相」は“Aktionsart”（アクツィオーンスアルト：独語そのままを使用して「動作様態」）といわれる。「アスペクト」の研究において、この用語と概念の使用上の混乱（「アスペクト＝相」と「アクツィオーンスアルト＝動作様態」を分けて考えない見方）もあるので、注意を要する。

「相」の概念は、印欧諸語（古典諸語）において、動詞の文法範疇（法、時制、態、人称、数等の必ずその言語内において文法上、表現しなければならないきまりごと）であり、その活用形態（Inflexion）に明確に見いだされていたものであるが、現代諸語では、時制の形態にとって代わられ、スラブ諸語（ロシア語、ポーランド語等）を除いて、動詞の活用よりも消えてしまっている。即ち、文法範疇には見られないということになる。

特に、スペイン語動詞の研究においては、「相」の概念は、動詞の活用形態に明確に表現されないところから、全く「時制」の概念に取って代わられて衰退・消滅してしまったものと考えられ、その存在を否定する意見が多い。しかし、形態上に表現されないというだけの理由や文法範疇に取り決められていないという理由で、その存在自体を否定するのは容易であり、意味論、統語論等よりの各言語学的な観点からのアプローチが無視されていいものであろうか。言語とは、一面より見れば一面よりからしか見えず、他の面があることが分からなくなったり、とにかく硬直的にならざるを得ないことが起こりがちである。スペイン語は印欧語に属する言語である。印欧語に属するスペイン語において、印欧語のアスペクトの根本的な概念は現在の文法範疇の根源になることはあっても、元から消滅してしまうものとは考えられない。印欧語の文法範疇であっ

た「アスペクト」の概念が継続しているものならば、それが、現代スペイン語においてどのような言語表現において見いだし得るものなのかということ、即ち、形態論的に表現されなくとも（活用形態に表れずとも）、意味論的には見いだしうるということを明確にしたい。

方法論的には、従来、スペイン語の動詞研究については、通時的（歴史的＝発達史的）観点より述べられることがその大半であったが、英語学、仏語学、独語学と比べいわゆる現代的な言語学のアプローチがあまりなされていないことがある。ここでは、オーソドックスに構造主義的観点からの試みをおこなったものである。

1. “Aspect” と “Aktionsart”

“Aspect”という用語について

長らく、研究上、その用語法において混同されてきた両者の意味をもう一度とらえなおし、明確に一線を画して本来の意味をハッキリとさせたい。

“Aspect” は元来、スラブ語及びギリシア語の研究において用い始められたものである。“Aspect” という語自体もロシア語の “wid”（「視界」、「視野」、「眺め」）という語の翻訳借入である。“wid” という語は、元来、ロシア語文法において動詞の体（アスペクトのことをロシア語や他のスラブ諸語の文法では「体」という）の対立を意味する「完了体」と「不完了体」に通ずる文法用語であった。“wid” もギリシア語の “eidos”（「外形」）の翻訳借入である。“eidos” という語については、ギリシアの文法家Dionysios Thraxによって初めて使用され、ギリシア語の諸動詞の内における単純動詞と派生動詞とを区別するためのものであった。“eidos” の翻訳借入語の “wid” はスラブ語研究に導入され、ギリシアの文法家Dionysios Thraxの用いた同じ概念と意味とをもって使用された。1617年には、M. G. Smotrickij “Gramatika slovenskija pravil' noe sintagma”（“Gramática eslovea de sintaxis sucinta”）の中に “wid” が初出した。その後、1827年にN. I. Greč “Prostrannaja grammatica rossiskogo jazika”（“Gramática redundante de la lengua rusa”）のCh. Ph. Reiffによる仏訳に “Aspect” という語が使用され、各言語の研究に広まったものである。要するに、「アスペクト＝相」の研究は、ギリシア語やスラブ諸語に存在する動詞の範疇を基盤として、各言語における文法学にその概念が伝わって行ったものである。

“Aktionsart”という用語について

アスペクトの研究の始まりについては、前述の如く、動詞範疇における諸概念の分類をもって始まったものである。後に「時制」の概念より分化し、アスペクトという概念の位置が定められたのであるが、一方、“Aktionsart”の場合は、アスペクトが時制から分かれたように、「アスペクトの概念」自体の内で、その概念上における分割より生じたものであった。W. Dietrich(1983)[2]によれば、前述のような分類方法は印欧語比較言語学の諸研究をもって始まったものである。G. Curtius[3]はギリシア語の動詞体系に関する著作中、特に「過去」時制が談話記述に関して二つの言及様態を有していたとし、その内の一つは、(ア)時間からみてのもの、もう一つは(イ)時間様態というものからみてのものであった。その後、前者(ア)に関する記述を“Zeitstufe”(escala de tiempo)、そして後者(イ)に関する記述を“Zeitart”(modo del tiempo)と呼びはじめたのである。G. Curtiusがこれに命名したこれらの概念と用語について、前述(ア)は、「動詞時制」の概念と結びつき、後述の(イ)は、「時間様態」と結びつくことになる。G. Curtiusは、“Zeitart”を時制の範疇において分類し、その意味論的対立について規定を定めている。それらは、(A)継続的行為、(B)瞬時的行為、(C)終了的行為の三つである。ここでは、弁別特徴として、動詞の意味記述のための対立概念の使用であるということに注意が必要であろう。その後、“Zeitart”の概念はB. Delbrückの著作中に“Art der Handlung”(modo de la acción＝行為の様態)という表現に具体的に現れ、その事自体が今度は、C. Brugmannによって“Aktionsart”という表現に置き換えられたのであった。動詞のアスペクトの研究は意味論的な研究より出発したものであり、印欧語比較言語学の諸研究において発展をみたのである。

両用語上の注意

本質的に、「アスペクト」というものについては、次の二つに分けられ、用語上、理解する上で、注意を要する：

①動詞によって示される行為や過程等の事象についての性格を語彙論的な(客観的なということ)見地より、その動作様態を分析・分類してゆく“Aktionsart”。

②おなじくその(行為・過程等の)事象に関して、今度は主観的見地より二分法的な分類、即ち、「完了／不完了の対立概念を基本的なものとしてとらえる“Aspect”。

「アスペクト」の概念は本質的・基本的には②の“Aspect”のことであり、

“Aktionsart”というものは“Aspect”の二分法の基本概念である「完了／不完了」を元として、動詞の表す行為・過程・様態等の諸々の意味上の諸性格を分類するものである。(むしろ、「語彙論的に整理する」と言った方がわかりやすいかも知れない。)

今までの「相」の研究については、狭義に「相」をとらえて、“Aktionsart”のことのみを取扱い、これを“Aspect”として決めつけたり、または、一般的には、スラブ諸語の「完了体／不完了体」が形態論的に表示され(注：スラブ諸語の場合は形態的に現れるが、一般には前置詞から派生した接頭辞の接辞または相の概念を中心として動詞の語彙論的派生を表す接尾辞の接辞をともなう形態的派生のもので、印欧語の名残は残してはいるが、印欧語本来の姿である動詞活用—Inflexionの形態はみられない)ており、対立をなしているものをそのまま他の言語研究に強制的に適用して、ある／ないという議論を続けたりしてきたのである。スペイン語における「アスペクト」の概念も、上記の考え方によるところが多く、スラブ諸語(4)に見られるタイプの条件に合致しないとして、「アスペクト」自体の存在を否定してきたのである。

2. 文法範疇としての「アスペクト」について

スペイン語の研究では、動詞の時制活用中に完了過去／不完了過去の形態があり、時制体系の中で「アスペクト」の問題は処理されており、スペイン語文法の中ではないものとされている。そこで、アスペクト概念の表現について、各語における諸特徴を基本として分類を試みるならば、次のように分類できよう：

①古典ギリシャ語等の印欧語における古典諸語に属するもので、屈折変化(Inflexion)や変音(Ablaut)による形式で語根に直接関係するもの。
→印欧語古典語タイプ

②接辞の膠着をもって、常に表現されるもの。即ち、派生的な方法をもって表現するもので、明確に形態的特徴をもって指摘できるもの。
→スラブ語タイプ

③時制発達言語におけるもので、形態的特徴を明確に指摘できないが、意味論的観点より認められるもの。
→現代語のゲルマン・ロマンス語タイプ

の三つに分類できるが、ここでは、③の立場をとっている。

しかし、現代語において一般的には、「アスペクト」を時制体系の中に包合し、意味論上の一機能としてとらえている。スペイン語やその他の時制発達言語の中でアスペクト形態の不在をもってその明確性の欠如を指摘すれば次のようになろう：

①動詞の活用語尾や変音においてアスペクトの表示がない。

②不定詞において、スラブ語と比較すると他の一方に対立するアスペクトの対応がない。

③記号表現（動詞の形態論的側面）のレベルにおいて、明確かつ明示的な形態論的構成要素を持たない。

④アスペクトの分布に関して、何らの網羅性はすべての動詞にわたりみられない。

以上四つの項目を指摘できる。

しかし、アプローチは、時制について、その時間軸上の発話に関する過去・現在・未来等の指呼機能において、時間軸上の発話点を示す動詞の活用形態と意味機能上の不一致に着目し、これは何が原因であるのかということの解明に「アスペクト」の存在を肯定する可能性を考えた。時制を全く客観的なものと認めるならば、時制形態には「活用形態＝記号表現」と「意味されるところ＝記号内容」の齟齬において、時より間を問うところのその余剰といえるような「アスペクト」の意味論的なニュアンスは、より形態的に現れていなければならないのである。

「アスペクト」の研究で、アプローチについては、次の二つに分けられよう：

①「アスペクト」を具体的な形式（例えば活用や接辞〔スラブ諸語〕によるもの）、もしくは、手法を全く持たない諸言語（現代印欧諸語に多い）の間において、時制の意味構造内での「時制に付随する二次的かつ意味論的な」現象として考えるもの。形態的に表示されないから存在しないと見る方法。

→「アスペクト」の概念自体を否定的にみるもの。

②「アスペクト」を印欧語の典型的かつ特徴的な動詞の範疇の一つとして、今日もなお、存続する「潜在的」な概念であるとしてとらえる。そして、一つの現象として認識しつつそれが現代の言語表現においてどのようにして、また、どのようなところでそれが表現されているのかということにつ

いて焦点を合わせて考えるもの。

→「アスペクト」の概念自体を肯定的にみるもの。

「アスペクト」の概念については、スペイン語を研究するところでは、圧倒的に①の立場をとってくるところが多い。しかし、ここでは、印欧語本来の概念を基本として、②の立場から「アスペクト」についてアプローチをおこなった。

3. スペイン語における「アスペクト」について

スペイン語では、形態論的なアプローチが否定されるところから、「アスペクト状況」について着目し、文脈的機能の中で求めることにする。アプローチについては山田 (1984) を参考にした。以下に引用する：

①実事象の時間的性格を幾つかの基本的特徴に分解し、その特徴を規準として分類を行う。

②幾つかの論理的関係に着目し、それが動詞句の中にどの様に反映しているかを分類の手掛かりにつかう。

形態論的（動詞活用の）に証明は出来ないところであるから、意味論的（むしろ文脈的な観点において）に証明を行う必要がある。活用形態に表出され区別できないので、時制の区別をそのまま適用すると時制の研究になってしまう。ここでは、現代スペイン語学者C. Hernández Alonso (1984)の「アスペクト」論を参考にし、弁別概念については、Garey (1957) のtelic/atelic（動詞行為の目的達成／非達成）を参考とした。

例えば：

Como pan para vivir.（私は、生きるために食う。→atélico非達成）
＝食べてゆくのみ。何時終るのか分からない。

Como esta naranja.（私は、このオレンジを食べる。→télico達成）
＝オレンジを食べて無くしてしまう。

というように、補語をとるかとらないか（補語の有無）で、その文脈的な状況によっても「アスペクト」は変わってくるものである。アスペクト状況に注目すれば、時制（「時」）だけでは割り切れない部分（=「間」）が出現する。さらにもっと深く考慮してゆけば、付属する名詞、副詞はともかく、名詞句、副詞句等は、さらに無視できないものであることが明らかとなってこよう。この点について、文法範疇のみをテーマに喚起するだけではなく、文脈的（コンテ

クスチュアル）な視点も考慮に入れ、単に「潜在性」という曖昧さがあるので意味論的なアプローチが簡単にみえるところからという、そこからのみの接近だけではなく、加えて語用論的な観点も必要であるところは、明記するべきであろう。

スペイン語において、アスペクト状況に注目し、実例の引用として、条件文（～ナラバ構文）を使用し、ここにおいて、その意味の中に「アスペクト」の現象を求めた。ここでは、時制上の発話点が現時点（現在：SIMULTANEITY）のものに例を限定して、考察をおこなった：

"Vieja — Si entras en mi casa tovavía queda olor de cunas"

— G. Lorca. "Yerma", Act.III

"Enrique — Si ven ustedes a mi hermana, que espere aquí."

— J. Benavente. "El Automóvil", Act.I Esc.II

条件説中に表される行為が「～してしまう」という目的行為の達成を述べるところから、完了／不完了という「アスペクト」の概念は、動詞形態に現れないからといって容易に否定するものではなくスペイン語（時制発達言語にも一般的に言えることであるが）における「アスペクト」については、常に、時制体系（過去・現在・未来を表す活用形態）中の下位範疇（＝意味論レベルに止まるもの）として存在するものであり、この場合、「アスペクト」は「法」（MOOD）ともニュアンス上、注目すれば関連しており、例としては、現実とは反対の願望等を表現する場合の条件文中の接続法過去等の使用があげられる。「時制」—「アスペクト」—「法」の三つは、どれもが一つ欠けても成り立たないものであり、別々に分けて考えられるものではないということが明確に理解できよう。このように、スペイン語では、「アスペクト」は意味論的（むしろ文脈的、語用論的要素を多く含む）なもので、時制と法との中間的な存在であるということであり、形態論的に証明できる「時制—法」という二つの文法範疇の意味論的な接合要素として捉えることが出来る。

4. まとめ

要約すれば、スペイン語では「アスペクト」は形態的特徴を欠き、動詞体系の中では文法範疇としては認められていない。表現自体は時制体系内で行われる。しかし、意味論的な範疇としては機能しており、各時制中（過去・現在・未来）の表現に対して、その時間的な意味と付随した行為の様態やその完結性

を問うものである。それは時制の時間軸上の指呼機能と関連しており、行為・事象等に関する二項対立（完了／不完了）に立脚し、主観的立場からの観点を述べるものである。また、ニュアンスについては、活用時制と連動する「法」により直接的に影響を受けるものであり、「法」によって完了／不完了のさらに主観的な判断要素があることを指摘できよう。アスペクトとはスペイン語においては、時制の指呼機能と法の表現機能の間における存在であるといえよう。要するに、一つの言語現象として、スペイン語にも見られるということである

アスペクト自体についての主なスペイン語での論点は、過去時制中における完了過去と不完了過去の時制の違い、また、英語と同じ進行形を有しているが、これらの根本概念を提起することも必要であろう。

時制は「時」について言うものであるが、アスペクトは「間」について問い、さらに語るものである。各言語はその言語自体の特徴があるのであり、この言語でこういう現象がないから、こちらのほうの言語では認められないとする態度は科学的な解決に結びつかない。一つの現象は多くの現象へとそして汎くの現象へと繋がっているものである。言語とは一つの大きな相対的なバランスではないのであろうか。特に、各種の言語研究において文法用語の使用にあたっては、概念の由来と現在の態度を十分に考慮し、接近してゆくことが必要と思われる。

（本稿は1988年5月に南山大学で開催された日本ロマンス語学会第25回大会で口頭発表したものに加筆訂正したものである。）

注

(1)「印欧語の最も古い形態において優越的であったのは、むしろアスペクトであった。... 印欧語においては、もともと時称の区別よりも、このアスペクトの区別の方が実はより原本的なのであった。」泉井久之助（1981）p.84.

(2) p.181.を参照せよ。

(3) Curtius, Georg: 1852: "Griechische Grammatik", Praga.
1863: "Erläuferung zu meinen griechischen Schulgrammatik", Praga.
1877: "Das verbum der griechischen Sprache", Leipzig

(4) スラブ語動詞のアスペクト対立については以下の図を参考にされたい：

	'write'	'write out'
simple verb	pisat' (Ipfv.)	
prefixed verb	na-pisat' (Pfv.)	vy-pisat' (Pfv.)
suffixed verb		vy pisyvat' (Ipfv.)

—B. Comrie. (1985) p.90.

参考文献

Alonso, Cesar Hernández: (1986), *Gramática funcional del Español,* Gredos.

Comrie, Bernard (1985): *Aspect,* Cambridge Univ. Press.

Dietrich, Wolf (1983): *El aspecto verbal perifrastico en las lenguas románicas,* Gredos.

Kurylowicz, Jerzy (1964): *The inflexional categories of Indoeuropean,* Carl Winter.

泉井久之助（1981）『言語の構造』紀伊国屋書店

山田小枝（1984）『アスペクト論』三修社

ユダヤ・スペイン語（下）*

パロマ・ディーアス＝マス**

坂東省次***（訳）

8. 言語使用域

これまで史的発達、地理的分布および内的特徴を中心にユダヤ・スペイン語のさまざまな面を見てきた。しかし、時代と場所が同じでも言葉は異なる。性、年齢、職業、教育および社会階級のような変数が言葉に影響し、この結果さまざまな言語使用域が生じる。ユダヤ・スペイン語の使用人口が減少した現在より、以前（特に第一次世界大戦前）の方がもっと明白に言語使用域を区別できた。ユダヤ・スペイン語は以前の方がもっと活発だったばかりでなく、都市化、地理上の移動、外国語や通信手段の影響が少なく、今日ほど均一化していなかったからである。

（レバントのユダヤ・スペイン語の）言語使用域は、次の4つの社会集団に分類できる:

1）hajamin「賢人」とmelamedim「学校の教師」から成るラビと学識者階層。伝統的教養層であり、yesibot「ラビの学校」で教育を受け、ユダヤ教の尊敬すべき伝統文化つまり、聖書、タルムード、ミドラシュ、宗教上の戒律、あらゆる種類のラビ文学一般に通じている。共同体では信仰あるいは教育に関係する仕事にしばしば従事していた。

彼らは他の階層のセファルディーよりヘブライ語・アラム語の表現を多用しており、これがこの言語使用域の顕著な特徴となっている。この特徴は特にラビ教育を受けた男性の場合に言えることであるが、女性—ラビと教師の妻か娘—でも他の階層の女性よりヘブライ語借用語を多用していた。

2）上流階級もしくは上流・中流階級（ときどきguebrim「紳士」と呼ばれた）

※本稿はパロマ・ディーアス＝マス「ユダヤ・スペイン語（上）」京都外国語大学研究論叢45（1995、未刊）の後編を成す。

※※パロマ・ディーアス＝マス（Universidad del País Vasco教授）

※※※ばんどう　しょうじ（京都外国語大学教授）

は裕福な商人か大銀行家から成り、彼らは特にオスマン帝国においてしばしば政治的影響力を発揮していた。彼らの教育レベルは非常に高かったが、それは宗教にとどまらなかった。フランスやイタリアの学校に学び、子息をヨーロッパに留学させていた。

この社会階層の言語を証明するテクストはあまり残っていないが、彼らの言語を模倣した記事が風刺雑誌に掲載されて残っており、そこからヘブライ語・アラム語の影響はラビ・学識者階層ほど強くないが、トルコ語借用語はラビ・学識者階層より多用していたこと、ただし中流・下層階級ほどトルコ語借用語を多用、乱用していなかったこと、が推測できる。

3）中流・下層階級（ヘブライ語で「家主」を表すbenonim, medianeros, balebatimと呼ばれた）、大衆階級および貧民は職業こそ多種多様であるが、一様に非ユダヤ人と接触する仕事に従事していた。つまり、中流・下層階級は医者、小売業、手工芸、両替、銀行業に、大衆貧困階層は街頭売り、商品の輸送、手仕事、家内業務に従事していた。教育レベルが低く、（特に女性は）完全な非識字者でない場合でも、初歩的な宗教教育しか受けていなかった。彼らの知識は口承によって学んだことわざ、格言、物語、ロマンセ、歌、大衆医学に限られていた。

彼らは職業上ユダヤ・スペイン語を知らない人々と絶えず接触していたので、彼らのユダヤ・スペイン語は当然、トルコ語とバルカン諸語の影響を最も多く受け入れた。加えて、a）純粋なスペイン語を用いていたが、他の階層のセファルディーからは上品でないと考えられた（例えば、somos「私たちは・・・である」mucho「非常に」esfuegra「姑」の代りにそれぞれsemos, muncho, eshuegraを用いていた。）b）ヘブライ語・アラム語借用語が語形を変えたり、意味が語源と異なったり、あるいは同時に語形も意味も変えて使用されている（例えば、聖書からの引用文ben porad Yosef「ジョセフは創造力豊かな少年である」はbenporayuséと発音され、感嘆表現（「彼か彼らが成功しますように!」）になる。c）異なる言語の形態素の合成が他の言語使用域より頻繁に行われる（固有名詞の情愛の縮小形IsterulachaはEster+トルコ語接尾辞-achi+スペイン語女性形態素-aから成る。d）慣用句、決まり文句、諺、格言を多用する。

セファルディーが西欧の影響を受け、新興諸国の文化に同化する中で、ユダヤ・スペイン語は衰退していった。しかし、大衆階層は異文化にそれほど同化しなかったので、上流階級がユダヤ・スペイン語を話さなくなった時、

大衆階層のユダヤ・スペイン語がユダヤ・スペイン語最後の拠点となった。

4）レバントの西欧化したセファルディーは旧世代とは異なる社会階級を形成していた。つまり、彼らの文化は伝統的なユダヤ文化でもなければ大衆の口承文化でもなかった。彼らは西欧語（フランス語、イタリア語、ドイツ語あるいは英語）を教える学校で西欧風に勉強をし、（特に自由業を好んだ）両親とは異なる職業に就き、ヨーロッパを旅行した。このような国際化の波はまずレバントに、少し遅れてモロッコにも到着した。その結果、モロッコのハケティーア方言の衰退が進んだ。しかし、レバントでは、西欧化したセファルディーは異なるユダヤ・スペイン語、つまりヘブライ語・アラム語やトルコ語・バルカン諸語の影響がほとんど消滅し、替ってフランス語とイタリア語の借用語および翻訳借用語の入ったユダヤ・スペイン語を話し始めたのである。借用語はユダヤ・スペイン語のベースであるスペイン語まで浸食し始めた（los padres「両親」に替って、イタリア語のĝenitoresかフランス語のparientesが使用されるようになった。）

コンスタンティノープルのユダヤ・スペイン語新聞El Juguetón紙上に掲載された—フランス語借用語が満載の—次の記事のように、言語の「階級闘争」はときどき奇妙な形で現れた。西欧化したセファルディーはあまりにも大衆的な言葉を使っているとして同紙を非難したのである:

> 「　ペラ[52]のある女性と話をした時、彼女はEl Juguetón[51]紙は用いている言葉が俗っぽいから大嫌いであり、20世紀は教育が高水準に到達しており、西欧風に話すばかりでなくまた西欧風に生活するのがよい、と我々に言った。我々は同紙が大衆のことばを用いて多大の貢献を行ってきたことを彼女に言うつもりはない。」
>
> (Bunis, Types, p.64)

5）最後に、フェミニスト論争を起こすつもりはないが、セファルディーの女性は少なくともセファルディー社会に国際化と西欧化の波が到着する以前から、独自の言語使用域を形成していたことを指摘しておこう。その理由は次の通りである。a）彼女たちは十分な教育が受けられず、完全な非識字者も少なくなかった。2）彼女らは宗教に対して男性より受身的で、男性より家庭的であった。その結果、（ラビ文学、祈祷詩のような）宗教的な文化活動にも参加しなかった。3）彼女らが生きたイスラム社会では、男性との交際がなく、女性だけの集会が開かれ、女性の孤立が余儀なくされた。4）彼女らは口承の伝

統文化のもっとも優れた伝達者であった。5）以上のような理由から、彼女らは男性とは異なる話し方をしていた。6）彼女らはヘブライ語を知らなかったので、ヘブライ語借用語の使用は男性より少なかったし、使用した場合でも語形を変えて使用していた。7）彼女らは—家庭管理の必要から—ユダヤ人および非ユダヤ人の店員、女中、洗濯女、配達人、家を造る職人（ペンキ屋、左官、大工）と交際があり、その結果彼女らのユダヤ・スペイン語は大衆的な特徴を示したし、他言語からの影響を多く受け入れた。8）そして、多分、ロマンセ、歌、ことわざ—その言葉はいつも非常に伝統的である—への愛着から、彼女らのユダヤ・スペイン語にはよりアルカイックな特徴が残った。

次にあげるサロニカの風刺新聞El Kirbach[33]紙の非常にユーモラスな記事にも明らかなように、セファルディーは性、教育および社会階級によって生じる以上のような言語使用域の相違を自覚していたのである:

「 サロニカに住む我々ユダヤ人はユダヤ・スペイン語を各人各様に話す。各階層がそれぞれの表現を持っている。各種の人がそれぞれの話し方で話している。すべてのジャーナリストが自分の表現を持っている。だれもかも自分たちの語を用いている。しかし、全員がお互いの意思を容易に疎通させることができる。

例えば、我々はうるさい人に立ち去って欲しいと思う時、arrematación con voź de cantar「歌うのを止めて下さい」と言う。ラビの学校の人はrah「ありがとう」と言う。女性はescoba detrás de la puerta「箒はドアの後にあります」と言う。神経質な人はvaćiando「出ていって下さい」という。商人はespalda que te veo「背中を見せて下さい」と言う。

ある場所であまり話しすぎない方がよい時、我々はšetica「静かにして下さい」と忠告する。ブーラ・クラーラ（一般的な女性名）はいつもmudera「袋を使って下さい」と言う。一般の人々はamudición「静かにして下さい」という語を用いる。社交会の会員はお互いにsirmá「金糸」と言う。ラビのRabi Abraham Hagadolはyo-deah lašon「彼は我々の言語が分かる」あるいはotro lalakerdi「他の語」と言う。」

（Bunis, Types, p.62）

9. ユダヤ・スペイン語の現状

さて、いよいよ、ユダヤ・スペイン語の現状を説明する時がきた。すでに説明したように、モロッコがスペイン化しフランス化する中で、ハケティーア方

言は実際にはほとんど消滅してしまった。レバントのユダヤ・スペイン語も19世紀に始まる西欧化の中で大きく後退したが、これに逆境が加わった。すなわち、—少数民族の文化的特殊性に寛容であった—オスマン帝国が分裂して、新しくバルカン諸国（ギリシア、ブルガリア、ルーマニア、ユーゴスラビア）が誕生し、ユダヤ・スペイン語も弱体化した、ユダヤ人は善良な市民として国民生活の（言語面を含む）あらゆる面に同化することを強要され、ユダヤ・スペイン語で出版することすらも禁止されたからである（例えば、ギリシアでは1936年に禁止された）。加えて、新興諸国の政治的分裂によって、各国のユダヤ共同体もかつての盛んな交流の機会を失い、孤立してしまった。

一方、ケマル・アタチュルク[54]の企てた改革によっても、ユダヤ人は痛手を被った。言語の標準化を目指し全住民がトルコ語を話すキャンペーンが行われ（「同胞よ、汝らはトルコ人でありトルコ語は汝らの言語であらなければならない」これは多くのユダヤ学校の入口に掲げられたスローガンであリ、もちろんトルコ語で書かれた。）、また採用し—修正したばかりの—ラテン文字以外の文字で印刷することも（1928年には）禁止された。

1910年にコンスタンチノープルで刊行された小劇作品「イスラエルの言語と国」は、以上の状況を示す好例である。この中でさまざまの象徴的な人物—大部分が当時の新聞を代表している—はユダヤ人の統一言語について思索している。統一言語選択の迷いが次のように表されている:

祖国愛ゆえにトルコ語を学び
ユダヤ教徒ゆえにヘブライ語を学び
啓蒙と文化ゆえにフランス語を学ぶ
三言語を学ぶことは我々の絶対の義務なり

（Romero, Teatro, p.320）

間違いなく政治的シオンニスト[55]である著者の心は結局ヘブライ語に傾いているが、以上の4行詩は完璧である。トルコ語を用いるのは愛国的な義務からである（いかなる義務も程度の差はあれ外から強要されたものである）。ヘブライ語はユダヤ人の言語である。フランス語はレバントのセファルディーに「啓蒙の道」を開いた「文化」語である。しかし、作品はユダヤ・スペイン語で書かれているにもかかわらず、ユダヤ・スペイン語は対象外に置かれている。著者はユダヤ・スペイン語が真情を吐露し家族内でしか使用されない未来のない言語であると考えていた。彼は作品をユダヤ・スペイン語で書いたのは多分、

自らのシオニスト思想が目指している大衆層に心の譲歩をしているからであろう。

前述のベニチョウの証言によれば、オラーンのセファルディーはスペイン人と話す時、ハケティーア方言を現代スペイン語に同化させようと努力したが、このような態度はユダヤ・スペイン語自体の権威の失墜の現れ以外のなにものでもない。

加えて、第2次世界大戦の戦禍がユダヤ・スペイン語に致命的な打撃を与えることになった。直接的には何十万人のセファルディーが殺戮され、間接的にはアメリカ合衆国、イスパノアメリカおよび戦後誕生したイスラエルに大量移住したのである。

事実、大移動は今世紀初頭に始まっていた。トルコ・バルカン戦争、流行病、経済・社会危機および第1次世界大戦によって、セファルディーの多数の家族は国外に逃亡していたのである。第2次世界大戦の勃発によって再び、多数のセファルディーがアメリカとイスラエルに移住した。これら第二次ディアスポラの国々—特にイスラエルーでは、言語の均一化という興味深い現象が生じた。出身地が異なり社会的言語使用域も異なるセファルディーが一緒に暮らす中で、各地、各言語使用域の特徴が減少し、いわば標準ユダヤ・スペイン語が形成されたのである。

しかし、移住先でユダヤ・スペイン語が消滅する例もあったし—現在進行中の例もある。イスパノアメリカに移住したセファルディーは日常語をユダヤ・スペイン語からイスパノアメリカのスペイン語に取り替えたことは容易に理解できるし、数は少ないがスペインに移住したセファルディーも日常語を現代スペイン語に取り替えたことは言うまでもない。イスラエルとアメリカ合衆国では、最初の世代はユダヤ・スペイン語を話し続けたが、公的文化の圧力、新しい祖国の生活に完全に同化する必要性、異教徒もしくはアシュケナジ系ユダヤ人との雑婚によって、新しい世代ー彼らは自分たちをセファルディーよりアメリカ人あるいはイスラエル人と考えていたーは両親のユダヤ・スペイン語を話すのを止めてしまった。

この点に関しては非常に興味深い実例がある。次にあげるのはサムエル・G・アーミスティードとジョセフ・H・シルバーマンがアメリカ合衆国でインタビューした一女性の例である:

「私は新婚の娘を訪れるために（ニューヨークから）カリファルニアに来ていました。運悪く、その子はアシュケナジ系の青年と結婚してしまいま

した。もちろん彼はユダヤ・スペイン語を話せませんでした。娘は義母とほとんど話ができなかったので、かわいそうな母親は孤独で退屈していました。」

(Tres calas, p.117)

アメリカ合衆国のセファルディーの言語に関する最近の研究は、ユダヤ・スペイン語の衰退が進んでいることを明らかにしている。1978年にニューヨークとイスラエルで実施された調査によって、インフォーマントの孫たちはすでにユダヤ・スペイン語を話しておらず、52パーセントの子供たちだけがユダヤ・スペイン語を話すかもしくは理解できるだけ（受動的な知識）であることが明らかになった。[8]

1977年にイスラエルで21歳から90歳までのレバント出身者60名のセファルディー（男性24名、女性36名）を対象に行った調査によれば、次のような興味深い事実が明らかになった。[9]すべてのインフォーマントはユダヤ・スペイン語を含めて2言語以上を話す（程度の差はあるが6言語あるいは7言語を話せる者までいた）。著者は20歳以下でユダヤ・スペイン語話者を捜すのは難しいことを明白に指摘している。事実、インフォーマントの二名だけが25歳以下だった（1名は21歳で1名は24歳）。9名が40歳以下、15名だけが50歳以下。インフォーマントの半分（25名）が70歳あるいはそれ以上であった。8名を除く全員がイスラエル以外の国で生まれており、このことはイスラエル生まれの新しい世代はもはやユダヤ・スペイン語を話さず、ヘブライ語を母語と考えていることを指摘している。

事実、インフォーマントはアンケート調査者とユダヤ・スペイン語で話したが、子供や孫にはヘブライ語で話しかけていた。アンケート調査員に対して両親は、ユダヤ・スペイン語が失われるのは悲しいが、子供たちがイスラエルに完全に同化するにはヘブライ語を学ばなければならないと考えていた。

加えて、インフォーマントたちは自分たちの言語にほとんど敬意を払っていないように思われた。ユダヤ・スペイン語をジャーゴン（訳のわからない言葉）と呼ぶ者もいれば、家族や友人以外の人々の前でユダヤ・スペイン語を話すことは恥ずかしいことだと思っていることを認める者もいるし、故郷トルコではすでに権威を失いフランス語を話す方が上品であると思われていたことを回想する者も何名かいた。あるセファルディーはアンケート調査者に、良いスペイン語を聞きたいなら、レバント出身のユダヤ人でなくて、メキシコやアルゼンチンから移住してきたばかりのユダヤ人に話しかけるべきだと指摘さえした。

このような現実に対して、ユダヤ・スペイン語を—およそ人工的な手段によって—復活させようとする動きが今日ある。目的をどの程度達成できるか、あるいは現代スペイン語によるユダヤ・スペイン語の再スペイン語化を達成できるか、時がたてばわかることである。方言学者にとっては残念であるが、ユダヤ・スペイン語は今日、消滅の危機にあることはどう見ても明らかである。

正書法について

セファルディーの言語に関する本章を終わる前に、その正書法とその歴史について若干の考察をしておこう。イベリア半島のイスラム教徒とユダヤ教徒はすでに中世において、それぞれセム文字を用いてロマンス語を表記していた。この文字はアルハミーア(aljamía)またはアルハミアド(aljamiado)[56]の名称で知られている（イスラム教徒はキリスト教徒の言葉をアラビア語でagamîŷa「外国語」と呼んでいた。aljamíaまたはaljamiadoはこのagamîŷaに由来する)。例えば、有名なモサラベ方言[57]の叙情詩ハルチャ[58]はアラビア文字とヘブライ文字で今日に伝えられている。

前述のように、イベリア半島を追放された後、オスマン帝国に定住したセファルディーは印刷術の発達に重要な役割を果たした。セファルディーは低地地方とイタリアではローマ字を使用したが、レバントと北アフリカではアルハミーア文字を保持した。言うまでもなく、ロマンス語の音声体系にセム文字を使用するには多くの問題があった。例えばスペイン語のñ音をどのように表記するか、あるいはヘブライ語に存在しないが中世スペイン語に存在した/ž/と/ŷ/をどのように表記するか、といった問題である。また、母音をどのように表記するかという問題もあった、(すべてのセム語と同様に）ヘブライ語でも子音だけを書くからである。—正確に読むのが重要な—宗教書だけは、マショラと言う識別符号を使用し、文字の上下あるいは中に符号を付けて母音や時には強調を表していた。

アルハミーア文字は中世においてすでにこれらの問題を可能な範囲で解決していた。しかし、18世紀のセファルディー印刷業者は実に理路整然としたしかも音声学的に驚くほど正確な文字体系を作った。彼らは一連の分音符号もしくは文字の組み合わせを用いて、ヘブライ語にないスペイン語の音素を表した。

このようにして、ヘブライ文字betでユダヤ・スペイン語の閉鎖音[b](bueno）を表し、同じ文字にティルデをつけて摩擦音[b̰]（*vino, abrir*）を表し

た。/ž/はティルデをつけたźainで表し、ティルデがなければ/z/になった。同じように、guímalはティルデがなければ/g/を表し、ティルデが付くと/ǵ/を表した。/ñ/は（スペイン語のnに相当する）ヘブライ語のnun+半子音y, i̯で表す。ñがラテン語のn+半子音i̯（ラテン語では*ninia*がスペイン語では*niña*）から出来たことを考えれば、その組み合わせは歴史文法の観点から首尾一貫している。

母音は中世と同様に、マトレス・レクチオーニスと呼ばれる子音を使って特定の母音を示すという方法で表した。従って、軟口蓋母音oとuにはvav軟口蓋半子音[w]を用いた。硬口蓋半子音[y]で硬口蓋母音eとiを表した。喉子音（現在は無声）álefは母音aか、母音間で母音連続を表した。このような文字体系が原因で、アルハミーア文字では、ある語を*večina*あるいは*vićina*のいずれの形で読むのか（ユダヤ・スペイン語では両形が可能である）区別できないし、ある語を*arena*あるいは*harina*のいずれの形で読むのか（アルハミーア文字ではhは書かないから）区別できない。このような文字の曖昧さから、音声の多形現象がユダヤ・スペイン語の特徴になった。

サロニカとコンスタンチノープルの大出版社で生まれたこのような文字体系で印刷された本は多数に及び、加えてラシ文字と角型文字の二種類の字体が使われた。

ラシ文字（raši はトロア出身のRabí Šhelomo Iŝaac[59]の頭文字の略語。彼の聖書評釈がこの文字で印刷された。）はセファルディーの最も特徴的な文字で、いつも母音符号を付けずに書かれた。角型文字は角張っているところからこのように呼ばれ、一般にヘッディングやタイトルあるいはマソラ句読法で母音を印刷する宗教書のために保持された。

手書きのアルハミーア文字もあり、（deletreo「スペル」から派生したと考えられる）solitreoかsoletreo、letra de carta, letras españolasあるいは単にespañolかĵudeśmoと呼ばれた。モロッコにはレバントのような大きな出版社がなかったので、文学は大部分が肉筆（当然変種は多数あるが）で書かれたのである。

セファルディーの国際化が遅かったことも、文字に影響を及ぼした。その他の文字、基本的にはラテン文字がさまざまな形で使われるようになった。アタチュルクの新生トルコでは新トルコ語文字が採用され、今日でも使われている（コンスタンチノープルでは今でもこの文字で新聞が刊行されている）[60]。レバントのその他の地域と北アフリカではフランス語の文字の影響を受けている。モロッコのスペイン保護領のセファルディーの間ではスペイン語の正書法を採用している。

かつてユダヤ・スペイン語の出版物をギリシア語で書いていたように、セファルディーは新生のバルカン諸国に同化する目的から、通常キリル文字を使用している国々では、ユダヤ・スペイン語の一部の出版物をキリル文字で書くようになった。

1920年代でも、サロニカとコンスタンチノープルでは、小冊子はまだアルハミーア文字で出版されていた。この文字は今日では完全に消滅したが、ラシ文字も読めないユダヤ・スペイン語話者が多数いる。ただし、彼らは祈祷書の印刷文字である角型文字はかろうじて読める。ユダヤ・スペイン語で書ける者は数少ないし、書けてもローマ字である。そこには絶えずスペイン語、フランス語あるいはトルコ語の干渉が見られるし、—最も教養の高い人々は—音声転写を試みている。

原注

1. /š/はč, ǰ, š もしくはžのいずれかの文字で表す。
2. /z/はǧ, ǰ, š, ý もしくはżのいずれかの文字で表す。
3. /ŷ/はč, ǧ, ǰ, ŷ もしくはẑの文字で表す。
4. /z/はć, śあるいはźの文字で表す。
5. /b/は語頭ではbかv̇の文字で、母音間ではḃかv̇の文字で表す。
6. /s/はṡの文字で表す。
7. 一方、Angel Vázquez 著 "La vida perra de Juanita Narboni" (Barcelona, Planeta, 1976) という現代小説の中では、タンジール出身の50歳台の主役女性の会話が、ハケティーア方言をおもしろおかしく映し出している。
8. Tracy K. Harris, *The Prognosis for Judeo-Spanish: Its Description, Present Status, Survival and Decline, with Implications for the Study of Language Death in General,* Georgetown, Univ., 1979. を参照せよ。
9. Arlene C. Malinowsky, *Aspects of Contemporary Judeo-Spanish in Israel Based in Oral and Written Sources,* Michigan, Univ., 1979. を参照せよ。

訳注

1) p.35.
2) 芝 (1981) p.273 及びSuárez Fernández (1993) p.49 を参照せよ。
3) 芝 (1981) p.273 及びSuárez Fernández (1993) p.49 を参照せよ。
4) スルタン・バイエズィット二世 (1481-1512) はスペインのアラゴン国王フェルナンド二世に「あなたは賢い王と呼ばれそこなった。あなたは自分の国に荒廃をもた

らし、われわれを富ましめた」と言ったという逸話は、余りにも有名である。ケラー（1982 上, p.390）を参照せよ。

5）Quilis（1992）p.20 を参照せよ。

6）Sephila（1990）はユダヤ・スペイン語の形成時期を1620年頃としている。

7）名称についてはHarris（1994）pp.20-29.を参照せよ。

8）ユダヤ・スペイン語の要因は実にさまざまである。ここではその一部だけをあげた。詳しくはHarris（1994）p.p.197-229.を参照せよ。

9）Jane S. Gerber, p.xxiv.

10）Qulis（1992）p.93によれば、西ヨーロッパで6 万人のセファルディーが、東ヨーロッパおよび小アジアで16万人のセファルデーが殺戮された。

11）Quilis（1992）, p.93.

12）Harris（1994）, p.197.

13）上田和夫（1992）はユダヤ諸語を「ユダヤ人が、居住する諸地域の言語に、ヘブライ語、アラム語の要素を中心とする、種々の外来語が混入された結果生まれた、ユダヤ人の日常言語の総称」と定義し、タルグーム語、クルド語、ユダヤ・アラビア語、ユダヤ・ベルベル語、ユダヤ・ペルシア語、ユダヤ・タート語、ユダヤ・グルジア語、クリムチャク語、ユダヤ・ギリシア語、ユダヤ・イタリア語、ジュデズモ、ユダヤ・プロヴァンス語、ユダヤ・フランス語、イディッシュ語、クナアン語の合計15の言語をあげている。一方、Davio M. Bunis（1981）はユダヤ諸語は30言語にのぼるとしながらも、その大部分はすでに消滅したかあるいは消滅の危機に瀕している中で、ヘブライ語、イディッシュ語およびジュデズモの3言語が現在残っている主要なユダヤ語であると言っている。

14）イディッシュ語は中世ドイツ語諸方言をベースに、ロマンス語、ヘブライ語・アラム語が混入し、さらに14世紀以降にはポーランド語、ウクライナ語、白ロシア語等のスラブ語から強い影響を受け、独自の発達を遂げた。イディッシュ語はアシュケナジの使用言語で、第一次世界大戦前には話者数が1千万を越えていたと言われる。現在の言語人口は300万から400万と言われる。詳しくは上田（1988）と上田（1992）を参照せよ。

15）東アラブ諸国に対する西アラブ諸国の総称。広義では、エジプト以西のアラブ諸国、つまりリビアからモーリタニアにいたる北西アフリカ諸国を含んでいるが、狭義ではチュニジア、アルジェリア、モロッコの3 ヶ国。

16）イスタンブールの旧称。

17）イズミルの旧称。

18）Gonzalo de Illescas. 1606. *Historia pontifical y cathólica,* Barcelona: Iayme Cendratを参照せよ。著者は実業家。当時レバントを旅して、セファルディーの生活を観察して記述した著書は、当時のセファルディーの言語生活を知る上でも貴重な資料になって

いる。

19) 16世紀と17世紀に、イベリア半島からセファルディーとコンベルソが北欧の低地地方にも避難し、そこに定住した。彼らは特にオランダの経済と文化の発展に大きく貢献した。活発な出版活動も行い、多数のスペイン語の本を刊行している。彼らは日常語には当初スペイン語が使用したが、17世紀になるとポルトガル語を話すスペイン＝ポルトガル系ユダヤ人が増加したので、日常語はスペイン語からポルトガル語に替わり、これがおよそ19世紀までつづいた。

20) 日本では、滝川（1994）、小辻（1965）、児玉（1992）、宮前（1992）さらにエルサレムに住む笈川（1986）はラディノ語の名称を使用している。一方、上田（1992）は「ジュデズムという名称は、ビルンバウム（S.A. Birnbaum）によって、1939年に提唱されて以来、学術用語として定着している。」としてジュデズモの名称を、原（1982）はユダヤ・スペイン語の名称を用いている。

21) 集まりの意で、礼拝や学習を目的とするユダヤ教の教会堂。

22) イタリアに避難し定住したセファルディーは特に貿易に従事し、リオルナとフェレーラは経済繁栄とともに、活発な出版・文化活動が行われた。スペイン語の本も多数刊行され、なかでも1553年にフェレーラにおいてラテン文字で出版されたラディーノ語聖書は有名である。

23) モロッコのスペイン保護領内に位置する。1471年に建設された。

24) 1492年にスペインから追放されたセファルディーの存在はスペインでは長い間忘れられており、彼らの存在がスペイン人の間に知られるようになったのは、19世紀半ばにスペイン軍がアフリカに上陸し、テトゥアンを占領した時であると言われる。

25) 主に事実や伝説をテーマに、中世以後スペイン文学で広く行われた1行8音節の物語詩のこと。

26) ロペ・デ・ベガ（1562-1635）はスペインの詩人・劇作家。黄金世紀の国民演劇の創始者として知られる。

27) ヘロニモ・マルティネス・デ・リパルダ（1566-1618）はスペインの作家・イエズス会士。特に著書『キリスト教の公教要理と簡潔な解説』（1628）で知られる。

28) スペイン最初の憲法で、1812年3月、大西洋岸の古都カディスに招集された国民議会において成立したところから、カディス憲法とも言われる。

29) ラモン・センデール（1902-1982）はスペインの作家。戦後はアメリカ合衆国に亡命し、大学でスペイン文学を講じながら作家活動を続けた。

30) ロマンス語諸語の一つ。スペインのカタルーニャ地方、バレンシア地方の大部分、アンドラ、フランスのルシヨン地方、イタリアのサルデーニャ島北西部の町アルゲロで使用される。言語人口は約700万人。

31) スペイン北東部のアラゴン地方の一部の地域で使用される。

32) スペイン北西部レオン地方で使用される。

33) ロマンス語諸語の一つ。ポルトガル、ブラジルのほか、アラゴン、モザンビークで使用される。言語人口は1.6億。

34) スペイン北部のアストゥリアス地方で話される。

35) ロマンス語諸語の一つ。スペインの北西部ガリシア地方のほか、アストゥリアス、レオン、サモーラの西側地域でも話される。言語人口は260万。

36) インド・ヨーロッパ語族のヘレニック語派に属す。言語人口は約1,000万。主としてギリシア、キプロスで話される。

37) 南スラブ諸語の一つ。言語人口は約850万。ブルガリアのほか、ソ連邦、ユーゴスラビア、トルコ、ギリシア、ルーマニアで行われる。

38) バルカン・ロマンス諸語の一つ。言語人口約2,000万。ルーマニアを中心にソ連、ユーゴスラビア、ブルガリア、ギリシア、アルバニアで使用される。

39) 南スラブ諸語の一つ。言語人口は約1,800万。ユーゴスラビア、セルビア、クロアチア、ボスニア、ヘルツェゴヴィナで行われる。

40) チュルク系諸言語の一つ。言語人口は約5,000万。トルコ共和国のほかギリシア、ブルガリア、ユーゴスラビア、キプロスで話される。

41) フランスに住むユダヤ人青年知識人たちは1860年にパリに集まり、レバントと北アフリカに住むセファルディーに西欧文明を普及すべく世界イスラエル同盟を創設した。同盟はイスタンブール、アドリアノープル、サロニカなどに学校を建設し、1910年には116校を数えたと言われる。学校には上流階級の子弟が通い、授業はフランス語で行われ、セファルディーの言語文化の西欧化が急速に進んだ。

42) イタリア文化とイタリア語の普及を目的に1889年にローマで創設され、その学校がオスマン帝国の大都市とくにサロニカとイスタンブールでも設立された。世界イスラム同盟の学校が建設されるまでは、同協会の学校がセファルディー世界の西欧化に一役買っていた。

43) ベニト・ペレス・ガルドス（1834-1920）は19世紀スペイン最大の小説家、劇作家。

44) ブラスコ・イバーニェス（1867-1928）はスペインの自然主義作家。

45) トマース・ボラース（1891-1976）スペインの小説家、詩人、劇作家、ジャーナリスト。

46) José Benoliel "Dialecto judeo-hispano-marroquí o Haketía" *Boletín de la Real Academia Española*, XIII, 1926, pp.209-233, 324-363, 507-538; XIV, 1927, pp.137-168, 196-234, 357-373, 566-580; XV, 1928, pp.47-61, 188-223; XXXII, 1952, pp.255-289.

47) アメリコ・カストロ（1885-1972）はスペインの歴史家、文献学者。

48) スペインの南端に、高い岩山を抱えた小さな半島が突き出ている。これが英国領ジブラルタルである。住民はわずか3万人あまり。スペイン系のほか、英国系、イタリア系が多い。日常語はアンダルシア訛りのスペイン語が主であるが、公用語は英

語であり、住民は英語も完璧に話す。

49) タルムードとは教訓の意で、4-6世紀に編まれたユダヤ教の口伝律法とその注解の集大成。

50) ミドラシュとは探究の意で、聖書の研究、注釈を指す。

51) Elia R. Carmonaが1908年から1931年までイスタンブールで刊行。

52) コンスタンティノープル市内のヨーロッパ人と外交官の居住地区。

53) Moise Leviが1910年から1914年までサロニカで刊行。

54) ケマル・アタチュルクの率いるトルコ革命によって、1923年にトルコ共和国が誕生した。彼は同時に国語改革に着手し、1928年には言語革命を宣言。トルコのトルコ語化の言語政策が進められた。文字改革では、アラビア文字に代ってラテン文字を採用し、トルコ言語学会も創設された。トルコ語が小学校の使用言語になった。セファルディーら少数民族の言語の維持が困難になった。

Arlene Malinowski（1982）は1980年にトルコでユダヤ・スペイン語の調査を行った際、インフォーマントから当時の学校の教師がセファルディーの生徒にトルコ語の使用を諭す場面を伝える次のような話を聞いたという: "Listen, I am going to explain something to you. You were exiled. The language you are speaking is the language of the country you left, of the country that exiled you. It was we who gave you shelter. Spain exiled you. The Spaniards caused you much suffering. They threw you out into the street. It was Turkey, it was the Turkish king that welcomed you here. He said to you: Come, live here, work, eat, drink... You are like brothers. And why do you not want to speak the Turkish language? Isn't the language of a country that exiled you a tainted language? You are wrong to be angry. You were welcomed here. You should speak the language of the land. You are Turks."

55) ユダヤ人の民族解放運動を特に政治活動を通じて実現しようとする一派。

56) 中世にアラビア文字で書かれたスペイン語文。

57) 8世紀から15世紀末までのイスラム教徒支配下で、キリスト教信仰を保ったキリスト教徒モサラベが話していたスペイン語。

58) 中世スペインのアラビア文字で書かれた2-4行の短い詩。

59) 中世フランスのユダヤ教徒の聖書・タルムード学者Rabí Šhelomo ben Iŝaacは、フランス・シャンパーニュ地方のトロア出身である。

60) トルコ共和国では、イスラム諸制度の廃止と世俗的・西欧的諸制度の導入を目的とした一連の改革が行われた。その一環として、アラビア文字が廃止され、ラテン文字を基盤とした新トルコ文字が採用された。

参考文献

池上岑夫ほか監修『スペイン・ポルトガルを知る事典』平凡社 1992

上田和夫「イディシュ語」『言語学大辞典第1巻世界言語編（上)』三省堂 1988
上田和夫「ユダヤ諸語」『言語学大辞典第4巻世界言語編（下-2)』三省堂 1992
笈川博一『イスラエルの国と人』時事通信社 1986
ケラー、ウェルネル『ディアスポラ』上下巻、山本書店、1982
児玉　昇「セファルディム」『スペイン・ポルトガルを知る事典』平凡社 1992
小辻誠祐『ユダヤ民族ーその四千年の歩み』誠信書房 1987（14版）
芝　修身「1492年のカスティーリァ王国におけるユダヤ人追放ー国王の追放理由」アカデミア経済経営学編 73.1981
滝川義人『ユダヤを知る事典』東京堂出版 1993
宮前安子「ユダヤ人」『スペイン・ポルトガルを知る事典』平凡社 1922
原　　誠「言語」『スペインハンドブック』三省堂 1982
Bel Bravo, María Antonio: *Diáspora sefardí,* Mapfre, 1992.
Bunis, David M.: "A Comparative Linguistic Analysis of Judezmo and Yiddish", *International Journal of the Sociology of Language* 1981, 30:49-70.
Díaz-Mas, Paloma: *Sephardim. The Jews from Spain,* Translated by George K. Zucker, The University of Chicago Press, 1992.
Díaz-Mas, Paloma: *Los sefardíes: historia, lengua y cultura,* Riopiedras, 2.ed. 1993.
Gerber, Jane S.:*The Jews of Spain: a history of the Sephardic experience,* The Free Press, 1992
Harris, Tracy k.: *Death of a language: The History of Judeo-Spanish,* University of Delaware Press, 1994.
Malinowski, Arlene: "A report on the status of Judeo-Spanish in Turkey", *International Journal of the Sociology of Language,* 1982.37:7-23.
Quilis, Antonio: *La lengua española en cuatro mundos,* Mapfre, 1992.
Sephiha, Haim Vidal: "La diáspora sefardí y el judeo-español" Felipe Maillo Salgado (ed.): *España. Al Andalus. Sefarad: síntesis y nuevas perspectivas,* Ediciones Universidad de Salamanca, 1990.
Suárez Fernández, Luis: "La población judía en vísperas de 1492. Causas y mecanismos de la expulsión" Henry Méchoulan(ed.): *Los judíos de España,* Editorial Trotta, 1993.

映画作品〈ピト・ペレス、波乱の人生〉(II)

ホセ・ルベン・ロメロ原作
フェルナンド・デ・フエンテス他脚色

片　倉　充　造*(訳)

[訳者解説]

ディアナフィルム社製作／ヘルマン・バルデス（“ティン-タン”）主演

〈ピト・ペレス、波乱の人生〉

共演：アナベル・グティエレス／アンドレス・ソレル／コンスエロ・ゲレロ・デ・ルナ／エドゥアルド・アルカラス／マルセロ・チャベス（“マルセロ”）／オスカル・オルティス・デ・ピネド／ルペ・インクラン／ホセ・ハッソ／ラモン・バルデス／ギジェルモ・ブラボ・ソサ他

原作：ホセ・ルベン・ロメロ『ピト・ペレスの自堕落な人生』

脚色：フェルナンド・デ・フエンテス（ジュニア）／マリア・ルイサ・アルカラ／フアン・ブスティジョ・オロ

撮影：エンリケ・ワラセ

音楽：ルイス・フエンテス・ブレトン

編集：カルロス・サバッヘ

プロデューサー：フェルナンド・デ・フエンテス（ジュニア）

監督：フアン・ブスティジョ・オロ

(物　語)

サンタ・クララ教会の鐘楼にピト・ペレスと“片隅”の詩人が顔を合わせる。この詩人は、飲んだくれでフーテンのピトが何回かに分けてその人生を語って聞かせてくれることを希望し、一話毎にアグアルディエンテのボトルを1本進呈すると約束する。こうしてピト・ペレスは、96度のアルコールで処方を“賑わす”薬剤師助手として、あるいはラテン語入り説教を準備したり、そしてまた、修道僧と偽って布教献金を集めて廻ったりする等、メキシコの小説家ホセ・ルベン・ロメロによって世に送り出された個性的で憎めないやつ。

95分モノクロ作品

ディアナフィルム社製作〈ピト・ペレス、波乱の人生〉ビデオソフト解説より～

※かたくら　じゅうぞう（天理大学助教授）

《後 編》〈ピト・ペレス、波乱の人生 (Las Aventuras de Pito Pérez)〉

46′55″	D. S. 宅にて，P. P. 仲人依頼	ラ・ウアカナ（過去）
	D. S.，Ch. 宅に向かい交渉	
	D. S. の背信　D. S.，Ch. に求婚成立	
51′12″	やけ酒をあおるP. P.	
52′25″	D. S.，Ch. の不幸な後日談［I–⑥］	
	S. R.：あんたの人生遍歴を聞きたいんだよ	
	P. P.：また明日ということに	
	S. R.：約束は約束だ	
54′35″		
55′18″	S. R. とP. P.	
	S. R.：Ch. 以後の話はどうなったのか？	
	P. P.：テカリオからラ・ウアカナへたどり着いた	ラ・ウアカナ（過去）
55′27″	“効能堂薬局”　EX----，EX----，EX----の看板［I–③］	
58′40″	薬剤師夫妻：J. de J. と Da. J. の受け入れ，“gato” 他。	
	P. P. の手際よい働き	
67′57″	J. de J.《病人たちが完治していけば，わしらはどうやって生計を立てていくんだ？！》	
	不倫発覚～ドタバタ	
	P. P. 逃亡	
69′37″	S. R.：薬局以後の展開は？	サンタ・クララ
	P. P. 今日はこのあたりで十分　／S. R. じゃ，また明日。	
70′03″	（酒場にてP. P. の声）	
71′	P. P. ワイン樽をチューブで盗み飲み［I–①］	
	S. R.，店主D. G. とP. P. のもめごとに仲裁	
	P. P. “太陽か鷲か？”（コイン投げ）で決着を主張，D. G. の合意	
72′26″	P. P. の勝利　種明し＝両面“鷲”の偽造コイン	
	（歩きながら物語を始めるP. P.）	
73′58″	S. R.：“務所”の経験は？［I–⑦］	
	P. P.：酔っ払いやちょっとしたいたずらのみで世話になった	
	S. R.：病院の体験は？	
	P. P.：“務所”に始まって病院でおわるエピソードを1つ	
	駅での鞄置き引き→僧服を取り出して偽せ伝道　76′46″	州域内（過去）
79′26″	P. P. の手配書出回る。［I–⑦］	
82′18″	P. P. 焼酎がぶ飲み→逮捕→入牢（所内トラブルで負傷）	
84′41″	（病院内）	
E. P. のプロフィール［II–②］		
Dr. G. のプロフィール［II–②］		
91′24″	P. P.《同じ毒ならテキーラの方を選びますよ！》［I–②］	
	終局部	サンタ・クララ
	S. R.：あんたの人生談を聞かせてほしい	
	P. P.：じゃあ，また別の日にでも，さようなら	
93′19″		
	○ナレーション（語り手＝S. R.）	
94′26″	FIN	

＊P. P.：ピト・ペレス　S. R.：“片隅の老人”　Padre：プレコ神父　D.S.：ドン・サンティアゴ　Ch.：チュチァ　J. de J.：ホセ・デ・ヘスス・ヒメネス／Da. J.：ドニァ・ホビータ（薬剤師夫妻）　D. C.：ドン・ゴジョ　E. P.：看護婦ペラヒア　Dr. G.：医師ガジョソ

《後編》

[大工のドン・ルペルトと]（ピトは“求婚”の返事を待つ間に、近所の大工ドン・ルペルトと何やら交渉を始める。）

PP　：ドン・ルペルト*1。

大工：やあ元気かい、ピト！

PP　：ちょっと急ぎの仕事を頼まれてほしいんだ。

大工：どういう?

PP　：できるだけ早くダブルベッドをこしらえてほしいんだ。

大工：プレコ神父が結婚なさるのかい？

PP　：いや、結婚するのは俺なんだ。

大工：そりゃ、結構だ。

PP　：それで、できるだけ強くて大きいベッドがほしいんだ。普通のやつより、1mほど幅の広いのを。とてもクッションがよくて、頑丈なやつだ。

大工：あの百貫デブの酒場女ドニャ・フスティナといっしょになろうってのかい？

PP　：からかわないでくれよ。

大工：それじゃ、いったい？

PP　：とにかく、俺の酒臭い吐息が届かない大きさのやつがいるんだ。

（DS：それじゃよろしく、お世話になりました。）

PP　：ドン・サンティアゴ！

DS　：おい、まだここにいたのか？

PP　：もちろんですとも、で、申し込んでくれました？ドン・サンティアゴ？

DS　：ああ、申し込んだとも。

PP　：本当に？

DS　：わけないさ。<u>わたしが断られることはない</u>と言ったろう！

PP　：で、結婚式はいつですか？

DS　：すぐだよ、もうすぐ。

PP　：たいへん有り難うございます、ドン・サンティアゴ。あなたは、わたしのキューピットだ！

DS　：どうして礼なんか言うのかね？

PP　：それはまた、何で？どうして？

DS　：ああ、そうか、わかった。うっかりしとったよ！うっかりしてた、まだ話していなかったっけ？つまりね、ピト、大したことじゃないんだけどね、気分を悪くせんでくれよ。

PP　：いいえ、ちっとも・・・

DS　：確かにチュチァには求婚したよ、でも<u>わたしの結婚</u>のためにだ。

PP　：何ですって？どういうことなんですか？

DS　：わたしの結婚だ。よく考えてみたら、きみが結婚するには荷が重すぎるよ。でも、心配いらん、挙式には呼んであげるよ。それじゃあまたね、じゃあ・・・

[酒場にて]
店主：やあ、ピト・ペレス、久しぶりだな、ずいぶん見かけなかったなあ。
PP　：でも、これからはもっとだ！もう戻ってくることもないだろ。
店主：あんた、また、旅に出るのかい？また、どうして？
PP　：それがどうかしたか！ダブル、いや、ツーダブルのテキーラを煽ってから話してやるとするよ。
店主：さあ、それじゃ、やってくれ！（と給仕する。）

〈8〉（画面は、再び鐘楼へ）
PP　：チュチァについてだが、今じゃ、そこいらをウロウロほっつき歩いており、醜く老けて、ノイローゼ気味ってこった。おいらはもう、あいつのことは死んだものとみなして、テカリオを通る度に、花を手向けに彼女の墓[12]へ出向いてやっているのさ。
SR　：彼女はそれを知っているのか？
PP　：おんなたちがそのことを話してやきもきしているらしいよ。一方、ドン・サンティアゴはおいらを見かけると、悲しそうにこう言うんだ。『憎らしい奴だな、あんた、あいつから救われたよ。』それにこうまで付け加えるんだよ。『あんなやつ、いっそ死んでくれてるほうがよかったよ』ってね。なぜかってチュチァは、サンティアゴの財産を全部使い果たしちまったうえに、人生までズダズタにしちまったのさ。
SR　：どうやら、あんたはあまり恋愛には恵まれてなかったようだね。
PP　：ひどいもんだ！恋愛ってのは、おいらを棍棒で叩きのめしてくれるのさ。おそらく、それがもとでおいらは、こうしてさまよう、薄汚い輩なのさ。へっ！それがどうしたい！しょせんつまらん人間としてこの世にいるんだ。働かないからって、どうだというんだ！だれもおいらに養ってもらってるわけじゃなし・・・
SR　：わたしは、あんたを認めとるよ。
PP　：煩わしいもんだなあ・・・
SR　：世間の評価って。
PP　：あんた、自分が暖めてもらったからとて、お天道さんにたいへん感謝してるそうした連中知ってるだろ？確かにおかげで、子供の頃は学校へ行き、大きくなったら兵士になって、結婚したら妻を寝とられて、死んでみたら地獄落ちの人間。お天道さんが暖めてくれたからとて、何を感謝すべきなんだ？[13]
SR　：そりゃわかるが、わたしはあんたの人生遍歴（andanzas）について聞かしてもらいたいと思ってるんだ。
PP　：そうかい、じゃあ、明日にな。もうしゃべり続けてのどが渇いたよ。
SR　：まあ、約束は約束だから、これ、ボトル代だよ。何がおかしいんだよ？
PP　：空腹者には簡単に食前酒くらいは与えられるが、なかなかパンのかけらは巡ってこないものさ。
SR　：それもそうだな。

PP　：でも気にしてもらうこともないよ、“片隅”の旦那。俺は、パンよりタングアルニス[4]の方がいいんだ。
SR　：じゃあ、また明日。
PP　：ああ、今度は前以てボトルを持って来て下さいよ。過去を話すってことはね、“片隅”の旦那、死人を復活させるようなもんだが、おいらは、そういう死人たちと話するにゃ、酔っ払ってることが必要なんだ。

〈9〉[翌日、鐘楼にて]
SR　：ピト・ペレス、ここにボトルを持ってきたぞ！
PP　：やあ、旦那。
SR　：あんたが約束を真に受けてくれて嬉しいよ。
PP　：ボトルにゃとてものありつきたかったんでさあ。
SR　：わたしは、あんたの人生のこと、ずぅーっと知りたくてねえ。
PP　：暇つぶしのすきな御仁だ。(ボトルを差し向け) やりますかい？
SR　：いや、けっこう。チュチァとの破局のあとはどうなったのか、聞かせてよ！
PP　：そりゃとてもつらい気持ちでテカリオを出たんだ。そうしてやっとのことでやせ細りながら、ラ・ウアカナへたどり着いたんだ。まだ遍歴する［ラ・ウアカナ〈10〉にて］つもりだったんだが、腹ぺこのまま、とある薬局の前へ出てしまった。
効能堂薬局 ホタ・デ・ホタ・ヒメネス
元 (Ex) グアダラハラ薬学学校出身
元 (Ex) サン・フアン・デ・ディオス病院薬剤師
元 (Ex) ドン・プロスペロ・ロペス師 門下生
薬剤師助手募集
PP　：あほか！ (Extúpido) 格好つけやがって！ (とつぶやいている。)
女主人：はい、下剤よ！
PP　：おはようございます、下剤は今のところいらないんですよ。
女主人：あなた、ドニャ・ペトゥラのところの若い人じゃないの？
PP　：違いますとも、おねえさん。
女主人：おねえさんじゃなく、おかみさんよ！
PP　：わたしは職を求めてきた者ですよ。
女主人：ホタ・デ・ホタ！仕事のことで1人来てるよ！
主人：すぐ行くよ！　(その直後) ああっ、ホビータ！ホビータ！
女主人：またなの・・・どうしたのよ！？
主人：わからんか？立ち上がろうと思って踏ん張った途端にイスが壊れた。
女主人：壊れたのね・・・
PP　：そうですよ、この頃の家具ときたら、昔ほど強くない。
女主人：それに値段だって高いしね！
PP　：高すぎますよ！わたしもある時、ダブルベッド買おうとしたんですが、まあ、使

いはしませんでしたが・・・
主人：助けてくれ！自力（独り）じゃだめだ！
PP　：こりゃ、たいへんそうだ。
女主人：鈍臭いのよ。
主人：起こしてくれ！
PP　：じゃあ、とにかくやるだけやってみましょう。いっしょに引っ張り起こして下さいよ！で、ガトはどこに？
女主人：ええ、いますとも。でもいつも屋根裏部屋ウロついているわよ。
PP　：違いますよ、このトラック（巨体）を起こすガト（ジヤッキ）〝のことですよ。
女主人：それならないわ。
主人：このバケツの野郎！それに！・・・
女主人：落ち着きなさいよ。
主人：あんたが、助手の仕事を求めてる人か？
PP　：はい、何でもやりますので、ご主人さん。
主人：どんな処方を知ってるんだ？
PP　：そうですね、丸薬ならできます。
主人：それだけか？
PP　：米国でのパテントの薬。
主人：それから？
PP　：薬学一般その他。処方を調剤するには、値段の安いものでその成分を差し替えておくことも知ってますよ。
主人：炭酸水素塩は色鮮やかなものと。
女主人：抗生物質には砂糖を。
PP　：などなど・・・医者はいつも入手しにくいものを処方したりするのだが、調剤室に薬があまり見当たらないときでも、我々薬剤師は病んでる人たちを守ってやらねばならず、医療を簡素化することで、犠牲者の数をより少なく抑えていくことになる。病人たちの目を楽しませてあげるのに、色とりどりの生薬もある。
女主人：バラシロップに、グーズベリーに・・・
PP　：植物の緑色は、丸薬の緑を宝石に変え、アクセサリーや宝石で男度もの関心を引きつけるように、こぞってこうした薬を服用する。
主人：よし、納得した！
女主人：ええ、納得したわ！
主人：ここにいてくれ！

[店内での働きぶり]
幼女：ワセリン、10センで・・・
PP　：はい、ただいま、（と取り出し）5セン2枚持ってない？（支払い）お相子、お相子！（と売上の半額を着服）
婦人：あのねえ、

PP　：何でしょう？
婦人：トルーバルサムのシロップ20センタボでちょうだい。
PP　：はい、ただいま。（調剤室で、シロップに水道水を混ぜてから、表の客に差し出す。）
婦人：ねえ、ちょっと、ずいぶん水っぽいんじゃないの？
PP　：もちろんですとも、おもゆじゃありませんからね。
婦人：でもほんと水っぽいわ！
PP　：水ってのは、あらゆる種類の病気に効く最高の自然療法だって知っといて下さい。はい、20センタボ。10と10でお相子・・・（とまた、半額を横領）
女主人：ずいぶん働くのね、ピト！？
PP　：まずまずですよ・・・（女主人の方は、表の扉を閉めてしまう。）
女主人：店を閉めてちょっと休憩しましょ。
PP　：わたしは疲れてません、ドニャ・ホビータ。
女主人：あなたもわたしのことドニャと呼ぶのね、馬鹿にしてるのね・・・
PP　：いいえ、違いますとも、敬意から・・・
女主人：じゃ、気にいらないからただのホビータと呼んでよ。
PP　：そんなのできませんよ。
女主人：でも、どうしてなの？
PP　：どうしても、そうなんです。
女主人：事務処理なんか午後からでも手伝って上げるわよ、ピト。
PP　：はあ、ホビータ。
女主人：あんたに想像できないでしょうけど、わたしってかわいそうなのよ。ああ、痛い！とっても気分が悪いの・・・
PP　：どこか、痛むんですか？
女主人：方々痛むのよ。
PP　：季節の変わり目でしょう。
女主人：よくわからないわ。以前はこんなことがなく、とても元気だったのに。
PP　：それはよくわかります、わかります。
女主人：まるで別の人生だったわ、あちこち出掛けてた・・・
PP　：ほう？
女主人：パツクァロにも、モレリアにも、タンスィタロにも訪れたわ。旅行して、そして、いつも旅行して・・・
PP　：疲れませんでしたか？
女主人：世の中にはね、いくらしても決して疲れないことってあるのよね、そう思わない、ピト？
PP　：はあ、ホビータ、世の中にはそういう物もあります。
女主人：わたしは、とっても旅行好きだったの、あなたは、ピト、旅行が好きじゃないの？
PP　：ええ、行けるものなら好きですけど・・・

女主人：ああ、でも、ずいぶん旅行してないわ。
PP　：どうして、また？
女主人：わからない、ホタ・デ・ホタが太っちゃってからはね、ずぅっと太りっ放し。でもね、（略）以前はもっと活動的で旅行したものだけど・・・今じゃ自力ですら起き上がるのが一苦労なのよ、わかるでしょ。
PP　：そう言われてみれば、ホビータ。
女主人：わたしは、ますますダメになっちゃうわ。
PP　：アスピリンは？
女主人：いえ、ちょっとの間、横になるわ・・・
PP　：どこで横になるんですか？
女主人：ここ、店の奥の部屋で。（略）（と裏の部屋へ）ピト！ピト！
PP　：はあ、行きますよ、・・・行きます・・・行きますとも、はい、わかりました。
女主人：塗り薬の小瓶をとっていたわってよ。
PP　：はい、奥さん、ここにあります。
女主人：ピト。
PP　：はい、奥さん。
女主人：こっち、来てよ。
PP　：では、おっしゃる通りに。
女主人：ねえ、お願い。
PP　：何でしょう？
女主人：ひとりじゃ、背中へ届かないのよ、あなた、マッサージしてよ。（言われる通りにするピト）そうよ、ペピート。
PP　：はい、奥さん。
女主人：気を遣わなくていいのよ、とどのつまり、薬剤師はお医者のようなもので、あたしは、患者でしかないのよね。
PP　：でも、・・・
女主人：座わんなさいよ、さすってよ、ピト、ねえ、もっと強く、ピト・・・（但し、画面はもはや2人のやりとりを直接描写せず、対話だけが流れている。）

[店の前にて]
男客（タチョ）：こんにちは、ピト。
PP　：やあ、タチョ、で、奥さんの具合はどう？
タチョ：もらってる薬でとてもよくなったよ。
PP　：よく効きましたか？
タチョ：ああ、よく効いたよ。一口飲む度にますます元気になっていくよ。
PP　：言った通りでしょ。
タチョ：表に楽団が来たときなんか、むくっと起き出してモレリアのダンス“を踊りだすくらいさ。
PP　：そうだろう！目覚めは二日酔いしてないかい？（と小声で）ああ、いやいや、何

でもない・・・
タチョ：だから、同じ薬を調合してもらいたいんだ。
PP　：でも・・・、わかりました、ドン・タチョ、はい、ただいま！（と調剤室へ）シロップ少々＋（95度）アルコールたくさん（を混ぜてから店頭へ）はい、2ペソです。
タチョ：ありがとう。
PP　：こちらこそ。（と札2枚を手にして）お相子じゃなくもらっとこう。
婦人：こんにちは、うちの夫の薬またお願いしたいの、不眠症の薬。
PP　：どうですか、よく眠れましたか？
婦人：そう思うわ。よく効く薬ね！そうそう、薬をせがまれて、せがまれて・・・ぐっすり寝込むのよ。
PP　：はい、わかりました。
婦人：ドン・ホタ・デ・ホタ！（と常に安楽椅子に惰眠を貪っている店主に話しかける）
主人：どうかしたのか？
婦人：こんにちは、ご機嫌いかが？
主人：見てわからんか？！寝てるんだ！
婦人：でも、あんた、四六時中寝てるじゃない、だからそんなに太るのよ。（ピト、再び店頭へ現れる。）
PP　：2ペソです、ドニャ・チョナ。
婦人：じゃあ、また明日、ちゃんと作っといてね。
PP　：ご安心を。ドン・ホタ・デ・ホタ、アルコールがまたきれました。
主人：缶を開けたらいいじゃないか！
PP　：ドン・ホタ・デ・ホタ、缶のも全部なくなってるんです。
主人：缶もだと・・・
PP　：アルコールは、薬の基礎成分ですから・・・
主人：よし、わかった。注文するのを忘れないでくれ。でもなあ、あんたがここへ来て以来、この薬局で調剤される病人たちは、元気だな。
PP　：いい腕を持ってるってことですかね。
主人：でも、それほどいい腕でなさそうだぞ。問うのは、もし病人たちが完治していけば、わしらは、どうやって生計を立てていくんだ？！
PP　：ああしまった！そこまでは考えつかなかった・・・　（ホビータ登場）
女主人：ああ、ホタ・デ・ホタ、日に日に悪くなってるみたい。
主人：また、痛むのか？
女主人：ええ、ちょっとマッサージが必要なのよ。
主人：困ったやつだ。我慢できんのか？
女主人：気休め程度にはなるわ、ねえ、ピト。
主人：よし、じゃあうちの女房のマッサージしてやってくれ。何でもないさ。あんたでないとダメらしいよ。
PP　：それじゃ、失礼して、ドン・ホタ・デ・ホタ。（こうしてピトと夫人は奥の部屋

へ入っていく。）
（その後、客たちが立て続けにやって来る。）
客（娘）：丸薬3つね、ドン・ホタ・デ・ホタ。
客（青年）：リボフラビン1ペソで、マリアのやつ。
客（婦人）：アミド1瓶ちょうだい、急いでるのよ！ずっと待ってるのよ！
客（青年）：僕の方が先だ！
客（娘）：わたしもお母さんが待ってんのよ！
主人：わかった、わかった、待ってくれ、待ってくれよ。わしは、てきぱきとやれるわけじゃないんだ。
客（少年）：モレヒアの・・・ちょうだい。
主人：こりゃいかん。ピトを呼びにいくとしよう。（と奥の部屋へ向かう。そして、不倫現場を目撃して）ピト！！この恩知らずが！！！（ドタバタの末路）

〈11〉［ピトと“片隅”の詩人］（再び鐘楼の上にて）
PP：あのおめでたい夫の激怒が恐ろしくて、おいらは、ラ・ウアカナからは永久に逃げ出すはめになり、あのプティファル"の女房との一件を忘れるのに、再び、メシなし、職なしの宿なしになっちまったんだ。
SR：あんたって、すごいんだなあ（grandioso）・・・
PP：それも言うなら、“滑稽”（gracioso）だって。他人の情とお恵みで暮らしてんだもんな。
SR：それで次はどこへ行ったの？薬剤師夫人との恋の後は？
PP：きょうはこれで十分さ、そう思わないか？
SR：それじゃ、また明日。
PP：じゃあ、また明日、“片隅”の旦那。(Hasta mañana, Señor del Rincón.)

〈12〉［ドン・ゴジョの店にて］（最初は、ピトの話し声だけが聞こえている。）
PP：ドン・ゴジョ、そんなことないさ。わけのわからんことを言うなよ、全く・・・
DG（店主）：これは、ひどすぎるぞ、こんなに人を馬鹿にしやがって！おまえなんか、刑務所行きだ！
PP：まさか、あんた、おいらが“刑務所”で驚くとでも思っているのか？
SR：ところで、どうしてピト・ペレスを投獄しなきゃならんのかね？
PP：ちょっとしたシャレをしでかしたんでさあ。
DG：ちょっとしたシャレだって？ペテンじゃないか？
PP：ああ、ユーモアのわからん人だ！
DG：これほどわたしを馬鹿にする奴はいない！
PP：ここにいるじゃないか！
DG：ほんとにどうしようもない奴だ！
SR：よし、よし、どうしたというんだね？
DG：わずかの酒の注文で、なぜあれだけ酔っ払っちまえるのか、よくよく考えてみり

ゃ、驚くには当たらないってことですよ。毎日、この同じ場所から立ち上がって、すっかり酩酊してるんだ。

PP ：別に当たり前のことじゃないか！

DG ：わたしがほんのちっぽけな酒しか給仕してなかったにもかかわらずだ。

PP ：ほんとにわずかなもんだ。

SR ：正直なところ、まだよくわからんな・・・

DG ：あのねえ、ちょっと待って下さいよ、わずかの酒で酔っ払っちまうなんておかしいでしょう！？

SR ：そりゃ、そうだな・・・

DG ：じゃあ、じぃーっとこの男を見ててもらいたい！今し方、気がついたんだ。（とピトの口もとから上着のなかを伝ってチューブが酒樽につながっていること*を指摘する。）どうです！このチューブはどこから来てますか？さあ、しっかり見てやって下さいよ！どこにつながってるか！？どうです？！

PP ：よくできてるでしょ、ええ？／ingeniosillo／

DG ：この恥知らず！いつ樽に穴を開けやがったのか、全くわからんよ。

PP ：おいらにゃ、それがわかっているさ。

DG ：あとでカンペチェのロウでふさいどいて、また次の日、飲みに来るんだ。

PP ：あんな樽なんて1日で空っぽだって言ってほしいな。

DG ：おまえが飲み干したのだろ！

PP ：ちょっと待った。また、濡れ衣だ！おいらはもう、こんなケチな店の客なんかやってられんよ。

DG ：“片隅”の旦那、こういうふうにしてまた、面倒かけるんですよ！

SR ：まあ、落ち着いて、わたしの勘定につけといてくれ。

DG ：あなたのお勘定ですか？“片隅”の旦那。

PP ：嫌だ！絶対に！

SR ：おい、どうしてなんだ？我々は親友同士だろ！

PP ：でも、俺のプライドが許さない。

DG ：ほう、馬鹿なことを言うな！

PP ：おいらは、たかり屋じゃない。

DG ：そうじゃないか！

PP ：おいらは、自分の借金くらい、いつも自分で支払うのさ。口から出まかせ言ってきたし、おとし話のようなことも語ってはきたけれど、でもおいらは自分で支払ってる。

DG ：相手にしないで下さいよ、“片隅”の旦那！お勘定お願いしますよ。

SR ：でもなあ、ピト・ペレスが承知しないぞ・・・

PP ：よし、じゃあ、別の手立てがある。

SR ：どういう？

PP ：そんな厄介なことじゃないさ。ドン・ゴジョ、（勝負する）勇気はあるだろうな！

DG ：あり余ってら！
PP ：絶対にだな！
DG ：絶対だ！
PP ：ようし、じゃあ、硬貨を投げて命運を託すことにしよう！
DG ：どういうことだ？
PP ：もちろん、樽酒代のことだが、もしおいらが勝てば、あれはチャラだ。もしおいらが負ければ、あの、“片隅”の旦那、すみませんが、どうか支払いを立て替えてもらいたい。
SR ：喜んで。
DG ：やってみよう。
PP ：“鷲”だと俺の勝ち、“太陽”だとあんたの負けさ。
DG ：おいちょっと待った！“太陽”だとこっちの勝ちだ！
PP ：そう言ったろ、“太陽”なら俺の勝ち、“鷲”だとあんたの負けさ。
DG ：ようし、でも、“片隅”の旦那に投げてもらわなくちゃ。
PP ：旦那、お願いします。（結局、“鷲”が出る。）
SR ：畜生！！
PP ：“鷲”だ！“鷲”だ！勝ちましたよ、旦那！
SR ：潔くするもんだよ。（とDG.をたしなめる）
DG ：でもなあ、もう二度と顔出すなよ、ピト！
PP ：どうして、二度と来るもんか！だってもう樽が空いちまってるのにさ・・・
DG ：この！（と、なおもいきり立つDG.を尻目に2人が店を後にする。）

SR ：じゃあ、これからは、我々の約束の時間だ、ピト・ペレス。
PP ：じゃあ、歩きながら・・・
SR ：硬貨は返しとくよ。ちょっと待った、待った・・・
PP ：はい、はい！（と硬貨を手渡すと、SR.は、それをじっくり吟味する。）
SR ：両面とも“鷲”だな、こりゃ・・・
PP ：これは、独自のお手製のペテンでしてね・・・
SR ：返すよ！

〈13〉（歩きながら）
PP ：いいえ、“片隅”の旦那、おいらは決して盗みはやったことがない。それは、神の許しを得てもたらされた恵みを貸し与えて頂いているものなんですよ。おいらは、だれからも何の盗みも働いたことはない。万物の創造主であり、作り手である絶対主に熱心な祈りを先に捧げてあるのさ。だから、主がそのときお認めになれば、おいらは必要なものをもらっていくことになるんだ。それがもし、持ち主にお知らせになれば、それができないことになるんだ。
SR ：そりゃ、結構。
PP ：アグアルディエンテのおかげだよ。

SR ：ちょっと失礼な質問だけどね、ピト・ペレス。“務所”を多く体験したことがあるって本当かい？

PP ：ああ、でも田舎ばかりさ、“片隅”の旦那。おいらは大都市にある近代的な“務所”でお世話になる幸運にありついたことがないんだ。そういう所じゃ、すべてが快適で、有力者の囚人たちは、ラジオを持ち込んだり、毎晩、外出許可をもらっているがなあ。

SR ：ということは、何回もお世話になったってことかい？

PP ：ああそうだよ、でもそれをうちあけたって恥ずかしくなんかないよ。だっておいらは、酔っ払いやいたずらでのみ、世話になったんだ。金持ち連中に与して、貧乏人たちを長期刑に押しやるような、そんな犯罪はやっちゃいないんだからな。

SR ：酔っ払いといたずらのみってことか。

PP ：まあ、それと他人の所有物には敬意を払わなかったな。別に、哀れになんて思ってもらわなくていい。つまり、所有物なんて相対的なものに過ぎないんだから。

SR ：だいぶ、入れられてたの？

PP ：いや、それほどじゃない。田舎の“務所”って俺に欠けてる、何かそういう家族的な雰囲気があってね。こんなこと、先ずよそじゃ考えられんことだが、それぞれの家からもってこられるごちそう（差し入れ）は、他人さんにも分け与えられるんだよ。それにまた、毛布持ってない者には、母親を思い出させて暖かくさせてやるんだ。つまり、囚人同士で助け合う方法を知ってるのさ。

SR ：サン・ビセンテ・デ・パウル病院のことは？

PP ：病院でも同じことが言えるよ。

SR ：いくつかは、体験したの？あんたは、そんなに病気勝ちなのか？

PP ：そりゃ、まあいろいろとね・・・それを語るだけでも笑い話だよ。そう思わないか？おいらが助からばならなかったのは病気なんかじゃなくて、空腹と医者からだったんだ。

SR ：医者って連中たちは、

PP ：そうだ、あいつらは、いつだって患者のことを、実験室にモルモットを持ってくように扱う奴らに他ならない。

SR ：さあ、そのことについて話してもらえるかい？

PP ：それじゃ、“務所”に始まって病院に終わる顛末[10]についてお話してみようか？とあるとき、おいらは、駅でスーツケースをみつけたんだ。

SR ：手回しオルガン同様[11]にだな！

PP ：その通りなんだが、いつもいいものにありつけるとは限らないんだ。あんた、その中味わかるかい？ドン・フアン・テノリオの衣装、カツラ、あごヒゲ、口ヒゲ、それにカルメリタ修道会の僧服、・・・とそいつはコメディアンの鞄だったんだ。

SR ：じゃあ、それが全部役立ったわけ・・・

PP ：そうじゃない、そうじゃない。中味がわかりゃ、鞄はボトルに代え、僧服は、一儲けしてやろう[12]と持ち出してやったんだ。

〈14〉[辻説法]（僧服をまとったPPが広場で聴衆を集めて説教している。）

PP　：信じられよ、さあみなさん、信じられよ。ボヌン・ビヌン・テキラリウム、エンプハリウン・サヒタリウム・コンスマクメス。誠の信仰のうえの最大の苦悩を想像できますか？中国人たち、あわれな中国人たち、かくも信仰から遠き人々を救おうではありませんか！我々キリスト教徒の理解が、無知なる者を開いてやるのです。我々は、中国人たちを我々の教えに改宗させなければならない、そうでしょう！でもみなさん、この世間には、何かゆとりのようなものがあり、お金なんてかからないと、たぶん思っておられることでしょう。1人の中国人が無償でも改宗するものと、きっとお思いでしょう。とんでもない！お金はかかるんです！たくさんのお金が！そのうえ中国人たちは、わんさか大勢いるんですよ。1人1ペソかかったとしても、相当なもんでしょう。さあ、みなさん、ご協力を！中国人救済にどうかご協力を！！あなた方の浄財で、中国人救済による徳が積めるのですよ。さあ、献金を！ありがとう、たいへんありがとう、接吻よりもどうかお金を！（と“献金”を集めていく）

婦人：神父さん。（とPPに詰問があり始まる。）

PP　：何か？

婦人：あなた、あちらにおられたんでしょう？

PP　：どこに？

婦人：中国にですよ！

PP　：そんな遠い所・・・

婦人：でも、行ったと言わなかった？

PP　：そんなに遠い所へ行くと、信仰にはそうそう打ち込めません・・・

婦人：ということは、中国にいらしたのね？

PP　：そうですも、わたしはあちらから伝道のためにやって来たのでして、うちの伝道団の資金が尽きて、帰国しなければならならなったということです。

婦人：じゃあ、ずぅっと歩いてらしたの、神父さん？

PP　：ええ、歩くときもあれば、バスに乗るときもあり。我々清貧な伝道師たちにごちゃごちゃ言わないこと！

婦人：じゃあ、中国人ってどんなのです、神父さん？

PP　：やはり、目が切れ長でね・・・（と右目を右手で引っ張って見せる。）

婦人：そんなこと知ってるわよ！

PP　：じゃあ、どうしてそんなこと聞くんだ？

婦人：弁髪してるってほんと？（coleta）

PP　：みんなじゃないさ。何人かは、もう闘牛をやらない。coleta [13]

婦人：なんですって？

PP　：弁髪してる者もいれば、弁髪してない者もいるって言いたいんだ！ところであんた、もう献金したの？

婦人：わたしは、してないわ。

PP　：じゃあ、支払いなさい。中国人たちゃ、ひとりでに助かるわけじゃない。（しぶ

しぶの献金に）また、薄汚い金だなあ、値打ちなしだこりゃ・・・

〈14'〉[PPの手配書出回る]
制服：エソーッ、エソーッ
上司：そりゃ、何のことだ？
制服：エソルト
上司：エクソルト exhorto （司法共助要請）
制服：エクソルト、ヘスス・ペレス・ガオナを逮捕されたし、偽伝道師でカルメリタ派僧服。個人的特徴＝通称ピト・ペレス R.イトゥルビデ　モレリア市長[14]

〈14〉["極東の栄光"]（酒場の前で僧服姿のPPが酒を手に入れようと子供を利用するシーン）
PP　：おい、チビ、こっちへ来い！いいか、ここへ入ってアグアルディエンテ1本買ってくること。（怪訝そうに見られて）おい、そんなふうに見るなよ！地獄はそうした悪い考えでいっぱいだぞ！これは、マッサージ用なんだ！
子供：足にかい？神父さん。
PP　：足にだ！たくさん歩いてとても疲れていると思ってくりゃいい。
子供：神父さんて、何て間抜けなの。飲んだほうがいいに決まっているでしょ。
PP　：おい、おまえ、わたしのような聖人を、たぶらかそうとするんじゃないぞ！小さいときからそんな考えで、大きくなったらどこへ行く？
子供：酒場へ行くよ、神父さん。
PP　：もう、つまらんことを言うな。アグアルディンテを買いに入っても、わたしのためだと言っちゃいかんぞ！ごちゃごちゃ言う奴が出てくるものなんだ。だから、この新聞で包んでもらって、そぅっと持ってきてくれ！ここで待ってる、早く行け！
（通行人有り）
PP　：積み深き者たちを見守っているのです。じゃあ、ご機嫌よう。では、また、神の祝福あれ！（と往来の人々を煙に巻く。そして、子供が言い付け通り、ボトルを携えて戻る。）ようし、神の恵みがあるぞ、坊主！ほんとにおまえは、よくやってくれたもんだ！（子供が片手を差し出して駄賃を要求し続けているのを無視しながら）あれ、おまえは不満がありそうだな。これは、しかし、おまえの極東布教への協力になるんだ。もういい、坊主、あっち行け！向こう行け！（とねだる子供をけしかける。）
[警察署付近にて]（それと気づかず、アグアルディエンテをラッパ飲みしているPPが、署員に発見され、追い回された揚げ句、逮捕される。）

〈15〉["務所"（留置所）内にて]（所内では、左派と右派が反目しあっている。）
警官：新入りだ！
左派：何だ子りゃ、おい、また1人入ってきたぞ！言っとくがなあ、俺は反教会派の市

民なんだ！
PP　：わたしもです。（と僧服姿のまま、同調する。）
右派：心配いりません、神父さん。我々は敬虔な信者です。あなたをお守りしますとも。
PP　：はい、どうか、よくお守りください。この人たちは、とても乱暴なようですので・・・
左派：あんたたちゃ、関係ないだろ、何もこれがはじめての坊主じゃなし・・・
右派：（略）
PP　：いがみ合う必要はありません。おいらは、修道僧じゃありません。
一同：何だって！？
PP　：ちょうど坊さんのふりして、方々を行脚してたら、ぶち込まれたんだ。
右派：ということは、神父でも、修道僧でもないと・・・
PP　：何の関係もありません。
左派：じゃあ、どうして変装なんかして歩いてたんだ？
PP　：そりゃ、お恵みを集めて廻るためですよ。（左派の者が大笑いし、握手を求める。）
右派：恥知らずな奴だ！おまえ（左派）には、関係ない！こんなふざけた野郎は初めてだ！（と殴り掛かり、一同入り乱れての乱闘になる。）
左派：ちょっと待った！ちょっと待った！（と倒れ込んでいるPPを抱き抱えながら）こりゃ死んでいるんじゃないのか？（そのほうがいいんだと右派の声）
PP　：ああ、死んじゃいないけど、・・・死にかけだ・・・ああ、あばら骨が痛い・・・
右派：おい、一口飲んでみろ！
PP　：一口だって？！・・・
右派：元気が出るかわからんし、そしたらまた、闘いだ！
PP　：闘いなんてとんでもない。
左派：飲めよ、なあ・・・
右派：ぐっといけ！
PP　：それじゃそうしよう・・・

〈16〉［病院にて］（所内のトラブルに巻き込まれて負傷し、気がつけば、病院に収容されていたPP）
PP　：だめだ、目はだめだ、・・・そうだ、目は何でもない・・・（うわ言を言っている。）
EP：このろくでなしが・・・（とPPのベッドを見守りながら）
PP　：ああ、あばら骨が痛い！・・・
老患者：肋骨がどうかしたんかね？
EP　：何本かがよじれてるのよ。
PP　：ああ、痛い、痛い、痛い！
EP　：酔っ払いの二日酔いでしょ。でなきゃ、ただの馬鹿でしょ。
PP　：ここは、どこなんだ？

EP　：ガジョソ博士の慈善病院よ。あんた、どこの人よ？
PP　：今、思い出してる・・・
EP　：たまげたよ。ある晩、とてもひっぱたかれてここへ連れて来られたのよ。かなり、ぐったりしてたよ。でも、ここじゃどこよりも治療してもらえるよ。何の心配もないよ。さあ、排便してよ・・・（とそのまま立ち去る。）
PP　：ちょっと熱心過ぎる看護婦だなあ。
老患者：だろう、ペラヒアって言うんだ。
PP　：きれいな名前だ！
老患者：山奥から連れて来られて、その日のうちに看護婦資格を取り、病院の下働きとして入ってきたんだ。
PP　：ああ、そうかい！
老患者：雑巾を持つ代わりに、白い帽子を与えられたんだ。そして、あのエプロンに身を包み、所定の勤務をしてるんだが、病人たちにゃ、不人気なんだ。
PP　：あなた、よくご存じだね・・・
老患者：あんたもそのうち、よくわかることだろうよ。わしは、このれん獄に何カ月といるんだが、生き残る者はせいぜいで、多くは死んでいくんだ、殺されるというわけじゃないんだけど・・・
PP　：こりゃ、まいった・・・
老患者：院長のガジョソ博士はすばらしい博識なんだが・・・
PP　：そりゃ、すばらしい。
老患者：植物学の専門であって、医学ではないんだ。何人もの病人を犠牲にして／a costillas de／概ね調剤し、あらゆる植物の特性をわしら試してなさるんだ。
PP　：ああ、肋骨（costillas）[16]なんて思い出させないでくれ！
老患者：大したことないなんて思わんでもらいたい。患者派、その雑草の毒でやられて死んじまうんだが、同じやり方で、別の処方を試そうとするんだ。
PP　：恐ろしい！
老患者：不幸なやつがガジョソ博士の実験室へ呼び出されて、遺体となって出てくるんだ。
PP　：あんたなら、わかるだろう！？おいらでも、あの先生のお気に入りとして呼ばれたりするのかなあ？・・・
老患者：はっきり言って・・・
PP　：タイプなんだなあ・・・（そこへ、ガジョソ博士と看護婦ペラヒアが登場する。）
EP　：おはようございます、ガジョソ先生。7番の患者は、異常ありません。昨夜寝てませんが、ひょっとしておなかが空いてるのではと思い、鰯のトルタ（サンドウィッチの一種）を持ってってやりましたところ、気絶してしまったんです。
DG　：ああ、そう・・・
EP　：まあ4番はとても臭いのきつい下痢してましたので、もしか研究用にと思って取ってあります。どうです？
DG　：ああ、いらん、いらん！そんなの捨てなさい！

EP　：ここに新入りがいます。そんなに悪いとは思いません。ただの二日酔いだと思いますよ。(とペラヒアは、PPの毛布を引っ張ろうとする。)
PP　：毛布を引っ張らないでくれ！このままでいいんだ！(一方、博士は、別の患者に関心を寄せ、そちらへ向かう。)
DG　：あなた、あなた！
患者A：なんでしょう？
DG　：わたしの研究室へ来なさい。一度きっちり直してあげよう。
EP　：さあ、従いなさい、そうしなさい。これっ、先生が待ってられるよ。(患者Aは、渋々連れていかれる。)
(ペラヒア、薬を分けながら・・・)
EP　：さあ、薬がきましたよ。誰のかしらね？・・・丸薬、粉薬にシロップ。これはあんたのでしょ・・・きょうはあんた、シロップね・・・
患者B：いやだ！水薬は！恐ろしい味がする。
EP　：我慢しなさいよ。苦いシロップほどよく効くものなのよ。しっかり混ぜておいてあげたわよ。丸薬でも悪酔いするんだからね、あんたは・・・
PP　：あのねえ、ちよっと・・・
EP　：いいえ、聞かないわ！午後には、きっと飲ませてやるよ。というのは、これから、もう食事の時間なんだから・・・(と立ち去るペラヒア)
老患者：でもな、これで助かったなんて思いなさんなよ。
PP　：もちろんさ。そう簡単にやられてたまるか。
(小さい鐘の音が鳴り渡る。)
PP　：ありゃ何だ？
老患者：食事の合図さ。腹は減ってないかい？
PP　：うん、少しはね・・・
老患者：じゃあ行こう！(枕もとから、食事道具一式を取り出す。)
PP　：こんなのどこから出してきたんだ？
老患者：枕の下からさ。病人の枕もとには、何でもあるんだよ。
PP　：じゃあ、行こう！(庭をウロついている多くの患者の様子を見て)これはいったい、何してるんだ？
老患者：食事を作ってるんだよ。
PP　：こんな草で？！
老患者：あの深ナベでこしらえてるんだ。
PP　：ほう、スクランブルの雑草か？でも、何で和えているんだ？
老患者：大きなスプーンで。
PP　：そんなことわかってる。でも、他に何もないの？
老患者：手伝ったら・・・でないと食べる権利がないんだよ。(そして、花のきれいな植物を手にしてむしゃぶりつくPP)
PP　：こりゃ、うまそうな草だ！
老患者：でも、ほとんどは危ない毒草なんだよ！こりゃ、ガジョソ博士個人の菜園で、

そこから先生は、致死的な処方を考え出しているんだよ。ほれ、また、担架だ！

PP ：またしくじったのか・・・

EP ：まただめでしたね、死にましたね、先生。

DG ：服用量の問題だな。だがよくわかったよ。すぐにまた、試してみよう。

EP ：じゃあ、そうしましょう、また、試してみましょう。（そして、DGが周囲の患者を物色する。）

DG ：あんただ！（とピト・ペレスを指名する。）

PP ：俺ですかい？ふさわしくないですよ、体が弱いんだから・・・

DG ：そりゃ結構！／mejor／

PP ：ちょっと待って下さいよ、ちょっと！とても元気だと言うつもりが・・・

DG ：なお、結構！！／mejor que mejor／

PP ：先生は俺を餌食にしようってんですかい？

DG ：さあて・・・

PP ：（略）

DR ：さあ、いっしょに来るんだ！おまえをきっちり治療してやる処方をみつけているんだ。

PP ：すいませんがね、先生！同じ毒ならテキーラ選びますぜ！／De veneno a veneno,opto por el tequila／[17]（と塀を乗り越えて病院から遁走）

〈17〉［ピト・ペレスと“片隅”の詩人］（再び画面は、“現在時”へ）

PP ：肋骨3本折ってて、どう逃げてきたのか、覚えちゃいない。

SR ：それで、話は、ピト・ペレス・・・

PP ：ああ、あのお陰で、病院の元気な患者たちのなかで、おいらが、唯一の生き残りさ。

SR ：あんたは、面白おかしく話しているが、そりゃ、意味があるんだろ！？医者ってのは、あたりまえに権力を乱用してたものなあ。

PP ：多かれ少なかれ権力持ってる連中ってのは、貧乏人たちをこき使うんだ。

SR ：その通りだ。

PP ：人間を変えていくのは、詩人さんよ、仕事の重みなんだ。地方ボスであれ、中央の高官であれ、馬鹿と専制君主と恥知らずは、同じものなんだ。

SR ：そうだ、あんたよく世の中見てるね？

PP ：専制君主の仕事ってのは、簡単さ。1年目、有力者へのおべっか。2年目、貧しい過去を思い出させる旧交の清算と、野望をかきたてる計画の創造。3年目、大きな夢の完成。4年目最終年、全権行使。

SR ：あの、ところで、あんたの人生談は？ピト・ペレス。

PP ：じゃあ、また、別の日にでも・・・

SR ：明日かい？

PP ：たぶんね・・・

SR ：ようし、じゃあ、また明日、ピト・ペレス。

PP　：さようなら、“片隅”の旦那、さようなら。／Adiós señor del Rincón,adiós／

〈18〉［次の日］PP姿を見せず。

N=SR　：ピト・ペレスは、次の日も、そのまた次の日以後も、やってこなかった。サンタ・クララから姿をくらまし、再び現れることはなかった。何ども何ども私は、彼がどこにいるんだろうかと自問してみた。ひょとして牢内で長い鎖につながれているのか？どこかの見知らぬ病院で息を引き取っているのやら・・・年のせいか、恐らくなまった痛々しい足を引きずっては、そうそう旅もできまい。ミチョアカンのやさしい土地ですら、今の彼にはとても厳しく思えることだろう。

FIN

（註）

*1：原作小説I-6では、通名El ocote（大工の“松っつぁん”となっている。

*2：原作I-6によれば、主人公はチュチァを死んだものとみなしているので、墓碑を勝手に想像して献花を手向けてやっているとしている。

*3：こうした台詞は、I-6の結末部分に対応している。

*4：Francisco J.Santamaría,Diccionario de Mejicanismos,Editorial Porrúa, Mexico,1974, P.1180によれば、アルコール飲料、地酒の意

*5：桑名一博他編集、『西和中辞典』、小学館、1990、によれば、gatoは雄猫とジヤッキの同音異義語。

*6：ここでのjarabeは、薬のシロップと踊りのステップ（サパテアド）のこと。

*7：William O. Cord, La vida inútil de Pito Pérez, Printice-Hall Inc., Englewood Cliffs, 1972, P.53によれば、次のように解説している。プティファル＝エジプト軍の司令官で、奴隷としてホセを有したが、それは養子にしてやるためあった。息子同様にホセは、プティファルの家で成長したが、主人の妻がとうとうこの若者を誘惑してしまった。ホセは耐えたのだが、やがて彼女の方が自身の名誉が損なわれようとしたと言明し、夫プティファルは、彼を投獄した。

*8：こうしたワイン盗み飲みの手口は、作者不詳、『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』（1554, 会田由訳、岩波文庫＝赤720-1、第1章）に対応。

*9：Frrancisco J.Santamaría, op. cit., P.1117では、「volado：硬貨を空中に投

げて、表彼を裏かで運を任せること。echar un volado：このような、あるいは、類似した方法で、問題や膠着状態を打開すること」とある。

*10：原作では、“務所”も病院も決して一続きのエピソードではなく、個別に扱われている。つまり、前者はI-7であり、後者はII-2である。

*11：前回掲載分のPP.97-98のことを示唆している。

*12：ピカレスク小説においては、スペインのみならず、僧服は、権威と嘲笑のシンボルであると言える。

*13：カルロス・ルビオ他編集、『新スペイン語辞典』、研究社、1992、P.355によれば、coleta：（闘牛士や昔の中国人の）弁髪、編み下げ とある。

*14：ロベルト・イトゥルビデモレリア市長在任（1904～05）のこと。

*15：この肋骨ということばは、前文下線の～を犠牲にして=a costillas de ～を受けている。

*16：原作では、opto por el tequila Cuervo（Jose Rubén Romero La vida inútil de Pito Pérez,Editorial Porrúa,Mexico, 1981, P.160）となっており、実在するブランドであるというリアリティ、並びにcria cuervos y te sacarán los ojos=恩をあだで返される（桑名他、『西和中辞典』、P.550）という医者—患者の関係性を想起させる。

『レ　ン　ガ』

オクタビオ・パス、ジャック・ルーボー、チャールズ・トムリンソン、エドワルド・サンギネッティ

太　田　靖　子※(訳)

[翻訳にあたって]

この作品は、オクタビオ・パスを中心とする、ジャック・ルーボー（フランス人)、チャールズ・トムリンソン（イギリス人)、エドワルド・サンギネッティ（イタリア人）の四人の詩人による共同制作の詩である。1969年3月30日から4月3日の5日間、パリのホテルの地下に籠り、編まれた。

パスは、この作品を日本の連歌形式の暗喩であるとしている。従って、その題名も『レンガ』とされた。複数の作者によって作品が編まれるという形式は、連歌と同じである。つまり、この作品は、ヨーロッパのシュルレアリスムと日本の連歌の融合したものといえる。『レンガ』は、I^1からVI^6までの計27編のソネットで構成されていて、水平的にも垂直的にも続けて読めるようになっている。つまり、$I^1 \rightarrow II^1 \rightarrow III^1 \rightarrow VI^1$（水平的）の順序でも、$I^1 \rightarrow I^2 \rightarrow I^3 \rightarrow I^4 \rightarrow I^5 \rightarrow I^6 \rightarrow I^7$（垂直的）の順序でも読める。四人が、それぞれ、14行のソネットの四つの部分、4行、4行、3行、3行をリレー式に書いて行く。例えば、パスがI^1のソネットの一連目、ルーボーがII^1の一連目、トムリンソンがIII^1の一連目、サンギネッティがVI^1の一連目と四人が同時に書き始め、次の連を別の詩人が書いて行く。この順序は、メンバーのひとりである数学者ルーボーが決めた。

$$\begin{array}{cccc} \rightarrow & & & \\ I^1 & II^1 & III^1 & VI^1 \\ \downarrow\ I^2 & II^2 & III^2 & VI^2 \end{array}$$

※おおた　せいこ（京都外国語大学非常勤講師）

I 3	II 3	III 3	VI 3
I 4	II 4	III 4	VI 4
I 5	II 5	III 5	VI 5
I 6	II 6	III 6	VI 6
I 7	II 7	III 7	

創作にあたって、彼らは、彼ら独自のある一定の決まりを決めたようである。例えば、最初の部分においては、一連目の最後の行から一つの語彙をとり、それと同じ語彙、もしくは類語を使って次の連を書くという決まりである。つまり、連歌の「物付け」である。そして、作品が進むに従って、連のつき方は、複雑になり、いわゆる連歌でいう「心付け」になっていく。

個人主義を尊重する西洋人のパスにとって、連歌のような共同制作の形は、我々日本人の想像を越える特殊な体験だったようだ。彼は、序文の中でレンガの体験を次のように述べている。「西洋の信念と一致しない実践であるレンガは、我々にとって一つの試み、小さな煉獄だった。それは勝ち抜き戦でも競争でもないので、我々の攻撃性は、行きどころが無くなった。征服するゴールも勝ち取る賞も打ち負かすライバルもいない。敵のいないゲーム。最初の日、1969年3月30日から4月3日の間、ホテル・セイント・シモンの地下のサロンで、私のいらだちと屈辱。」

また、その体験を五つの感覚で表現している。「寄る辺無さ、圧迫、恥、のぞきみ、回帰」恥の感覚のところでは、パスにとって、この初めての体験がいかに苦痛であったかということを述べている。「他人の前で私は書く。私の前で他人が。それは喫茶店で裸になるか、見知らぬ人の前で排泄したり泣いたりするようなものだ。日本人は、連歌を公衆の面前で裸になって入浴するのと同じ理由により、同じ方法で発見した。我々にとって、浴室と書斎は、絶対にプライベイトな場所で、ひとりで入るところであり、破廉恥かつ崇高な行為を行うところである。・・・」このように、全くプライベイトな場所で作品を作る西洋のパスたちにとって、複数の作者が、同じ空間と時間を共有しながらの『レンガ』の創造は、耐え難いものだったようだ。にもかかわらず、パスは、この試みを「私のした試みは、まったく自然に、西洋現代詩の伝統の中に書き加えられるものである。」と高く評価している。その理由は、彼自ら述べているように、創作におけるヨーロッパ個人主義の危機（作者は必ず個人であるという概念の危機）とそこから生じた共同制作詩への渇望に、連歌の共同性が対

応しているからだろう。

連歌について、寺田虎彦は、今からおよそ40年前に、日本文学の中の連歌が消えてしまいつつあることを憂い、次のような興味深いことを述べている。「其のうちに誰か西洋で毛色の変わった日本文学者が此の連句芸術を「発見」して、此れを驚歎し礼賛し宣伝する日が来るかもしれない。そうすると、丁度荷物の包装紙になって居た反故同然の歌磨呂や広重が一躍高貴な美術品に変化したと同様の現象を呈するかも知れない。」この寺田氏が予見していた毛色の変わった日本文学者というのがパスやもしれぬ。パスの業績は大きい。

この難解極まる詩を訳すことは、訳者にとって大きな冒険であった。作品の意味するものより、一つ一つの言葉のイメージとイメージの響合いを尊重する、シュルレアリスムのこの詩を日本語に置き換えても、この作品の意図するものは伝えられないかもしれない。しかし、パスたち四人の、文学的に非常に価値のある一つの試みを、雰囲気だけでも紹介できればと考えたのである。この邦訳は、あくまでも一つの試訳、一つの解釈にすぎず、訳者の誤解もあるかもしれない。皆様のご教示を賜ることができれば幸甚である。

尚、テキストは、スペイン語版を使用し、4ケ国語版を参照した。また、訳者のわかる範囲で訳注をつけた。

『レ ン ガ』

I[1]

凍えた骨の上を太陽が進む：
地下の密室では：懐胎：
地下鉄の入口はすでに雑踏(1)だ。
眠りが醒める：言葉がはじまる：

そして身振りを持たぬ物の言葉が溶けていく
影が、柱の縦溝装飾の
張り出した垂直の縁の下に集まって、
そのインクのしみを風雨に晒された石の割れ目の中にこぼすように：

なぜなら石は多分葡萄の木なのだから
蟻が彼らの酸を噴きかける石は

この洞窟の中で用意された一つの言葉なのだから

王子達よ、墓と棺よ、私は幽霊の泡を吐き出していた：
私のあごが砂の音節をかじっていた：
私は西洋の窓ガラスを通して聖遺物であり砂時計だった：

I[2]
しかし私の横顔は空っぽのひじかけいすの中で笑っていた、埋められた壁の上の、
私の手はマリージョー(2)の写真の白い輪の中で燃えていた：
3月30日私は彼女のフェルトの巨大な帽子の影ですでに一つの頭蓋骨だった：

その朝私は鞍をつけた馬をひいて出掛けた
観光ガイドの心の底の観葉植物の芯のように
私の痕跡をたばこの灰の中に残して

アンダンテ続いてスケルツォ（そしてどうしていけないの？）
よろめくスケルツォ、聖遺物と腐ったリンゴを売っている人、
ペルセポーネ(3)、パースペクス、
ケレス(4)と朝食のシリアル、インクの柱
と(フェルトリネルリ社出版の)サンギネッティの書いた『フェルトの帽子』：

私が書いている間こなごなになった月や、
剥製にされた豹からはぎ取られた爪や、頭蓋骨や、微笑や、
言葉の納骨堂の散らばりや、挿話の雨が私の上に落ちる。
私のページには愛嬌のあるねずみが輪になって走っている。

I[3]
そして君は歩を進める太陽も葡萄の木も埋葬しないだろう：
パースペクスの残骸や、絵葉書の風景や、
忘れられたフィルムのスプールから — 手に
手をとってエロス(5)と笑っているケレスが地上を再び取り戻す：

注釈（ギリシャ語の）：120日(6)

— ポール・サン・ジェルマン[7]へオクタビオと、
ジャンと、3月31日：ジャンは言う：しかしそこには3つの水準がある
（哲学には
居間には）そして2番目の水準（舞台の）は実行できない；例えば —
ぴったりと結びつけられた形：
それらは2番目の水準を実行している：

[注（ナワトル語で？）：西洋は言う：《エロスとケレス、
手に手を取って、など》しかし120日を実行する・・・（それを言わずに）
サド：私達が言わないこと；ルソー：私達がしないこと]

[コメント（1180）：アルヌー[8]：《それから枯枝が開花した・・・など》
そしてもっと遠くに：　《彼の恋人が部屋に入るための値段を持っている・・・》
（そしてダンテ《"雑草の中で石が溺れているように》）（ココロノヤミ：
心の闇！）]

I[4]
物体でなく挿話でなく音、その痕跡
その記憶の方法：分類される文章
（一般的な言葉でなく、この言葉）これは唯一の木だ

（抽象と瞑想のガラスを通して
私達は不易の月をじっと見るがその時、
忍耐でできた私達の服の上に秋の霜という武器を身に着けた・・・）

しかし三日目、ジャックは日本語の本をもって来た；私は一番目の本（D.K.[9]
訳）を取った、初めてそれを開き読んだ（138ページ）：
「おそらく部屋はとても暗かったので・・・」；
二度目（426ページ）：
「部屋と彼の心を包んでいる暗闇の中で」；
そしてもう一度、三度目（42ページ）：
「右の方に煙らせながら」；
そして私は暗い部屋の中でベンソンに火をつけた（特別のフィルター）：

灰と三日目の暗闇。一般的な言葉ではなく、
心に抱かれ聞かれた偶然性と本質のおしゃべりは
(その韻律は自分の立場を守ることができるだろうか？)
不均衡、熟れていない栗色の日没の合流の中で鎮静していた。

I[5]
そして《何世紀もの末に私は知る
自分が咳をしてよく見えない目であるのを》[オテル・ド・ヨークにいるボードレール、
今日は／
ホテルエトナ（Aの小猫達の上の熔岩)]（濡れたやすりの
ように）ほとんど消えかかっている古い写真をごちゃまぜにしながら

(絶えまない川のせせらぎ：地下鉄。
私は螺鈿の泥の川のことを考えている
それはほこりのつもった果てしないページ － パンジャブ、ビハール、
ベンガル — の上に無分別な演説を書いている・・・)

神話なしに私は私の現在、私の生地の中に入る
そしてま近い夜に、今や欲望もなく、ただ、分裂的な手で
私が奪った全てのものを戻すことだけ

わたしが塵埃となっている廃墟の中で：缶詰、役者の肖像画、
ソネット、排泄物：
ある日曜日の夜、静かな野原で、
日没の刻、自動車に彼が再び乗る時：

I[6]
夜のテレビのニュースの頃、ポーカー、ビュトール[10]の最新の本、
子供の声の入ったカセットレコーダー、
いくらか放心した愛撫、歯みがき、パジャマ：

あー、サド侯爵よ。ルソーよ — 性的ユートピア —

一匹の鮫とは、できる。しかし、私の親愛なるロートレアモンよ
(あー厳密な数学！) 人は象と交尾できない：

断片のユートピアや、エロテックな古着店や、
産業時代の古鉄の上に、
生殖の火事の火の粉が落ちる：
¡雨と降れ、熱狂、ソネット、炎の庭！

木の枝にすでに重くのしかかっている太陽から
非常に遠く離れた地下の文章の言葉の間の
樹木の殺戮の上に降り注げ

Ｉ'
丘の靄のかかった息づかい、
草原での驚き（君のアーチのもとで夜は眠る、
君の燠が夜を明かす)：蛇行する巡礼：
洞窟の口、開く石碑、呪文、
月：まぶたの寝室に私は入る、君の目は
鏡を溶かす：死者達のハマン
そして固有名詞のない復活：
私は無名の音節の一房だ。

地下の密室にはもう誰もいない
(巻貝、アンモン貝、響の家)、
螺旋形の寝言癖のある人以外は誰も、
歩き回る君の目が、
口に出すと消し去る文字、— そして君も消される、君自身も
巻貝も、アンモン貝も、空っぽの部屋も、読者も。

Ⅱ'
愛せよと 彼らは叫んでいた　非常に高い枝から
重力を　愛せよとても低く地球が
のしかかっていた　愛せよと彼らは高いところで叫んでいた

(このように、私の天球よ、このように私の中で、ぶら下がって、
君は夢を見る。君はやさしく空を吹いていた：
そして私は自分の中に君の両極を探す、
君の舌[11]が私の車輪ならば、フエゴ島[12]、ルーボーの大地ならば、)

オレンジ、香水ビン、胸、ついに
納骨堂の空虚の中で決然とした天球。溶けた大地。

ケレス、ペルセポーネ、イブ、天球
地球、私達のりんごは苦い、誰が今はの際に
その愛の叫びを聞くのだろうか？

II[2]
遺骨と結末。
雲におおわれた月の出。曖昧でむなしい内破、
浸透、幽霊の染み：

私は君の体から私の体へと戻ってきた（時間）
君は君の体から私を見る（それは折の悪い時）

(私は君のこわれそうな膝のために蜜でできた虹を書いた、
陰鬱な映画館の中で私が柱頭行者[13]のシメオンだった時：
真夜中に、歩いていた礼儀正しい人達が私達の道を彼に確かめていた)

暗闇の外で暗い道に私達は入る
吸い取り紙のインクの歯のように
(そうしなければならなかった：イカのような月が暗闇の縁にあった)

II[3]
愛せよと　彼らは叫んでいた 既に休んでいる
軽さを愛せよ　飛んでいる最中の
持続性を愛せよ — すばやさの重力を

水の半分が陰っていた 空気の
半分が　黒いロンドは水に入っていた
そして夜は湖の半分だった
そして愛、単に命令にすぎぬ、ひとりひとりに
道は葡萄の木と石の礼儀を通ってはっきりとついている：

(時代である場所を横切って、モンタージュのきれぎれの対話である場所の
照明されたショーウインドーの前に、君は再び戻る
ドラゴン通り[14]を、君は君の階段を降りる：)

Ⅱ[4]
(私は、君をワインの中、石の中で見分ける；私は、君と一緒に、
基礎的な神託を読む — 例えば、アーヴル — コーマルタン[15]の駅に、
黒い鉛筆で、大文字で次のように書かれていたのを：
君はそれを無理に読む必要はない：)
私達は一緒にそこに発見しようとしている街の残骸や
石を読む（迷える蟻）

花の弾薬の褪せた色
防御柵の静寂の上に燃え上がる
速い白によって横切られたキヅタの本

キヅタの本、終わりのない本、自由な本：
1ページは1日、毎日はワインであり石であり
空気、水、言葉、瞬きであることの驚き。

Ⅱ[5]
(私は君の体の上でくつろぐ、
裏返しされたソネットの2番目の詩句の上のこの言葉のように：
これらの私の括弧の弱い指で君をつかむ)

私は力をいれずにオゾンとわらで君を抱きしめる

それぞれの詩節のはじめに君の音楽を私は繰り返す
来る日も来る日も（夜はカプフィニーダ[16]の歌である）

君は（括弧を）目を開けたり閉じたりする
このテキストが（唇、歯、舌を）意味を与えたり、拒否したり、与えたりするように：

視線と面立ちのこの枝細工の迷路の中で
生命の線であるこれらの行
これらの静脈のような葡萄畑：

Ⅱ[6]
これらの手は私達を自然な、
従ってより人間的に戻してくれる
なぜならより人間的な家柄であるから：

ビシタシオン横町を横切るとき、彼女は 私に言った：
「月をごらんなさい」と、そして私は見た — 月をではなく彼女を。

そして私の顔は水に映っていた（手のひら）
そして彼女自身は、多分、水だろう、
私がひどい暮らしをしていた所の水のくぼみだろう：

（その風景の中で又はそこに、ほとんど縁に：革命である
地上の風景：
　　そして風景の下にも、地下の部屋の中に、
ここに、遊びとユートピアの間に、詩情と真実の間に）：

Ⅱ[7]
愛せよ・・・彼らは叫んでいた　愛せよ それは
インクの休息である
それはカフェインのような泥
（毛管現象によって澄み切った頭）

そして広々とした疲れの方へ戻れ
白人や黒人奴隷売買の蝿を　君の灰色
の手 枝の上にレインコート君の

風景の水泡　愛せよ　全てが盲目である時
全てが不可能である　全ては

《根の切れた草　もし
水が君をそこに誘うなら》[17] である　愛せよと彼らは叫んでいた
雑然とした樹木から

Ⅲ[1]
与えられた物は地面。君はそれに縛られている
半ば見えるものを囲んでいる近さのフレームに
目が縛られているように：厚い、裸の
筆跡と空中の大枝の混乱：

樹々の混乱が与えられている、
限りなく細かいちりの
紙のきめの上の蝿　草
口　眼差しの地面の中の白さ。

君は戸惑って戻ってくる、散乱した混乱、確信がない虫
私の両まぶたの疥癬、虹のための剣、裸の景色：
君のへそは私の木の視線だ、
鎖やむちの開けたままの景色、私の血管用の注射器：

地面、木々、茂み、へそ、不動の光線
(アレス[18] とエロス)：文字が呼吸する：婚礼の海。

Ⅲ[2]
与えられたもの ― 石から海へ君へ：
家庭を探す音節の往来。(ソネット＝アンモナイト？)

なぜなら君の唇はマーマレードの迷路であり、
私の動物園のオリベスク[19]用のマッチの檻であり、
私の指の筆用の蓄音機のトランペットであり、
私の蜂の巣、私の死んだねずみのための庭だ：

私は君のカサガイの闘技場の中を散歩する
私は君の毛皮の氷原であり、私は君の巻毛のドブロン金貨[20]だ
私は君がみせびらかす羊毛に息苦しくなる
ゴング　私は君の笑いのシャープのもとで揺れる

そして言葉のあれこれの中で結婚と意味を求めて、
私が見付けるものは与えられた女性、つまり神話なしの存在、
そして君の心と精神の日常の確かさ。

Ⅲ[3]
私は自分の額に君の子宮の皺、
すなわち君の月経の麝香の香りの柔らかい指輪を刻んだ：
私は君のカレンダーのページの間に鉛色のリキュールを注いだ：
私は茸とシダを君の湖岸で育てた：

（誰か、見知らぬ人が、地下の密室に迷い込んで来て
こう言った：スーツケースを探しています。そして私は、
再び、（新生代の）古い洞窟が半開きになるのを見たそして、
暗い茂みの中で泡とその予言を見た。）

同じ残酷な埋没が私達を石から離す
そこでは紫外線の甘美な泉が、
自転車と金髪の女の子達が、大使館のバラ園が、
太陽の、田園のビールで洗われた窓が歌っている：

グジョン[21]の泉と織物、流れている石の中の水：
マンサール[22]、ルメルシェ[23]、ル・ヴォ[24]、ブルアン[25]の街。

Ⅲ[4]
夢でいっぱい？韻律でいっぱい。超現実主義のナルキッソス
川と建物が君のそばを通り過ぎている！

「夢のために疲れ切って！」私は別の蜂の方に振り向く
（教育的な雷雨、列挙の執念深い人）
検算の練習は穏やかな麻薬だ
チョークのきしむ音は唇のない巫女だ

湖の前のナルキッソスか海岸に図形を描いている
ユークリッドか？
外には、川と溺れている宮殿、
外には、電車、飛行機、出発 — どこが外？？

もう一度君の川で私は泳ぐ：
生まれていない息子のはっきりとしない顔の中に
自分自身を映すために私は全ての目を閉じる。
君の淡水の牡蠣よ。

Ⅲ[5]
どこ — そして何？「外」って何？その
創造に私は加わらなかったが今それは
私の中にイメージなどを入れる－記憶の結婚式又は喪失：
私が選ばなかった太陽のもとのヴォージュ広場[26]：

電話やスライド、テーブル・マナー、
友達、注釈つきの古典を体験するために：
1969年の4月[27]の昼下がりのモンタランベール通り(3階)の部屋での愛の行為を：
そして最後にこうしたことの最中に、
ティファニーの店で服を選ぶように急いで選ぶように：

それは物の外側だ — セットにうまく配置された —

身振りや、涙や、不自然な熱狂の賛辞を受け入れる
一方では最初から私達が持っている前兆の形式が
瓶の最後の陽気の中に少しずつ固まっていく：
外とは私達のいつものラテンアメリカ。
私達の内もまた外にある。

Ⅲ[6]
与えられた物は外であり（私達が入り込む地平線）
そして内（私達が創りだす直喩）だ。与えられた物：隔たり。

遠くから遠くに受け取った物
ボールと橋のむこう
スピードが草の中で
蝉から離れた駅を探る

今：彼らは出発の準備ができている：
十二分に確認された予備知識や
不利に両替されたフラン、手帳の中の住所、
献辞のある本を持って：
明らかな遠心性の衝動のもと
この、又はあの遠い大学に向かって：
新しいネクタイで：

私達が創作する？むしろ：解読するのだ：テキスト
と論破できない引用を：オルセー駅[28]の
切妻を（知られずに）飾っている
彫像の使者の贈り物を

Ⅲ[7]
言葉のうしろの言葉：
感触と視覚によって自らを教育する言語：
夜の帳のおりた町で、光の言語は
空間のなかった所に空間をあらわにする；

そのイメージと君の顔の間に：沈黙の言語；感触の充実性
おー私のアメリカ大陸、探検された私のニューファウンドランドよ、
言葉となった肉の黙せる充実;

韻律と夢：石の導管を通って
流れは輝きながらゆく：手の河川図：
水晶によって封じ込められたステンドグラスの世界：
ただ一つの顔に住んでいる複数の顔、
ペルセポーネ、私の町：その豊富な土地から生まれる
一本の言葉の木が、交錯した声が、一つのマドリガル[29]が。

Ⅳ[1]
一つの赤（私の霧の中の）、甘い、四つの黒（たち）：（厳しい）！；冬、時間：
私の雪と地獄、病弱者：しっかりと、上品に、君、物質；
しかし（鞍を置かれた一匹の馬が遠ざかる）：君は数字であり、無だ（右の方へ）：
アルファベット、数字：私達はあなたたちの秘めた誕生を告げるだろう
ケレスの穀物、ペルセポーネのざくろの実、
種子、村人、葬り去られた民族：時代！

そして暗闇が日々を養い、今、葉の樹脂を剥ぎ取られた
その揺れている屋根が、
霧の真っ只中で数字より以上のものを生み出すだろう輝きを
待っている、そしてケレスは暗号をふくらます：

あー車輪の真中で赤くて元気のない優しい盲人は、
多くの青 多くの黒 君、穀物のひとつながり
葉の井戸の数がふるえながら（万年雪のピッチの
微動）活発な雌狼（遠ざかって！）の君の陽気な閃きを開ける

Ⅳ[2]
もし君が、遠ざかりながら、ひっかき傷をつけたら［雪の爪の
下に：葡萄の木　一羽のコウノトリ（変化する何か）］
べとべとした空気の中で　君が行ってしまって［べとべとした煙り

白色（まるで心が夜の口に落ちるかのように)]

しかし現実の固さは
潮解性のシンタックスを拒否する。
関係は釣り合いを取って二元的なやさしさが
色彩をきれいに洗礼する：目の天国の中で爪は月のかけら：

変わりやすい確かさ、名付けられるやいなや消える固さ、
放浪する群島、
君の耳のカタツムリの中のさんごの聖歌。
四つの赤（私の夜の中に)；乾いた；一つの黒：(数学！)：あー
私の音楽よ！
私のナイル川は怪物の固い頭をまだ隠している：
(私は蹄を見る)（私はコーダを聞く)；私はチェスをする（２つの白［たち])

Ⅳ³
黒くもなく赤くもないこの紙の上の一つ（唯一）の音節
歩いている（うなだれて）一つの（音節）
質問している悲しそうな一つの音節（どうして？)：

この地下のバベルの外で、おしゃべりと
始まりの場所、初めて
時間の重さが測られ具現化して聞かれる場所、言葉から言葉へ

君の名前（輝く）が現れる；君の女性の暗号：君の記号；
(君の色)；君の声の光が；あー、何と見事に君の中に私は落ちていくことか、
私の喉よ！／
何と私は君の王国のテラスの上を這いずっていることか！（三つの緑）
私の辞書、私の代数学、私の唯一の言葉よ！

移動する音節、語義の
泡、情欲の代数学：
14段（世紀）のピラミッド

そして言葉は一つ ― 一点に収斂する透明さ。

Ⅳ[4]
私は湿った母音のトンネルを通り、
君は反射光の庭、視線の格子を通って。
明るさの中で私達は出会う。太陽は
君のお腹の黄褐色の競技場の中で私の影を食べる。

そして私は言っていた：
　　これで、私達は、しあわせ、この風の中を走ることが：さあ！
これらの馬に乗って；一日のこれらの色の中で、この音楽の中で！：
(お風呂で眠っていたトムリンソンは言った：それは自然である)；そして
(ジャンが言った：とても厳しい)：しかしこの場合我々は政治のかけひきが必要だ)；
　　[そして私は言っていた：しかしできないことがない（真実だ)]：

しかしバウキスとフィレモン[30]（退職した恋人たち）は消えた
庭と葡萄の木の集産化の中に。そして蓄音機の検査官は
(盲目の１つの赤）ブラインドの製造のために景色をくるくる巻いた。

　　それにもかかわらず
私は言っていた　　走ることで幸せと
　　ここ風の中を
中　　（また）
　風なし　　色なし　　温度
　　なし　　（一匹のナメクジ）
音楽　一曲　　そして私は言っていた
　　抽象的な

Ⅳ[5]
彼は言っていた（黒いＡ、白いＥ、赤いＩ、緑のＶ・・・）「Ｏは
彼女の目のＸ線と等しい；それは性に等しい。」ブルーのオメガ（私は言う)：
満ちあふれているばかりのゼロ、透明な時間の滴、裏のない存在。

彼は言った彼女は言った（「一人のこの対話」の
上の緑の揺れている屋根）：「これによってそれが性でないことを私達は知った：
街よ、私達は何が動かなかったかを見た」：

このようにして私達は、来る年も来る年も、押黙って、無表情に、
私達の石棺の上に積まれたままだった：
無垢な姿の、子供達は、
浅浮彫りの中で泣く
そして私達の名前は解読できない、
君の唇はひび割れている
しかし私達の中に観光客は、愛を見つける：

ヴィラ・ジュリア[31]のカップルが（エトルリア[32]の小鳥：青のち赤）
お互いに、微笑む — 一方噴水が叫んでいた、
燠のうえのクロイチゴの煮えたった鍋（カポディモンテ[33]、
ルカス・クラナハ[34]の帽子を被ったビーナスの乳房 — 蛇混乱）

Ⅳ[6]
イメージの引用とともに、困惑した結末に向かって
曲がりくねって進んでいるこの文章
キイチゴ（論争的なひとり言）、
この投槍の線、このラテックスの食道
木のように書かれる交霊術の案内役、アフリカの印象

そしてどのように私は変化したか：
［そして、結末をつけるため、一人のチャールズ・ポープが
（一人の無政府主義のトーリー党員）詩の共産化の中で
（一人の意識的な物活論者と、そしてみんな同じテーブルで）：
今日、ポップ詩人が、この地下聖堂に、この言葉遊びのために］：

そして私は共通の目的を取り巻く四つの声になった、
自己の螺旋の中に見失われている一つの自己、名付けることを
定義しながら：

そしてその螺旋は展開し否定するそして撤回された時言われている
沈んでいく太陽　中心軸
爆発する揺れ　天体 — 頭蓋骨
東から西へ北へ南へ上へ下へ言葉が流れる

訳注

1. <蟻の巣>という意味もある。
2. パスの夫人の名前
3. ギリシャ神話で、冥府の王ハデスの妃　黄泉の国の女王
4. ローマ神話で、農業の女神
5. ギリシャ神話で、恋愛の神
6. 『ソドム百二十日』のこと
7. サン・ジェルマン大通りというのはパリにある。
8. ダニエル・アルヌー（1150-1200？）、トルバドゥール（中世南フランスの宮廷付きの詩人。1180もアルヌーと関係する年代らしい。
9. ドナルド・キーンのこと
10. フランスの小説家、著述家。ヌーボーロマンの代表者（1926～）
11. <言語>という意味もある。
12. 南米大陸南端の島
13. シリアの行者：柱頭行者派の祖；30年間柱の上に住み説教した。
14. パリのサン・ジェルマン・デ・プレ界隈の通り
15. パリの地下鉄の駅
16. 古プロヴァンス語、<繰り返し句>のこと
17. 出典は「わびぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」)『古今和歌集』)
18. ギリシャ神話で、戦の神
19. 古代エジプトで、神殿の門前の左右に建てた白い石柱、パリのコンコルド広場にもある。
20. 1497年から1868年までスペイン、中南米で流通した。
21. 16世紀のフランスの彫刻家、建築家
22. 17世紀のフランスの建築家
23. 17世紀のフランスの建築家
24. 17世紀のフランスの建築家

25. 17世紀のフランスの建築家
26. 現存するパリで最も古い王立の広場
27. パスたちが『レンガ』を作った年月
28. パリの地下鉄の駅
29. 16-7世紀にヨーロッパで流行した叙事詩的な詩
30. ギリシャ神話の中で、プリュギアの貧しい百姓夫婦。
31. ローマにあるエトルスク博物館
32. 古代イタリアの一地域名、現在のトスカナ地方
33. ローマの近くのボルセナ湖に面した街、カポディモンテ国立美術館もある。
34. ドイツ、ルネッサンスの画家、版画家（1472～1553）

スペイン系ユダヤ人に関する日本語文献目録

坂東省次

飯塚一郎　「イベリア半島のユダヤ人」「イベリアの国土統一と異端審問」『大航海時代のイベリア人—スペイン植民地主義の形成』中公新書　1981

上田和夫　「イスラム・スペインのユダヤ人」『ユダヤ人』講談社現代新書　1986

上田和夫　「ユダヤ諸語」『言語学大辞典　第4巻　世界言語編（下-2）』三省堂　1992

臼杵　陽　「セファラディームおよびミズラヒームに関する研究動向—ヘブライ語誌『ペアミーム』を手がかりにして」佐賀大学研究紀要25. 1993

臼杵　陽　「第1次世界大戦前のエルサレムにおけるイエメン系ユダヤ教徒コミュニティ—アリヤ、入植およびセファラディームとの関係を中心に」オリエント36 (2). pp.67-82. 1993.

臼杵　陽　「〈地中海〉の記憶と蘇生—レヴァントのユダヤ人」現代思想23 (6). pp.158-169. 1995.

エブレオ、レオーネ（本田誠二訳）『愛の対話』平凡社　1993

笈川博一　「スペインでの栄光と没落」『イスラエルの国と人—中東を内側から探る』時事通信社　1986

笈川博一　『コロンブスは何を「発見」したか』講談社現代新書　1992

荻内勝之／篠田有史　「スペインとユダヤ人—もう一つの五百年」『コロンブスの夢』新潮社　1992

奥田　敦　「中世スペインにおけるユダヤ教とムスリム—シェテ・パルティダス第7部第24,25章をめぐって」国際大学中東研究所紀要3. pp.289-314. 1987／1988.

神吉敬三　「繁栄した中世のユダヤ人地区エル・カイ」「スペインとユダヤ教徒」「バルセローナのゲットーとユダヤ人追放」「キリスト教、ユダヤ教、イスラーム教が共存したヨーロッパ唯一の国」『バルセロナ』文藝春秋　1992

桐谷佳裕　「14世紀中期から15世紀初期カスティーリャにおける反ユダヤ運動の動向」史友（青山学院大学）19. 1987.
桐谷佳裕　「15世紀中期カスティーリャにおける政治的コンベルソ問題」史友（青山学院大学）20. 1988.
ケーガン、R.L.（立石博高訳）『夢と異端審問—16世紀スペインの一女性』松籟社　1993
ケラー、ウェルネル（迫川由和／天野洋子訳）「スペインにおける暗黒の世紀」「スペインにおける黄金世紀」「スペインの悲しい結末」「新月（トルコ）の救い」「コロンブスとともに新世界へ」「スペインとポルトガルにおける火刑」『ディアスポラ（上・下）』山本書店　1966
小岸　昭　「改宗拒否したスペイン系ユダヤ人—「セファルディ」追放から500年」　読売新聞夕刊9月3日　1992
小岸　昭　『スペインを追われたユダヤ人—マラーノの足跡を訪ねて』人文書院　1992
小岸　昭／徳永　恂　「対話＝マラーノを追う旅」へるめす46.　1993
小岸　昭　『マラーノの系譜』みすず書房　1994
小岸　昭　「マラケシュの歌」へるめす48. pp.38-50. 1994
小岸　昭／西谷　修　「マラーノの地中海的ヴィジョン」現代思想23.(6). pp.56-70. 1995.
小辻誠祐　「スペインのユダヤ文化」『ユダヤ民族—その四千年の歩み』誠信書房　1965
佐々木忠一　「国土回復運動（レコンキスタ）とユダヤ人の命運—スペインのユダヤ人の変遷」キリスト教史学30. pp.1-41. 1976.
佐々木忠一　「アラブ・ウマイア朝スペインにおけるユダヤ人の知的活動」日本大学経済集志（人文・自然科学編）46 別冊その2　p.75-93. 1977.
芝　修身　「純血法（スペイン）」アカデミア（人文・自然科学編、保健体育編）26. pp.131-163. 1976.
芝　修身　「1492年のカスティーリャ王国におけるユダヤ人追放—社会・政治構成との関連における検討」アカデミア（経済・経営学編）71.　pp.213-254. 1981.
芝　修身　「1492年のカスティーリャ王国におけるユダヤ人追放—国王の追放理由」アカデミア（経済・経営学編）73. pp.249-281. 1981.
芝　紘子　「〈研究ノート〉15世紀後半のカスティーリャ王国におけるユダヤ

人の土地所有と農業」スペイン史研究1. 1983.
芝　紘子　「〈研究ノート〉中世カスティーリャのユダヤ人との共存意識について」スペイン史研究3. pp.33-45. 1985.
関　哲行　「中世における都市共同体とユダヤ人—11～13世紀の巡礼都市レオン」歴史学研究638. pp.69-78. 1992.
関根謙司　「コルドバとともに生きた人々（2）Judaeo-Arabicの思想」文京女子短期大学紀要（英米英文科）23. pp.87-95. 1990
関根謙司　「コルドバとともに生きた人々（1）ユダヤ社会の構造」文京女子短期大学紀要（英米英文科）22. pp.201-209.1989.
関根謙司　「イブン・ハズとシュムエル・ハ・ナギド—アラブ人の文人とユダヤ人の詩人の邂逅」文京女子大学研究論集1. 1991.
滝川義人　「スペインのユダヤ人」「スファルディ（スペイン系ユダヤ人）」「ラディーノ語」『ユダヤを知る事典』東京堂出版　1994
玉置さよ子　「西ゴート王国の反ユダヤ立法—王国前半期の検討」寧楽史苑（奈良女子大学）1988
玉置さよ子　「西ゴート王国の反ユダヤ立法—エルウィク新法（681年）の検討—」西洋史学167. 1992.
中堂幸政　「セファルディウム系ユダヤ人と「近代世界システム」—「移行論争」への視角—」世界経済7月号　1993
テスタス、ギー／ジャン・テスタス（安斎和雄訳）『異端審問』白水社　1974
ティティンゲル、S.（石田友雄訳）『ユダヤ民族史5.近世篇、現代篇I／ユダヤ民族史6.現代篇II』六興出版　1978
徳永　恂　「異端審問—ユダヤ人の悲劇」中央公論6月号　1991
徳永　恂　「敗者の歴史—反ユダヤ主義思想史1」みすず370. p.90-97. 1992.
徳永　恂　「コロンブスと「ユダヤ人問題」—反ユダヤ主義思想史2」みすず371. pp.14-25. 1992.
徳永　恂　「現代にまで差す光と闇—コロンブス500年—スペインの紆余曲折」朝日新聞3月12日夕刊　1992
徳永　恂　「（エッセイ）海辺の墓地—白のアラベスク」へるめす48. pp.30-37. 1994.
徳永　恂／小岸　昭　「（旅の報告）モロッコのユダヤ人たち」へるめす　48. pp.12-29 1994
徳永　恂／小岸　昭　「対話　旅とユダヤ思想—スペインからポルトガルへ」

へるめす 48. pp.114-132. 1994
中山直次　「スペイン系ユダヤ人の言語—音声的特徴を中心に」日本大学人文科学編15 (3). 1984.
丹羽光男　「(研究ノート) スペイン異端審問制度創設の時代背景について」東京工科大学紀要2. pp.155-169. 1992.
林　邦夫　「15世紀前半カスティーリャにおけるコンベルソ問題」歴史学研究461. pp.1-17,37. 1978.
林　邦夫　「カスティーリャにおける異端審問所の成立」鹿児島大学教養学部研究紀要31. pp.51-75. 1979.
林　邦夫　「カスティーリャにおける異端審問制の初期的展開」鹿児島大学教育学部研究紀要32. pp.32-57. 1980.
林　邦夫　「15世紀カスティーリャにおける対ユダヤ人政策」鹿児島大学教育学部研究紀要33. pp.19-42. 1981.
林　邦夫　「中世カスティーリャにおけるユダヤ人に関する地方史的研究の動向」鹿児島大学教育学部研究紀要（人文社会科学篇）34. pp.45-66. 1982.
林　邦夫　「バルトロメ・カランサ研究の動向—16世紀スペインにおける異端審問の個別事例として」鹿児島大学教育学部研究紀要35. pp.49-76. 1983.
林　邦夫　「〈ラ・グアルディアの聖なる子〉事件覚書　史料と研究史について」鹿児島大学教育学部研究紀要38. pp.25-51. 1986.
林　邦夫　「〈ラ・グアルディアの聖なる子〉事件—その実在性について-1-,-2完-」鹿児島大学教育学部研究紀要40. 1989, 41. pp.15-36. 1989.
林　邦夫　「リョレンテとスペイン異端審問」史海（東京学芸大学史学会）40. 1993.
バルデオン・バルーケ、フリオ（五十嵐一成訳）「14世紀カスティーリャ王国における社会的葛藤と反ユダヤ教徒運動」札幌大学教養部紀要25. pp.1-14. 1984.
ヴィーゼンタール、S.（徳永　恂／宮田敦子訳）『希望の帆—コロンブスの夢ユダヤ人の夢』新曜社　1992
藤田一成　「中世スペインにおけるユダヤ人の役割について」神奈川大学人文研究61. pp.73-103. 1975.
藤田一成　「反ユダヤ主義の構造」神奈川大学人文研究67.pp.33-66.1977.
藤田一成　「ユダヤ人問題の変質—コンベルソ大量出現の背景」神奈川大学人

文研究69. pp.75-109. 1978.
藤田一成　「ユダヤ社会再生の気運」神奈川大学人文研究81. pp.1-34. 1982.
藤田一成　「中世スペインにおけるスペイン・ユダヤ社会の没落」神奈川大学人文研究83. pp.1-34. 1982.
藤田一成　「ラ・グアルディア村儀式殺人事件（I-II）—スペインにおける血の中傷—」神奈川大学人文研究87. pp.61-86. 1983, 88. pp.31-48. 1984.
藤田一成　「中世スペインにおける王族とユダヤ人の関係—ユダヤ人侍医をめぐって—」神奈川大学人文研究91. pp.33-70. 1985.
藤田一成　「ユダヤ人に対する血の中傷—儀式殺人および聖体冒瀆をめぐって—」神奈川大学人文研究86. pp.1-36. 1983.
藤田一成　「中世スペインにおけるユダヤ人と医術」ユダヤ・イスラエル研究11.1988.
船橋洋一　「スペインとユダヤ—東と西の歴史的和解—」週刊朝日4月24日 pp.172-173. 1992.
ベナサール、F.（五十嵐一成訳）　「国家に奉仕するスペインの異端審問所」札幌大学教養部紀要16. 1980.
ベンサソン、H.H.（石田友雄編／村岡蒿光訳）『ユダヤ民族史3.中世篇I, ユダヤ民族史4 中世編II』六興出版　1977
増田義郎　『コロンブス』岩波書店　1979
マルケス・ビリャヌエバ、フランシスコ　「「セレスティーナ」に見るイベリア・ユダヤの伝統」『スペイン文化シリーズ講演集（1990-1993）』2. pp.61-79. 上智大学イスパニアセンター　1993
マルケス・ビリャヌエバ、フランシスコ　「トレード翻訳学派新考」『スペイン文化シリーズ講演集（1990-1993）』2. pp.37-60. 上智大学イスパニアセンター　1993
三原幸久　「現代イスラエルにおけるユダヤ系イスパニア語の特徴—主として品詞論と語彙を中心に—」HISPANICA 8. pp.16-29. 1963.
三原幸久　「現代イスラエルにおけるユダヤ・イスパニア語の音韻」天理大学学報15(2). pp.238-198. 1963.
宮前安子　「16世紀スペイン異端審問の展開—モリスコ問題とカスティリャ異端審問」『西洋中世のキリスト教と社会』刀水書房　1983
宮前安子　「〈研究ノート〉16世紀におけるスペイン異端審問制度の地方的展開をめぐって—最近の研究動向を中心に」スペイン史研究2. 1984.

宮前安子　「バレンシア異端審問裁判管区における官僚制度について—17世紀を中心に—」スペイン史学会会報36. pp.2-4. 1991.
宮前安子　「スペイン国立文書館『異端審問セクション』について—最近のスペイン異端審問研究とその史料状況」三田史学61(3／4) pp.195-208. 1992.
宮前安子　「1492年の「ユダヤ教徒追放令」をめぐって—スペイン中世のユダヤ人」月刊百科4月号 pp.4-11. 1993.
湯浅赳男　『ユダヤ民族経済史』新評論　1991
ロス、シーセル（長谷川　真／安積鋭二訳）『ユダヤ人の歴史』みすず書房　1961

編集後記

REHK第3号が刊行の運びとなりましたので、お届け致します。会員各位の労作に加えて、元立命館大学助教授の尾崎明夫先生、天理大学助教授の近藤豊先生そしてセルバンテス研究家の世路蛮太郎氏から珠玉の論文をお寄せ戴き、素晴らしい研究誌（REHK）が刊行できました。

昨秋、本学で開催された第三回「修士会」研究会では、尾崎明夫先生をお招きして、小誌掲載のテーマで大変興味深いご講演を頂きました。しかし、尾崎先生には残念ながら今年3月末をもって立命館大学をご退職され、現在は長崎において新しいお仕事に励んでおられます。先生の益々のご活躍をお祈りする次第です。

天理大学の近藤先生には会員の片倉先生（天理大学助教授）を通して論文の執筆をお願い致しましたところ、ご快諾を戴き、ご多忙にもかかわらず原稿用紙60枚に及ぶ労作をご執筆下さいました。先生の論文は今号と次号の二回に分けて掲載致しますので、後編もご期待下さい。

九州は鹿児島で私設図書館「セルバンテス文庫」を設立されるなど、日本のセルバンテス研究の発展に大いなる貢献を続けておられる世路蛮太郎氏にもご執筆を依頼しましたところ、快くお引受下さり、早速に小誌掲載の論文をお送り戴きました。セルバンテス研究者あるいは愛好家には待望の論文となることでしょう。正路氏からの私信によれば、1997年はセルバンテス生誕450年に当たる由、二年後には是非とも記念論文集を刊行できればと思っております。

会員の浅若みどり先生と梅田美代子先生はともに今年の3月に修士課程を修了されたばかりですが、大学院でのご研究の成果を早速ご発表いただきました。両論文ともにすぐれた内容のものであり、今後のご両名の活躍が大いに期待されます。

今号では、従来の<<講演>>、<<論文>>、<<翻訳>>に<<資料>>の分野も新たに加え、「スペイン系ユダヤ人に関する日本語文献目録」を掲載しました。今後もスペイン語圏に関する日本語文献目録を分野別に掲載してゆく予定でおります。

1992年の所謂「スペインイヤー」にはスペインものの出版が相継ぎ、日本におけるスペイン研究の水準の高さが見事に証明されました。しかしながら、その後、スペインものの出版は極端に減少しており、やはりスペインものでは採算がとれないものかと一抹のさびしさを覚えております。そんな中で、1992年に設立されたスペイン文化省の「グラシアン基金」の存在は大変貴重であります。同基金の助成を得て、『スペイン中世・黄金世紀文学選集（全七巻）』『中級スペイン文法』『現代スペイン演劇選集』『完訳 コロンブス航海誌』など待望の著書・訳書が着々と出版されています。そして『ルイス・ビーベス』『もうひとつのスペイン史—中近世の国家と社会』『マラーノの系譜』『中南米のスペイン語』『日本見聞記（ロドリゴ・デ・ビベロ 1609年）』の刊行にも注目しなければなりません。労作が少しでも多く出版されることを祈るばかりです。

小誌「REHK」は会員の研究発表の場として出発しましたが、前号からすでに会員以外の方々の原稿も掲載しております。今後も内外の研究者にスペイン語圏に関する論文の執筆を依頼し、さまざまな角度からスペイン語圏に接近を続けて行きたいと願っております。（坂東省次）

REHK (Revista de Estudios Hispánicos de Kioto) 第3号
1995年7月1日　印刷
1995年7月1日　発行
発　行　所　京都外国語大学イスパニア語学科修士会
〒615 京都市右京区西院笠目町6
責任発行者　坂　東　省　次
印　刷　所　都　印　刷
〒600 京都市下京区北小路新町西入る

REVISTA DE ETUDIOS HISPANICOS DE KIOTO

No. 3

Conferencia:

Una consideración sobre el "Llibre dels feyts" de Jaime I de la Corona de Aragón ····· Akio OZAKI (1)

Artículos:

Sobre el verbo Ir + se (primera parte) ····· Yutaka KONDO (11)

Traducción ilustrada de *Don Quijote* ····· Bantaro SEIRO (23)

Los hombres de placer de Velázquez —Su realismo como metodología visto en "la serie sedente"— ····· Midori ASAWAKA (39)

Una consideración sobre la elisión y la permutación en la coordinación Ichiro MIKI (51)

Los sintagmas nominal y preposicional de tiempo en el complemento circunstancial —función de la preposición— ····· Setsuko MUTO (61)

Julia de Burgos en lo político y literario ····· Yoshiko SHIGAKI (69)

Pablo Neruda: La imagen mítica de "Alturas de Macchu Picchu" ···Miyoko UMEDA (79)

Una observación sobre el aspecto verbal en la lengua española —desde el punto de vista estructural— ····· Toshihiko YONEDA (93)

Traducciones:

Paloma Díaz-Mas: El judeo español (segunda parte) ····· Shoji BANDO (103)

Fernando de Fuentes y otros: Las Aventuras de Pito Pérez (II) ···Juzo KATAKURA (119)

Octavio Paz, Jacques Roubaud, Edoardo Sanquineti y Charles Tomlinson: *Renga* ····· Seiko OTA (141)

Datos:

Bibliografía japonesa sobre el judeo español ····· Shoji BANDO (161)

1995

Asociación de Licenciados
Departamento de Estudios Hispánicos
Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto